

真山青果

焰の舞

第一分冊「出札所」 第一章～第六章

翻刻と現代語版

底本＝新潮社・大正八年（一九一九）刊 全四八四頁

国立国会図書館デジタルコレクション（インターネット公開・保護期間満了）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/962869>

翻刻・現代語訳＝成沢家の記録プロジェクト（AI 補助） 二〇二六年七月二十七日

※翻刻は AI による書き起こしです。※印は判読に自信のない箇所です。

この本について

真山青果（まやま・せいか、一八七八～一九四八）は仙台に生まれた小説家・戯曲家である。この『焰の舞』は、大正八年四月から東京日日新聞に連載され、同年十二月一日に新潮社から刊行された。全四八四頁。

ところがこの作品は、『真山青果全集』の旧版（全十五巻）にも新版（本編十八巻・補巻五巻・別巻二巻）にも収録されていない。そのため長く「幻の作」とされてきた。父・成沢義雄が若い頃に探して見つけれなかったのも、このためである。

主題は、明治初年に国策として断行された**野蒜築港**——その壊滅の悲劇である。青果は二高医学部を中退した失意の時期、仙台から石巻へ職を求めて歩く道すがら、**野蒜の廃墟**を自らの足で踏み、そこに空しく建つ**紀功碑**を目にした。以後、彼が野蒜を再訪することはなかったという。

わが家の系譜において、**大沼十右衛門**は晩年、野蒜築港と運河造成に尽力したと伝わる。この小説の舞台は明治十一年から十七年——まさにその時代である。「おじいちゃん・おばあちゃんのことを書いた小説」という家の言い伝えは、世代を考えれば十右衛門の世代の物語を指していたと考えるのが自然である。

なお、本文を全文検索した結果、**作中に「大沼」姓の人物は登場しない**。主人公は子爵・成瀬淳作と、野蒜の旧家・遠山家の人々である。したがって「うちの誰かがモデル」という部分には、いまのところ裏づけがない。

本書は、その原本を活字に起こした**翻刻**と、旧字・旧仮名に馴れない読者のための**現代語版**を、章ごとに並べたものである。第一分冊は第一章から第六章まで。物語は、小牛田の駅で子爵が謎の娘に切符を買ってやる場面から始まる。

第一章「出札所」

解題

- ・主人公は子爵・成瀬淳作（なるせ・じゅんさく）。家を出て三月、あてもなく奥州を旅する若い華族。
- ・舞台は小牛田（こごた）停車場（東北本線と新庄線＝陸羽東線の分岐駅、遠田郡）。涌谷・鬼首など実在の地名が出る＝野蒜・遠田の土地に根ざした小説であることが冒頭から明確。
- ・無一文で東京行きを望む謎の娘に子爵が切符を買ってやる。娘は心臓型の台金に紅宝石でローマ字「E」を刻んだ指環を渡す（＝後の伏線とみられる）。
- ・発車間際、改札の木柵に娘と瓜二つのもう一人の娘が現れ、涙ぐんで汽車を見送る——章末、夕日が娘の顔に焰のように燃え上がる（題名「焰の舞」の最初の火のイメージ）。
- ・★第二章「海鳴」冒頭（17 頁）で、見送った側の娘が富乃（遠山家）、駅に淀爺（築港主唱者三人の生き残り）がいることが判明。＝汽車で去った娘は富乃の姉。
- ・大沼姓の人物は登場しない（全文検索 0 件と整合）。

翻刻（原文どおり）

出札所

（一）

青森発上野行の第××列車は、着駅の時間にもう間がなかつた。

東北本線と新庄線の分岐駅、小牛田（こごた）停車場の出札所の前には、湯治帰りらしい中産百姓の一家族や、馬所めぐりの博労（ばくろう）や、鰻仲買、田舎請負師、廃兵でだちの薬売や、草鞋がけの人足を連れた耕地整理の土木技師などがガヤガヤと集まつて、昔式木造の鳩穴（はとあな）の明くを待つてゐた。

黄疸色に年寄つた村巡査が、さつき一度入口に顔を出し、おつとめに一渡り待合室の中を見廻してゐたが、その群集を離れて一人、薄暗い小荷物扱所の壁に凭（もた）れて、ボンヤリと表の方を眺めてゐる紺メルトンの若紳士を見付けると、胡散さうに慳（けん）い目をちよいと働かせた。が、これも事項※ぢやない——と、老巡査は生欠伸の涙を目に溜めながら、駅前の広場をボクボクと向側の駐在所に戻つて行つたきり、秋日を真向のこの田舎停車場には、まるで人出入がなかつた。たゞ時々、町はづれの榛木（はんのき）並木を透して、涌谷（わくや）通ひの乗合馬車の喇叭の音が、静かな田舎町の昼を、遠く近く漂はして来た。若い紳士は目に沁むもののやうに、ゆつくりと老巡査の後姿を見送つてゐたが、やがて、物寂しげな視線を、広々した耕土の方へと放つた。

もう秋だ。来るにも遽（あわただ）しいが、去るにもまた遽しい雪国の夏。その夏の別れの心悲しさは、真夏よりも明るい日射の底に冷々と流れて、結実前の青田の稲は、目に見えぬ風にサヤサヤと、一筋の葉裏を鳴らした。遠く打続く鬼首矢柄※（おにこうべ・やがら）の山系は、藍色から紺色に、山々の襞が鋭く錆びて、日に深くなりゆく奥州の秋を思はせた。

遠く眺める若い紳士の眸は、佗しげにうち曇つて、自然と目を足許の土に吸はれる——この若紳士、子爵成瀬淳作も三月この方家を出て、あてもなく奥州路を彷徨ひ歩いた長旅に、体も心もすっかり萎えきつてゐた。足許の三和土（たたき）には眩しい西日がチラチラと戯れて、さつき博労が喰ひ棄てた梨子の皮が、チリチリと縮れ上つてゐた。

コトリと出札所の戸が鳴つた。その物音にガアガアと喋り立てゝゐた乗客は、急に慌てゝ鳩穴へつゞく順番の縦列を作つた。正面の時計を見ると時間に六分しかない。子爵も壁を離れて立上つた。誰に待たれるでもない東京行きの切符を買ふべく押れながらその列の後に立つた。

子爵のすぐ前には高慢さうな土木技師が突立つてゐた。軍人上りと見える巖乗（がんじょう）な肩幅をゆすぶりながら相手もないのに痼癩筋をふり立てゝ、地方駅員の不深切やら出札係の緩慢をプリプリ罵しつてゐた。直ぐ後には大風呂敷を背負つた田舎婆さんが、喘息らしい咽頭をゼイゼイ鳴しながら、この汽車に置き去りを喰はされてはとキヨロキヨロして、子爵の背筋を掴んで

押付けて来る。その度にムンとした腋臭の臭が、旅やつれの子爵の面を打つた。

「大丈夫ですよ。あなたを乗せないうちに、汽車は出やしません。」

子爵は自分も苦しい。振返つて幾度も慰めた。でも強力な田舎婆さんは、乗つて安心する迄は、誰にだつて騙されるものかと云ふ意気込で、力任せに遮二無二押詰めて来る。

「困りますね。ぢや私の前にお立ちなさい。」

「何んでも好いだ、好いだ。早く……切符を買ふだ。」と真剣に周囲を睨めてゐた。

その時子爵は、グッと肩を掴まれた。前に立つた土木技師が、大声に話しかけてゐたのだ。

「ねえ君、あゝ図々しいんだよ。停車場へ来る度に、好く見る図なんだが、それが又若い女に多いだよ。」と、プリプリして札幌の方を睨み付けてゐた。

「そりや男性には、弱者を扶けてやる雅量があつて欲しい。然し女がだね、男に道をあけさせるのが自分等の特権と心得てゐやがるのは容赦出来んだらう。ねえ君。」と執拗（しつこ）く指差して見せた。確かに少しは酒もあつた。

出札所の柵木の前には、背の高い十八九の娘が、大きな目でこちらを見ながら立つてゐた。カタカタ※と町の方から駈込んで来たののだが、乗客がもう切符

の列を作つてゐると見ると、何んの躊躇もなくカツカと柵木の前に立寄つた。
順序を待たずと、そこから反対に割込んで、無理にも鳩穴へ近付かうとしてゐるのであつた。

(二)

娘は薄い桜の齒の日和（ひより）※を穿いてゐた。その後齒に踵を持たせては、故（わざ）とキチキチと三和土の面に軋ませつつ、小怜（こざか）しげな目を煩さく彼視此視（あちみこちみ）しながら、縦列の動き出すのを待つてゐたが、直ぐ前の人は肱なぞを立て、横目に睨んで皆が自分を禦（ふせ）いでゐる様子に気が付くと、それが又可笑しくなつて、娘はクスリと糸齒で笑つた。俯向いてクスクス笑ひながら、袖口の仕付糸を前齒で抜いてゐた。粹柳に鼓の胴を抜鹿子※にした派手な友禪の帯にしては、切繻織※とか云つて以前に流行つた銀鼠色の屑糸の袷に、本紅の袖裏を見せたのは、この辺の者の目にも、もう遠い昔の流行であつた。

「君、あれですよ。洒々（しやあしやあ）したもんだ。誰か番を譲るだらうと待つてゐるんだ。」土木技師は一々娘から目を放さなかつた。ペツと唾を吐いて「ねえ君、あんな者に対して何が雅量だ。あの無遠慮さを見たまへ。ねえ君、あの面……。」

若い子爵は少し頬を染めて目を伏せた。穏かな華胄（かちゆう）教育をうけて来た子爵は、怒ると云ふ表情に馴れてゐなかつた。この場合の技師の激昂も誰のためともなく、たゞ恥しかつた。

「ねえ君、許して置けますか、あの図々しさ……。」

「無遠慮の図々しいのと云ふ訳でもないでせうが……。」と、子爵は為方（しかた）なさうに答へた。「男と女とは器官が違ふので、矢張り……他の援助を待つのでせう。」

「で、君は、何んな無作法でも、それが女だから宥（ゆる）すと云ふんですね。」

「そんな訳ぢやないですがね。」

「待ちたまへ、君。それが女だから宥すと云つたね。然う云ふ者があるから、女が増長するんだ。然う云ふ解釈の奴は、席を譲るとも背中を貸すとも勝手にするが好いさ。へん、年頃の娘ですからな。」

「難有（ありがと）う。」と子爵は静かに微笑した。

「難有うだつて、君。では君は——。」

と技師が何か言続けようとする時、鳩穴がコトリと開いて、縦列はゾロゾロ動き初めた。

娘は、でも柵木の傍を動かなかつた。隙あらば割込んで鳩穴に近付かうとするのを、一人々々に拒まれて苦笑ひしながら、性懲りもなく次の機会を待つてゐる。その度に気忙しくキイキイと日和の齒を三和土に鳴らすのが、グツと土木技師の怒気を苛立てた。出札所に近寄りざまに粗相の顔して、強（したた）か小娘の足を踏み付けた上、肱に任せてグイと娘を突き飛ばした。

「痛……………」

娘はよろめいて足先を掴んだ。見上げた顔は眉を顰（ひそ）めて、癩性らしく技師を睨めてゐたが、口唇から直ぐ例の人を馬鹿にした狡猾な薄笑に綻びて行つた。平気で又柵木に寄つて来た。

この益体（やくたい）ない無作法がグツと子爵を急き立てた。前後の思慮もなかつた。泣声でしがみ付く田舎婆さんを背中に怵（こら）へて、踵に力を籠めて数秒間を踏み止つた。娘に機会を与へたのである。娘は他の好意なぞ見とめてゐる暇がない。ヒラリと柵の内に飛び入ると、勘定台に両肱を凭せかけ、鳩穴の中を覗き込むやうに顔を突込んだ。

「あの切符を下さいな、切符。私お金無いんですがね、これを預けて置きますから、切符を下さいな。」

娘は少し訛のある、然し強い声で然う云つて、指に簞（は）めてゐた指環か何かをそこへ投出した。然し、余りそれが不意の出来事なので、子爵の耳に駅員の答は聞き取れなかつた。

「でも私、この汽車でないと。本当に困るのだから……大丈夫ですよ、この指環。棄売※にしたつて切符代ぐらゐになるわよ。」

出札係は面倒臭さうに、「こゝはね、地金屋ぢやないんですよ。お錢（あし）が無ければ切符は出せません。はい。お次番。」

「だつてさ……。」

「何うしたんです。はい、次番。」

「弱つちやつたな私……。」と娘の声は幾らか顫（ふる）へてゐた。「この汽車に乗れないと……大変な事になるんだもの……。」

「次番！」出札係は到頭突ツ撥ねた。

（三）

子爵につゞく縦列はゾロゾロ騒つき初めた。着車時間が段々と迫るのに、娘はまだ出札口に遲疑（ぐず）について何かボンヤリ考へながら、後を塞いでゐるので気が気でない。余計なおせつかいをするからだと云はぬばかりに、みな子爵一人を目蒐（めが）けて、背後からウンウン押立てた。間に挟まれた喘息婆アさんなぞは、苦しさに悲鳴を立てながらも、掴みついた子爵の背筋を放しはしない。掛合ひだ。子爵も打遣つては置けなかつた。娘の傍に進み寄つた。

「切符なら私にお任せ下さい。何処までお出（いで）ですか。仙台ですか、それとも福島？」

「え、切符……。」と、娘は少し途惑った目色で、「私……東京へ行きたいんです。」

「東京は何処です。矢張り上野ですか。」

「さア……、東京なのよ。」

「何等です。」

子爵は背後の暴力を踵で忖へながら、栗鼠革（りすがわ）の紙幣入を引き出して、

「何等？ さア……。」と、娘は又当惑してゐる。

「然うですか、では。」と子爵は鳩穴の前に立つた。「東京へ行くんです。何等でも構ひません。」十円紙幣を二枚投出して、「東京駅二等二枚。」と呼んで切符を受取つた。釣銭もロクに改めずに掻集めて、ホツと出札所を遁れ出した。

縦列は又ゾロゾロと動き出した。

成瀬子爵は射し込む西日を壁際に避けて、その娘に切符を手渡した。

「東京は何処でお降りになつても好いやうに、切符はわざと東京駅にして置きました。」

「有難う御在（ござい）しました。何から何まで……いろいろと。」

娘はそれでも丁寧に頭を下げた。改まると妙に余所々々しく、頼まれたやうな声に聞えた。それから先の指環を出して、「それぢやこの指環、差上げて置きますわ。棄売にしたつて御損かけやしないわ。」と釣銭を持つてる子爵の掌の上に置いた。

心臓型の台金に紅宝石で羅馬字のEの字を鏤（ちりば）めた指環で、この娘の持物には不似合なばかりではない、宝石の性によつては随分高価の品かも知れない。

「それは困ります。私はこれを目当にお立換したのぢやありませんから。却つて僕迷惑します。」

「それでも……。」

「旅の上のお困りは、誰にしても同じ事ですから、何うかこの指環はそちらに納めて下さい。お返し致しますよ。」

娘は眉の間に皺を寄せて、凝（じ）つと相手を見詰めてゐたが、突如に切符を子爵の鼻先に突出した。

「ぢや私もこの切符——要りません。」

「何うしてです。」

「貴方も指環を取らないから。」

「でも貴方には必要な切符でせう。指環とは問題が違ふんですから……。」

「いゝえ、要りません。私他（ひと）に物を貰ふのは厭です。」とズイと云つて、娘は切符を置いて行きさうにした。

「然うですか、ぢや兎に角、指環は一時お預かりする事にしませう。お預かりするので、御都合で何時でも取戻しに被来（おいで）つて下さい。私の名刺を上げて置きませう。」

子爵は内懷の名刺入から、**爵位を記してない方の名刺**を一枚取出して渡した。でも娘はロクに町所（ちょうしよ）を読まずに、クルクルと指に巻いて帯の間に挟んだ。

「何うで私、それを受戻しになんか行く時ないでせうから、貴方の方で、何うか好いやうになすつて下さいな。一度私の手を離れたんですもの、もう私の品ぢやないわ。」

「でも然し、それぢや貴方の御損ですつて。」

「それでも舶来よ。昔の昔の舶来です。世間に有触れた品ぢやないやうですから※。ほゝゝ。ぢやお取引は済みましたね。さやうなら。」

娘はぎごちなく挨拶した。足先に力の入った歩き方をする娘で、スラリと背の高い後姿が、何がなし西洋婦人を思はせた。

(四)

自分の云ふ事だけが用のやうに、振向きもせずサツサと出て行く娘の後姿を、子爵は拍子抜けして見送つた。軽い侮蔑を感じながらも、妙に心を引附けられた。ロマンスの巡礼者とも云ひたい子爵の空想好きな感情は、目前異常の出来事によつて、怪しいほど娘に対する好奇心を煽られてゐた。子爵は或詩人が不思議を探さば詩より物語より活きた世間に行け、偶然は何時も血塗な不思議であると云つた言葉などを思出しつゝ、今二台の乗合馬車を借切つて、際疾（きわど）く駈附けた古峰講社（ふるみねこうしゃ）の一団に押立てられながら、改札口を流れ出た。

西日の眩くプラットホームを歩みながら、子爵は又考へた。今こゝに一箇の田舎娘がある。身に一銭の貯へもなく、降りる停車場の名も知らずに、無論頼る身寄友達もなく、あの誘惑の渦巻く都会へ流れ入らうとしてゐる、そこには何か待構へてゐ、流るゝ先は何うなるだらう。恐らくこれがあの娘の一生を決める危い転機になりはすまいか。そして輕卒にも切符を与へて、その手を引いた者は自分である。自分は無意識の間に、人間一生の大事な運命を支配してゐたのだ……と、子爵は幾らか自分の浅慮さを悔みつゝ、渡橋の階段を上りかけた時、チラと目に止つて足を停めた。それは先刻娘に渡した名刺だ。クルクルと指に巻かれた形のまゝ、撒水の泥に半分汚れてゐた。

娘は手に紙表紙の小説と洋傘を持つてゐた。無論うつかりして落したものに相違ないが、子爵は何んとなく、故と当附けに投げられたやうな羞恥を感じる

と共に、娘の為に種々に考へるのが馬鹿々々しくなつた。ちよいと靴先で蹴ると、名刺はクルクルと下に落ちた。

汽車は子爵の予想通り何分か遅れてゐた。乗換駅らしい長い昇降場は、今着いた団体も混つて人数が増してゐたが、背高い娘の姿は中でもハツキリと判つた。片手に洋傘を引擦つて片手を懷に、袂をブラブラさせながら、プラットホームの故と危ない縁石の上を綱渡りでもするやうな恰好で行つたり来たりしてゐた。

娘は自分を避けてゐる、と子爵は思つた。素知らぬ顔して通り過ぎやうとする時、娘の方からつと寄つて来て、稀しく莞爾（につこり）した。

「今の指環は切符代より、ズツと好い品だつたでせう。」と娘は突如に云つた。

子爵も微笑して、「え、結構さうな品です。」と答へた。

「ぢやもう少し高くして下さらない？　少しで好いの。三十錢何う？　出せない？」

「三十錢？」

「だつて私あの欲しいものがあるんだもの。」

娘はそれでも少し赤くなつて、名物甘納豆を積んだ駅売の荷箱の方をチラと見た。

「たツたそれだけで好いんですか。外に欲しいものは有りませんか。」

子爵は娘の無邪気さに誘はれ笑ひながら、ポケットから裸銀貨を掴み出した。

「ぢやお序（ついで）に、五十銭の銀貨を一つ下さいな。汽車のボーイさんに遣るんだから。」

「ボーイにですか。お荷物もないやうだから、それに及ぶまいと思ひますが……。」

「だつて他の人が遣るのに私ばかり……体裁が悪いわ。」

「然しそれよりも、東京へ着いて何うするお積りです。少しも用意がなくて、直ぐお困りだらうと思ひますけれど。」

娘の顔はチラと曇つた。洋傘の柄で敷石※を突附いてゐたが、「東京へ着けば着いての時よ。今ツから考へたつて為方ないのよ。」と、投げるやうに云つた。

「然し。」

「危ない！」と、娘が叫んだ時、上野行の列車は轟然と地響たてゝ構内に着いた。

この頃の残暑に、汽車はどの客車もユツクリしてゐた※。子爵は掌の銀貨を娘に渡して、折好く目先に停つた空つぽな二等室に飛込んだ。後から一緒に乗

る事と思ふと、娘はちよいと目礼して、わざわざ二車輦ばかり前の方の乗客のある二等室の方へ行つた。

然し、それは丁度好かつた、子爵は今晚この汽車が東京へ着く迄には**是非決めなければならぬ重大な問題**があつた。空虚な車窓に凭れて、ゆつくりその問題を考へようと、故と片隅の方に膝掛なぞ敷いてゐる時、カタカタと日和の齒を鳴して、追はれるやうに飛乗つたのは今の娘であつた。

「又来たわ。」と、娘は悪戯さうにちよいとその舌を出して笑はうとした。然し、それが笑ひにならぬほど娘の顔は真蒼だつた。

(五)

「何うしたんです。」子爵は目を見張つた。

「何んでもないのよ。何んでも……。」娘はキヨトキヨト車内を見廻してゐたが、突如に「貴方、外を見てゐて下さいよ。お願いですから外を見て下さい。」と頼んだ。子爵の体を窓際に押遣るやうにして、自分は敷いてゐる膝掛に腰掛けた。子爵に窓を蓋させて、その蔭に小さく隠れたのである。

「誰か来るんですか。」

「黙つて！」娘は陰しく睨んだ。

途端に草鞋ばきの百姓が三人、パラパラと車窓の前に立つた。みな翹足（つままだ）て、ワヤワヤと車内を覗込んでゐる。

「居ねえよう。この車は空虚（から）だ。」

「うんにや※、次の車だ。この汽車さ乗らね筈はねえだ。」

百姓どもがウロウロ次の客車に行きかける時、子爵の直ぐ前の白い柱が静かに迂り出した。汽車が動き出したのである。

三人の百姓は日向に口を開いて、ポカンとして汽車を見送つた。近道を探して沼地でも涉つて来たと見えて、この天気には背中まで一杯、跳泥※を上げてゐた。

汽車は長いプラットホームを迂つて、今乗つた改札口を通る時、子爵はハツとして自分の目を疑はせられた。そこの木柵に伸上つて、汽車の中を一心に見込んでる田舎娘を見附けたのだ。思はず窓から顔を引入れて、傍の娘を見直したほど、**酷肖（こくせう＝生き写し）**その儘であつた。袷も同じ屑繭織、帯も同じ友禅、襟も半襟も頭髮も顔容も何処一つ違はぬ。**鏡へ映した影をその儘の娘が、**伸上り伸上り汽車を見送つてゐた。

「貴方。」子爵はたゞその方を指差して、「酷肖だ。」と、娘を見詰めた。娘はおどついた目附で、チラと子爵を見上げたが、儚なげに俯向いた。

今一度子爵が窓から顔を出した時には、汽車は停車場の構内を出離れて、見送る娘の顔は次第に白く小さくなつた。

「貴方は家を逃出して来たんでせう。屹度（きつと）然うなのに相違ない……と思ふが、何うです。」

見詰めながら、なるべく穏やかに聞いてみた。

「私……ですか。」と、娘は俯向いた顔の儘、自分の掌を眺めてゐた。

「矢張り然うでせう。何うしたんです。」

「だつて、私には……家（うち）ちやありませんの。」

「家ちやない？ 家ちやないとは、それは何う云ふ意味です。では、今貴女を探してゐた人達は誰なんです。」

「知りません。」娘は素気なく答へた。

「でも今改札口に立つてゐた娘さんは何んです。着物まで貴方に酷肖でしたよ。」

「知りません。」

「知らん事はないでせう。悲しさうに汽車の中を見込んで、涙ぐんでゐましたよ。妹さんですか、貴女の姉さんなのですか。」

「私本当に……知りません。」

娘の声はやゝ顫へてゐた。その顔を隠すために、故と不愛措※に答へるのかと気が附くほど、胸の底から顫へを帯びてゐた。

「これは失礼しました。初対面の方に、こんなお尋ねするのは失礼でした。宥して頂きませう。」

「いゝえ。」

「余り好く似てお在（いで）だから、ツイお聞きしたのですが……失礼しました。無遠慮で為方がないんです。」と、子爵は言葉だけで微笑して、その辺へ腰掛けた。目は矢張り娘に注がれてゐた。

「いゝえ。そんな事は……。」と、娘はヘドモドして、初めて気が附いたやうに座席を立つた。敷いた膝掛を裏返しにして、子爵へ返して、反対の側の窓に行つた。窓架に両肘を凭せて、硝子にヒタと額を押附けながら、凝つと窓外の景色を眺めてゐた。

赤々とした夕日は、今奥州の大野に沈まうとして、燠（おき）の火のやうな強烈な日光が、娘の美しき顔にその焰を燃え上らせた。

（第一章 了）

現代語版

出札所

—

青森発・上野行きの列車は、もう到着まで間がなかった。

東北本線と新庄線が分かれる駅、小牛田（こごた）停車場。切符売り場の前には、湯治帰りらしい百姓の一家、馬市まわりの博労、鰻の仲買人、田舎の請負師、傷痍兵あがりの薬売り、わらじ履きの人足を連れた耕地整理の土木技師——そんな人々がガヤガヤと集まって、昔ながらの木造の小窓が開くのを待っていた。

黄疸のような色に老いた村の巡査が、さっき一度入口に顔を出し、務めのつもりで待合室をひと回り見まわしていった。人混みから離れてひとり、薄暗い手荷物扱い所の壁にもたれ、ぼんやり外を眺めている紺メルトンの外套の若い紳士を見つけると、うさんくさそうにちらりと目を走らせた。だが、これも事件ではない——老巡査は生あくびの涙を目にためながら、駅前の広場をとぼとぼと向かいの駐在所へ戻っていった。それきり、秋の日を正面から受けたこの田舎の停車場には、まるで人の出入りがなかった。ただ時々、町はずれのハンノキ並木の向こうから、涌谷（わくや）通いの乗合馬車のラッパの音が、静かな田舎町の昼に、遠く近く漂ってくるだけだった。

もう秋だ。来るのも慌ただしければ、去るのもまた慌ただしい、雪国の夏。その夏との別れの物悲しさは、真夏よりもかえって明るい日射しの底にひんやりと流れ、実る前の青田の稲が、目に見えない風に葉裏をさやさやと鳴らした。遠くへ連なる鬼首（おにこうべ）の山なみは藍から紺へ、山々の髷を鋭く錆びさせて、日ごとに深まる奥州の秋を思わせた。

遠くを眺める若い紳士の瞳は寂しげに曇り、自然と足もとの土に吸い寄せられていく——この若紳士、子爵・成瀬淳作も、家を出てから三か月。あてもなく奥州路をさまよい歩いた長旅に、体も心もすっかり萎えきっていた。足もとの三和土にはまぶしい西日がちらちらと戯れ、さっき博労が食べ捨てた梨の皮が、ちりちりと縮れ上がっていた。

コトリ、と切符売り場の戸が鳴った。その物音に、がやがや喋り立てていた乗客たちは慌てて小窓へ続く列を作った。正面の時計を見ると、発車まであと六分しかない。子爵も壁を離れて立ち上がった。誰が待つわけでもない東京行きの切符を買うために、押されながら列の最後尾についた。

子爵のすぐ前には、高慢そうな土木技師が突っ立っていた。軍人上がりに見えるいかつい肩を揺すり、相手もいないのに癪癪を起こして、地方駅員の不親切だの窓口の遅さだのをぷりぷり罵っている。すぐ後ろには大風呂敷を背負った田舎の婆さんが、喘息らしい喉をぜいぜい鳴らしながら、この汽車に置き去

りにされてはたまらないときよろきよろし、子爵の背中をつかんで押しつけてくる。そのたびに、むっとした匂いが旅やつれの子爵の顔を打った。

「大丈夫ですよ。あなたを乗せないうちに、汽車は出たりしません」

子爵は自分も苦しいのに、振り返って何度もなだめた。それでも力の強い婆さんは、乗って安心するまでは誰にだって騙されるものかという意気込みで、力まかせに、遮二無二押し詰めてくる。

「困りましたね。じゃあ、私の前にお立ちなさい」

「何でもいいだ、いいだ。早く……切符を買うだ」と、婆さんは真剣な顔で周囲を睨んでいた。

そのとき子爵は、ぐいと肩をつかまれた。前の土木技師が大声で話しかけてきたのだ。

「ねえ君、ああ図々しいんだよ。停車場に来るたびによく見る図なんだが、それがまた若い女に多いんだよ」と、ぷりぷりしながら切符売り場のほうを睨みつけている。

「そりゃあ男には、弱い者を助けてやる度量があってほしいさ。しかし女がだね、男に道をあけさせるのを自分たちの特権と心得ていやがるのは、容赦できんだろう。ねえ君」——と、しつこく指をさして見せた。確かに、少し酒も入っていた。

切符売り場の柵の前に、背の高い十八、九の娘が、大きな目でこちらを見ながら立っていた。町のほうから駆け込んできたのだが、乗客がもう列を作っているのを見ると、何のためらいもなくつつかと柵の前に歩み寄った。順番を待たずに、列と反対のほうから割り込んで、無理にでも小窓へ近づこうとしているのだった。

二

娘は歯の薄い桜下駄を履いていた。そのかかとをわざとキチキチと三和土に軋ませながら、こざかしげな目でうるさくあちらこちらを見比べ、列が動き出すのを待っていた。すぐ前の人が肘を張り、横目で睨み、誰もが自分を防いでいる様子に気づくと、それがまたおかしくなったのか、娘はくすりと笑った。うつむいてくすくす笑いながら、袖口のしつけ糸を前歯で抜いている。粋な染めの派手な友禅の帯のわりに、着ているのは以前に流行った銀鼠色の屑糸の袷で、本紅の袖裏を見せているのは、この辺りの者の目にも、もうずいぶん昔の流行だった。

「君、あれですよ。しゃあしゃあしたもんだ。誰かが順番を譲るだろうと待ってるんだ」土木技師はいちいち娘から目を離さない。ぺっと唾を吐いて、「ねえ君、あんな者に対して何が度量だ。あの無遠慮さを見たまえ。ねえ君、あの面……」

若い子爵は少し頬を染めて目を伏せた。穏やかな華族の教育を受けて育った子爵は、怒るという表情に慣れていなかった。この技師の激昂も、誰のためというのでもなく、ただ恥ずかしかった。

「ねえ君、許しておけますか、あの図々しさ……」

「無遠慮とか図々しいとか、そういうわけでもないでしょうが……」と子爵は仕方なさそうに答えた。「男と女では体のつくりが違うのだから、やはり……人の助けを待つのでしょうか」

「では君は、どんな無作法でも、女だから許すと言うんですね」

「そういうわけじゃないですがね」

「待ちたまえ、君。いま、女だから許すと言ったね。そういう者がいるから女が増長するんだ。そういう考えの奴は、席を譲るなり背中を貸すなり勝手にするがいいさ。ふん、年頃の娘だからな」

「ありがとう」と、子爵は静かに微笑した。

「ありがとうだって、君。では君は——」

技師がなお言い募ろうとしたとき、小窓がコトリと開いて、列がぞろぞろ動き始めた。

それでも娘は柵のそばを動かなかった。隙あらば割り込んで小窓へ近づこうとしては、一人また一人に拒まれ、苦笑いしながら、performance懲りもせ

ずに次の機会を待っている。そのたびにせわしなくキイキイと下駄を鳴らすのが、ぐっと土木技師の怒気を苛立てた。窓口へ寄る拍子に、technician は粗相を装って娘の足をしたたかに踏みつけたうえ、肘まかせにぐいと娘を突き飛ばした。

「痛……っ」

娘はよろめいて爪先をつかんだ。見上げた顔は眉をひそめ、癪の強そうな目で技師を睨んでいたが、唇はすぐ、例の人を小馬鹿にしたような狡い薄笑いにほころんでいった。そして平気な顔で、また柵に寄ってきた。

このろくでもない乱暴が、ぐっと子爵を突き動かした。前後の考えもなかった。泣き声でしがみつく婆さんを背中にこらえ、かかるとに力を込めて数秒間、その場を踏みとどまった。娘に機会を与えたのである。娘は人の好意を確かめている暇などない。ひらりと柵の内側へ飛び込むと、勘定台に両肘をかけ、小窓の中を覗き込むように顔を突っ込んだ。

「切符をくださいな、切符。私、お金はないんだけどね、これを預けておきますから、切符をくださいな」

娘は少し訛りのある、しかし強い声でそう言って、指にはめていた指環をそこへ投げ出した。あまりに不意の出来事で、駅員の答えは子爵の耳には聞き取れなかった。

「でも私、この汽車でないと。本当に困るんだから……大丈夫よ、この指環。投げ売りにしたって切符代くらいにはなるわよ」

出札係は面倒くさそうに言った。「ここはね、質屋じゃないんですよ。お金がなければ切符は出せません。はい、お次」

「だってさ……」

「どうしたんです。はい、次」

「弱っちゃったな、私……」娘の声はいくらか震えていた。「この汽車に乗れないと……大変なことになるんだもの……」

「次！」出札係はとうとう突っぱねた。

三

子爵に続く列がぞろぞろと騒ぎ始めた。発車時刻は刻々と迫るのに、娘はまだ窓口の前でぐずぐずと何か考え込んで、後ろをふさいでいる。皆、気が気ではない。余計なおせっかいをするからだと言わんばかりに、子爵ひとりをめがけて、後ろからうんうん押し立てた。間に挟まれた喘息の婆さんなどは、苦しさに悲鳴を上げながらも、つかんだ子爵の背中を放しはしない。もう成り行きだ。子爵も放ってはおけなかった。娘のそばへ進み寄った。

「切符なら私にお任せなさい。どちらまでです。仙台ですか、それとも福島？」

「え、切符……」娘は少し戸惑った目の色で、「私……東京へ行きたいんです」

「東京はどちらです。やはり上野ですか」

「さあ……、東京なのよ」

「何等です」

子爵は背後から押してくる力をかかとでこらえながら、栗鼠革の紙入れを引き出した。

「何等って……さあ……」娘はまた当惑している。

「そうですか。では」子爵は小窓の前に立った。「東京へ行くんです。何等でも構いません」。十円紙幣を二枚投げ出して、「東京駅、二等二枚」と言って切符を受け取った。釣り銭もろくに確かめずにかき集めて、ほっとして切符売り場を逃れ出た。

列はまたぞろぞろと動き出した。

成瀬子爵は差し込む西日を壁際に避けて、娘に切符を手渡した。

「東京のどこでお降りになってもいいように、切符はわざと東京駅にしておきました」

「ありがとうございました。何から何まで……いろいろと」

娘はそれでも丁寧に頭を下げた。改まると妙によそよそしく、言わされているような声に聞こえた。それからさっきの指環を出して、「それじゃあこの指環、差し上げておきますわ。投げ売りにしたって、ご損はかけないわ」と、釣り銭を持ったままの子爵の掌の上に置いた。

心臓型の台座に、紅玉でローマ字の「E」の字をちりばめた指環だった。この娘の持ち物としては不釣り合いなだけでなく、石によってはずいぶん高価な品かもしれない。

「それは困ります。私はこれを目当てに立て替えたのではありませんから。かえって迷惑です」

「それでも……」

「旅先で困るのは誰でも同じことです。どうかこの指環はあなたが納めてください。お返しますよ」

娘は眉間に皺を寄せ、じっと相手を見つめていたが、突然、切符を子爵の鼻先に突き出した。

「じゃあ私も、この切符——要りません」

「どうしてです」

「あなたも指環を取らないから」

「でもあなたには必要な切符でしょう。指環とは話が別なんだから……」

「いいえ、要りません。私、人から物をもらうのは嫌いです」ときっぱり言って、娘は切符を置いて行きそうにした。

「そうですか。じゃあともかく、指環は一時お預かりすることにしましょう。お預かりするのですから、ご都合のいいときにいつでも取り戻しにいらしてください。私の名刺を差し上げておきましょう」

子爵は内ポケットの名刺入れから、爵位を記していないほうの名刺を一枚取り出して渡した。だが娘は住所もろくに読まずに、くるくると指に巻いて帯の間に挟んだ。

「どうせ私、それを受け戻しに行くことなんてないでしょうから、あなたのほうで、どうかいいようになさってくださいな。一度私の手を離れたんですもの、もう私の物じゃないわ」

「しかしそれでは、あなたの損でしょう」

「それでも舶来よ。昔の昔の舶来。そこらにありふれた品じゃないようですから。ほほほ。じゃあ、お取引は済みましたね。さようなら」

娘はぎこちなく挨拶した。爪先に力の入った歩き方をする娘で、すらりと背の高い後ろ姿が、どこか西洋の婦人を思わせた。

自分の言うことだけが用事だと言わんばかりに、振り向きもせずさっさと出て行く娘の後ろ姿を、子爵は拍子抜けして見送った。軽い侮蔑を感じながらも、妙に心を惹きつけられた。「ロマンスの巡礼者」とでも呼びたいような子爵の空想好きな心は、目の前の異常な出来事に、あやしいほど娘への好奇心を煽られていた。——不思議を探すなら、詩よりも物語よりも、生きた世間へ行け。偶然はいつも血まみれの不思議である——という、ある詩人の言葉を思い出しながら、子爵は、乗合馬車二台を借り切って際どく駆けつけてきた古峰講の団に押し立てられるように、改札口を流れ出た。

西日のまぶしいプラットホームを歩きながら、子爵はまた考えた。いまここに、ひとりの田舎娘がいる。身に一銭の蓄えもなく、降りる駅の名も知らず、むろん頼る身寄りも友もなく、あの誘惑の渦巻く都会へ流れ込もうとしている。その先には何が待ち構えているのか。流れ着く先はどうなるのだろう。おそらくこれが、あの娘の一生を決める危うい転機になりはしないか。そして軽率にも切符を与えて、その手を引いたのは自分である。自分は知らぬ間に、人ひとりの一生の大事な運命を支配していたのだ……。子爵はいくらか自分の浅はかさを悔いながら跨線橋の階段を上りかけて、ふと目に留まったものに足を止めた。さっき娘に渡した名刺だ。くるくると指に巻かれた形のまま、撒き水の泥に半分汚れて落ちていた。

娘は手に紙表紙の小説と洋傘を持っていた。むろんうっかり落としたものに違いない。だが子爵は何となく、あてつけに投げ捨てられたような恥ずかしさ

を感じるとともに、娘のためにあれこれ考えてやるのが馬鹿馬鹿しくなった。

ちょいと靴先で蹴ると、名刺はくるくると線路下へ落ちていった。

汽車は子爵の予想どおり数分遅れていた。乗換駅らしい長いホームは、いま着いた団体客も混じって人数が増えていたが、背の高い娘の姿はその中でもはっきりわかった。片手に洋傘を引きずり、片手を懷に、袂をぶらぶらさせながら、ホームの、わざわざ危ない縁石の上を、綱渡りでもするような格好で行ったり来たりしていた。

娘は自分を避けている、と子爵は思った。素知らぬ顔で通り過ぎようとしたとき、娘のほうからつと寄ってきて、珍しくにっこりした。

「さっきの指環、切符代よりずっといい品だったでしょう」と、娘は出し抜けに言った。

子爵も微笑して、「ええ、結構な品のようです」と答えた。

「じゃあ、もう少し高く買ってくださいらない？ 少しでいいの。三十銭、どう？ 出せない？」

「三十銭？」

「だって私、欲しいものがあるんだもの」

娘はさすがに少し赤くなって、名物の甘納豆を積んだ駅売りの箱のほうをちらりと見た。

「たったそれだけでいいんですか。ほかに欲しいものはありませんか」

子爵は娘の無邪気さに誘われて笑いながら、ポケットから銀貨をつかみ出した。

「じゃあ、ついでに五十銭銀貨を一枚くださいな。汽車のボーイさんにあげるんだから」

「ボーイにですか。お荷物もないようだから、それには及ばないと思います
が……」

「だって、ほかの人があげるのに私だけ……体裁が悪いわ」

「それより、東京へ着いてどうなさるおつもりです。何の用意もなくは、すぐお困りになるでしょう」

娘の顔がちらりと曇った。洋傘の柄で敷石をつついていたが、「東京へ着けば着いたときよ。今から考えたって仕方がないのよ」と、投げ出すように言った。

「しかし」

「危ない！」と娘が叫んだとき、上野行きの列車が轟然と地響きを立てて構内に入ってきた。

残暑のこの時期、汽車はどの車両もゆったりしていた。子爵は掌の銀貨を娘に渡し、折よく目の前に停まった空っぽの二等室に飛び込んだ。当然一緒に乗

るものと思っていると、娘はちょこんと目礼して、わざわざ二両ほど前の、乗客のいる二等室のほうへ歩いて行った。

しかし、それはかえって好都合だった。子爵には、今晚この汽車が東京へ着くまでに、どうしても決めなければならない重大な問題があったのだ。誰もいない車窓にもたれ、ゆっくりその問題を考えようと、わざと隅のほうに膝掛けなど敷いていたとき——カタカタと下駄を鳴らして、追われるように飛び乗ってきたのは、あの娘だった。

「また来たわ」と、娘はいたずらっぽく、ちょっと舌を出して笑おうとした。だが、それが笑いにならないほど、娘の顔は真っ青だった。

五

「どうしたんです」子爵は目を見張った。

「何でもないのよ。何でも……」娘はきょときょとと車内を見回していたが、突然、「あなた、外を見ていてくださいよ。お願いだから外を見ていて」と頼んだ。そして子爵の体を窓際へ押しやるようにして、自分は敷いてあった膝掛けの上に腰掛けた。子爵に窓をふさがせて、その陰に小さく隠れたのである。

「誰か来るんですか」

「黙って！」娘は陰しく睨んだ。

途端に、わらじ履きの百姓が三人、ばらばらと車窓の前に立った。みな爪先立って、わやわやと車内を覗き込んでいる。

「居ねえなあ。この車は空っぽだ」

「いんにゃ、次の車だ。この汽車さ乗らねえはずはねえんだ」

百姓たちがうろうろと次の車両へ行きかけたとき、子爵のすぐ前の白い柱が静かに滑り出した。汽車が動き出したのである。

三人の百姓は日なたに口を開けたまま、ぼかんと汽車を見送った。近道を探して沼地でも渡ってきたと見え、この天気には背中までいっぱい泥はねを上げていた。

汽車は長いプラットホームを滑り、いま乗ってきた改札口の前を通ったとき——子爵は、はっとして自分の目を疑った。そこの木柵に伸び上がって、汽車の中を一心に見つめている田舎娘を見つけたのだ。思わず窓から顔を引っ込めて、隣の娘を見直したほど、生き写しそのままだった。袷も同じ屑繻織、帯も同じ友禅。襟も半襟も髪も顔立ちも、どこ一つ違わない。鏡に映した影そのままの娘が、伸び上がり伸び上がり、汽車を見送っていた。

「あなた」子爵はただその方を指さして、「生き写しだ」と、娘を見つめた。娘はおどおどした目つきでちらりと子爵を見上げたが、はかなげにうつむいた。

もう一度子爵が窓から顔を出したときには、汽車は構内を出はずれて、見送る娘の顔は次第に白く、小さくなっていった。

「あなたは、家を逃げ出して来たんでしょう。きっとそうに違いない……と思うが、どうです」

見つめながら、なるべく穏やかに聞いてみた。

「私……ですか」娘はうつむいたまま、自分の掌を眺めていた。

「やはりそうでしょう。どうしたんです」

「だって、私には……家なんてありませんの」

「家がない？ 家がないとは、どういう意味です。では、いまあなたを探していた人たちは誰なんです」

「知りません」娘はそっけなく答えた。

「でも、いま改札口に立っていた娘さんは何です。着物まであなたと瓜二つでしたよ」

「知りません」

「知らないことはないでしょう。悲しそうに汽車の中を見つめて、涙ぐんでいましたよ。妹さんですか、それともあなたの、姉さんなのですか」

「私、本当に……知りません」

娘の声はやや震えていた。顔を隠すためにわざとそっけなく答えているのだと気づくほど、その震えは胸の底から来ていた。

「これは失礼しました。初対面の方に、こんなことをお尋ねするのは失礼でした。許してください」

「いいえ」

「あまりよく似ておいでだから、つい伺ったのですが……失礼しました。無遠慮で仕方がない性分なんです」と、子爵は言葉だけで微笑して、そのあたりに腰掛けた。目はやはり、娘に注がれていた。

「いいえ。そんなことは……」娘はしどろもどろに言って、初めて気づいたように座席を立った。敷いていた膝掛けを裏返しにして子爵へ返し、反対側の窓へ行った。窓枠に両肘をもたせ、ガラスにひたと額を押しつけながら、じっと窓の外の景色を眺めていた。

赤々とした夕日が、いま奥州の大野に沈もうとしていた。熾火のような強烈な光が、娘の美しい顔に、その焰を燃え上がらせた。

(第一章 了)

作業メモ

・底本コマ対応：（一）～（二）＝コマ4～7／（三）＝コマ7～9／（四）＝コマ9～10／（五）＝コマ10～12

・※の主な箇所：「事項ぢやない」「鬼首矢柄」「カタカタ（駆け込みの擬音）」「抜鹿子」「切繻織」「棄売」「敷石」「うんにや」「跳泥」「不愛措」＝原本再確認またはNDLテキストデータとの突合で解消予定

・「日和（ひより）」＝日和下駄（齒の低い晴天用の下駄）。娘の下駄の音（キチキチ／カタカタ／キイキイ）が章全体の効果音になっている

・次章「海鳴」（17頁～）冒頭で、見送った娘＝**富乃**、駅のベンチに**淀爺**。「姉さんは今の汽車で行ったに違いない」と富乃が声を潤ませる＝**乗った娘は富乃の姉**で確定

第二章「海鳴」

解題

- ・ 姉の名は袈裟次（けさじ）。第一章で東京へ去った娘。富乃とは双生児。
- ・ 父は遠山勝衛（かつえ）、六十四歳。関節炎と鬱悶に苦しみ、いまは金貨を看板に掲げて村と敵対している。寝るときも脇差を枕元から離さない。
- ・ ★姉妹は「築港が流れたその朝」に生まれた。そしてこの日は、築港が流れてから二十一年目のその日だった。
- ・ ★築港の全経緯がこの章で語られる（勝衛の狂熱 → 県令を動かし補助金 → 地方債 → 第一期防波堤完成 → 竣工式前夜の大暴風雨で二十何万円の堤が流失）。
- ・ ★築港主唱者三人の末路：一人は発狂して村中を躍り歩く＝鳴神（村養いの狂人。もと運河口の旅人宿。以来二十一年）、一人は麴室で割腹、残る一人が勝衛（一室に閉じこもり、屋敷から一步も出なかった）。
- ・ 七年目、塩釜～石巻を結ぶ小蒸汽船が運河通いを開始し、野蒜が中継場になる。村は再興を期して松尾神社の本祭を七年ぶりに行い、袈裟次が稚児姿で行列の露払いに立った。父も何年ぶりに外の土を踏んだ。——その祭の三日目、父は半面を血に染めて帰ってくる。村人に誘き出されて半死半生の目に遭ったのだ。「殺せ、俺を殺して村が立つか。柱を倒して家が立つか。殺せ」。この日から父の性格は一変した。
- ・ 章末、父は富乃に迫る。「袈裟次は俺を怨んでいた、何と言っていた」——そして最後に口走る。「貴様は姉と男を争っているだろう」。次章「銀貨」へ。

- ・大沼姓の人物は登場しない。

翻刻（原文どおり）

海鳴

（一）

「為方ない、帰りませう。」

遠野の郊外に汽車の影が全く見えなくなつた時、富乃は溜息して改札口を離れた。握締めた欄木にヒタと汗の痕が残つて、偶とそれを見附けることも寂しかった。作男どもは力抜けして、ボンヤリ突立つてゐた。

「うんでも汽車はまだ出べえに。七時と何時だか、夜行の東京がある筈ですよ。なあ淀爺、然うだつたなア。」

年嵩の作男は慰め顔に声掛けて、この頃急に窶（やつ）れて来た娘の姿を、気の毒さうに眺めた。

「然うだとよ。」

呼掛けられた淀爺は、ズツと離れたベンチに腕拱いて、日頃の剽軽（ひょうきん）もなかつた。突伏して足許に唾など吐いてゐた。

「いゝえ駄目々々、姉さんは今の汽車で行つたに違ひない。もう諦めて帰りませう。」と、富乃は声を潤ませた。

作男二人はグズグズ顔見合つてゐる。

「だって今の汽車には確に乗らなかつた。俺ア丁（ちょう）と見たんだもん。」

「今一汽車見て行くべえよ。この儘帰ると俺ア、旦那に何ぜうに叱られツか判んねえだ。」

「俺もさ、それ考へてる。今頃は又屹（きつ）と氣違おこして、脇差でも振廻してるに決つて御座るだ。村中の騒動だ。」

「なアお嬢さん、折角来たんだから今一汽車見て、と、念を達けて歸つたら何ぜうだね。」

百姓どもはオツオツ富乃の顔色を窺つた。

娘は少し面を曇らしたけれど、「でも私は何うしても姉〔さん〕、今の汽車で行つたと思はれないもの。逃げても隠れても、自分の思ふ事は為遂げる姉さんだから。お父さんが何う怒つても……もう為方ないと思ふわ。歸りませう。歸つて私が、お父さんに折檻されゝば、それで好いのよ。」と、俯向いて小指の先を、そつと眼瞼にあてた。

「然うかなあ。」

「それに私、今ふつと考へて心配になつたの。こんなに四方から探される中を、潜つて遁げる心はどんなだと思ふわ。隠れるのに夢中になつて、喰べるものも喰べないでなぞゐやしないか。体に障るとそれこそ大変だもの。私今それ思つたの。」

「それは大丈夫ですがすよ。」と、作男どもは相互に笑つてゐた。「お前様の思はしやるやうなお姉様ぢやねえだよ。」

「今頃は何処かで手足を踏反（ふんぞ）つて御座るべえよ。」

「それなら好いけれど、あゝ見えて姉さんは然う壮健な身体ぢやないから、あゝ、私そればかり心配なの。今頃は何処まで行つたか……姉さんも気の毒な人……お父さんも気の毒な人だわ。」と云ひ掛けて、富乃は偶と耳を澄した。汽車はM——河の鉄橋にかゝつたと見える。一度聞えなくなつた車輪の響が、又朗かに遠く響けて来た。

その時まで黙つて、片隅に俛首（うつむ）れてゐた淀爺は、ムツクリ起きて富乃の前に来た。例も冗談の飛出る大きな口を難しく結んで、目をシヲシヲさせてゐた。淀爺は富乃が生れない前からゐる作男で、女房もなく子もなく、また誰もその素性を知つた者のない風来の独り者であつた。

「お嬢様、お前様はぢやお姉様を見遁してやらツしやる気だかね。」

「何故なの。私姉さんは何うしても今の汽車だと思ふのよ。」

「本当に見遁してお上げなさるだね。」と、淀は涙声になつた。

「何うしたの爺や。それぢや不可（いけ）ないと云ふの。」

「うゝ、飛んでもない。飛んでもない。私は今朝から斯うして皆が大騒ぎして、お嬢様を探すのを、藝（げい）も※ない事つたと思つてゐたゞ。好くその

気にならしやつたよ。籠、何んぼ骨を折つても、お姉様は野の雀だ。籠に穏和（おとな）しく居付きはしねえだよ。」

と、淀爺は皺だらけの頬にホロホロ涙を流してゐた。

（二）

「何うしたんだよ淀。急に何うしたの。」

富乃は停車場から連出して、馬車屋の方に肩を並らべながら、心配さうに覗き込んだ。泣いた老爺の顔は、目の周囲だけ洗つたやうに光つてゐた。作男二人は呆氣に取られて、後から離れて跟（つ）いて来た。

「何アに、何んち事もねえのさ。唯些（ちょ）つとな……へツ、詰らねえ事だ。」老爺は幾らか極り悪さうに、平手でズルリと顔を撫でた。

「だつてお前。」

「お嬢様。雀の子は雀だ。旦那が何んぼ丹精しても飼鳥にはならねえだよ。飛ばしてやるのが何よりの功德で御座りますよ。」

「功德？ 姉さんの事なの。」

「なアお嬢様。袈裟次様が帰らないと聞いたら、旦那は又氣違おこして、お前様一人さ当り散らすべえが、なア、凝つと辛棒（しんぼう）してな、姉様、何ぜう折檻されてもお前様は旦那様と親子だぞ。殺すと云つても親子だ。それが袈裟次様の為め、第一お嬢様の為めだ。」

「それが判らないんだよ。一体前刻から、雀とは何んの譬（たとえ）なの。」

「何んの譬？ 譬と聞えるかね。」淀爺は苦々しさうに云つて、その唾をベツと吐いた。「一生に一度は、譬の解ける時も御座りますよ。」

「それにお前の云ふやうだと、私だけがお父さんと親子で、姉さんは他人のやうに聞えるぢやないの。」

「成程な、こいつは理窟だ。はゝはゝゝゝ。」淀爺は往還の真中に足を停めて、突如に笑ひ出した。「然うだ、お前様と袈裟次様は双生児だつたな。それでお嬢様が旦那様の子だら、袈裟次様も旦那様の子に相違なかつたゞね。いや大きに、これは、飛んだ粗相で御座ります。」

と、丁寧の一つお辞儀をしてから、齒のない顔中を皺にして笑ひ出した。今泣いた顔が渋紙のやうに引摺つてゐるなら、それを揉んでゴソゴソと音するやうな笑方だつた。

「淀。何が可笑しいの。」

富乃はムツとして離れた。淀爺の白ツぱくれた笑振りが、此中（このなか）から些（ち）いちい浮ぶ或る暗い影を富乃の心に翳したのである。

それは、性質も性分も斯うまで裏表な姉と自分が、同じ親の同胞（はらから）とは何うしても信じられないやうな事があつた。然し二人は双生児だ、同じ日に同じ日の目を見たとのみではない、母胎の中から同じ胞衣を被つて同じ

血に育つて来たと云ふことは、疑ふべく余りに明白な事実である。富乃は何時もそれを思つて、胸を撫下した。

「何ん為（し）てるやお爺。何んが可笑しいだ。」

「ほうれ、荷馬車が来た。」

後から来た作男どもに背中をどやされて、老爺は自分に復（かえ）つた。

「主（ぬし）等の知つた事でねえ。この譬の解けるのは、俺と旦那様と二人より無えだ。」と、淀は二人を睨めて、苦アい顔をした。

「又お爺のお株が初つた。はゝゝ。」

「主等に云つてるんでねえ。主等は今の事が今でなきア判らねえ代物だ。世間にはな、知らねえから済むが、知つて見ると吃驚するやうな事がドツサリあるんだ。」と云つて、老爺はノソノソ歩き出した。

馬車は幸に一台あつた。草臥（くたび）れて歸つて、いま馬に裾湯をやるどころだと馬丁は渋つてゐたが、屋敷と聞いて亭主は飛んで出て来た。姉の家出がもう此辺でも評判になつてると見えて、煩さく聞かれるのを好い加減に答へながら、富乃と淀爺は一緒に馬車へ乗つた。一人の作男は**高城**の伯母の家に、一人は**前谷地**の親類に、兎も角も姉の家出を報せることにした。

馬車は夕靄を衝いて、心悲しい喇叭を吹き流しながら、長い田舎町を馳り出した。村の小児どもがバラバラと馬車の後を追駈けて来た。富乃は、自分の村

では蛇蝎のやうに嫌はれながら、三里も距たるともうこのやうに尊敬される自分の家の富が、染々と悲しかつた。一村を敵として、寝るにも脇差を枕許から離した事がなく、始終村人と居合腰であるやうな父親の性格が、娘の身としては悲しかつた。勝気な姉は齒を嚙締めても、村人に弱い姿を見せないやうにしてゐたが、それでも随分苦しさうに見える時があつた。今度の姉の家出もその辺から出たのではあるまいか。家の祟（たた）りに負けて、家を奔（はし）る氣になつたのではあるまいか。

「ねえ淀、爺や。」と、富乃は声掛けた。

「何か云つたかね。」淀はキョトンとして顔を上げた。今朝からの騒ぎに、もうウトウトしてゐたのだ。

（三）

富乃の家、遠山は**野蒜村草創の旧家**で、維新前迄は**旧仙台藩からお船番所の支配をも預つてゐた**。然し富乃の生れた頃の家は、築港流失の損害をうけて、酷く寂れてゐた。居屋敷も他人に渡さうと云ふ境で、父親が真蒼な顔して奥の間に閉籠つてゐるのを、幼心に覚えてゐる。番所あとの広い家の隅々まで光がとゞかず、雨洩に柱の腐つてゐるやうな間が幾つもあつた。村の小児から除物（のけもの）にされてる姉妹は、結句それを好い事にして、土足のまゝ家中を駈廻つて遊んだ。日の中は大抵海へ出て、波頭を相手に遊んだ。産土（うぶすな）は龍宮だなぞと他（ひと）にも笑はれるほど海が好きで、眠る時の外は海

を眺めて育つたと云つても好かつた。それは姉妹とも恐しさに、なるべく父の顔を見ないやうにしてゐた為めもあつた※が、姉は根に大胆なところがあつた。

父親は持病の関節炎と鬱悶に焦れて痼癪を立て、ひどく母に当り散らすので、富乃なぞはオドオド顫（ふる）へてゐる時でも、「何をする！」と姉は目を突固めて父親に逆つて行く事があつた。父は別に姉を可愛がつてる風もないが、然う云ふ時には決して、凝つと姉の顔を見詰めてゐる間に、不思議に気が折れて行くやうに見えた。

「爺や、築港が流れてもう何年になるね。」

富乃はホツとして云つた。日はトツプリ暮れて、馬車は藤巻辺の堤を走つてゐた。少し南に廻つた湿ツばい夜風に、周囲の浅黄幌がハタハタと鳴つた。

「何年ツて、お前様の年だけだ。お前様は築港の流れたその朝生れた人だ。」

「築港さへ流れなかつたら……お父様も今のやうな事はなかつたらうけれど……」

「何アに性分だ。極端から極端へ飛ぶ人でな、矢張り寅歳の生れだ。あの築港騒ぎだつて然うだ。今思つてもまるで氣違ひでがすよ。村の法印が反対らしい事云つたとかでな、本当に大日堂へ火を掛けようとした人だもん。」

「然うだつてねえ。お母さんもその苦勞で死んだのだよ。」

富乃の家が村と確執を結んだのは、その築港が因（もと）だつた。

その頃はまだ旧藩士にも公債証書が残つてゐて、産業熱が酷く勃興した時だ。亜米利加から直輸入の……※横浜以北の太平洋沿岸に良い港湾のないのを憾（うら）んで、航路をひらくべく、政府も民間も調査に熱中した。陸中の釜石、陸前の女川、塩釜など各地方の有志が中央政府に奔走して指定地の争奪戦になつた時、世人も知らないこの牡鹿桃生の一角から、猛然と叫び立つたのは富乃の父、遠山勝衛であつた。

彼は鳴瀬川※の流域を扼して、宮戸島※から防波堤を築けば、この野蒜の地は商港として最良の地形を領めてゐるのを見た。潮流、風位、水尋（みずはかり）、何う見ても築港の資格があるのを見た。彼は政治家ではない、事業家でもない。たゞ一箇、土を熱愛する気概家であつた。維新以後事毎に萎縮して……※策略や辞令は彼の長所ではない、強情と無法とでこの難事業を完成しようとしたのだ。

「待て、俺が驍者（いざりもの）を歩かせて見せる、黙つて俺のする様を見ろ。」

彼は請願にも逡巡する村人を尻目に掛けて私財を投出した。工部省の御雇外人を聘して実測を遂げた上に、三人の有志と共に水盃をして村を出た。

「その頃の旦那様と云つたら、まるで氣違ひだ。県庁で許可しなけりや一揆を起して蓆旗（むしろばた）でも立てる氣だ。いつも塩をつけた握飯を腰さぶら

下げて、今日もか、**県令様の邸の前を何日でも動かねえだ**。御苦労ですのうなんて、県令様が出勤しながら挨拶して通らしやつたと云ふ事で御座りますよ。」

淀爺は富乃姉妹に好く話して聞かせた。

「俺は目だ。貴様達は手足だ。目は身体の中で一番前方に出てゐる。目の動く通りに働け。俺は目だ。」

彼は三軍を指揮する将軍のやうに、偶（たま）もすると畏縮けたがる村人を叱咤し号令した。

（四）

勝衛の狂熱は、土木で有名な時の県令を先づ動かした。中央政府に具申して若干の補助金を得た。あとは地方債を起して、小規模ながら商港としての築港が着手された。

村人は驚喜した。喜ぶと云ふより寧ろ顛倒して、三本煙筒（さんぼんえんとう）の泥に酔つた魚のやうにウロウロし廻つた。大きな外国船がもうその岸壁に横着けにされてゐるやうな気がして、田を売り畠を売つて、開港後の準備を急ぐ間に、**第一計画の防波堤が先づ出来上つた**。

直ぐ追懸けて第二期計画の拡張に入るべく、**東京仙台から数百の官民を招待して、盛大なる竣工式を挙げる事**になつた。山車が出る、踊屋台が出る、芸者ばかりも何十人、塩釜石巻の港々から寄集めて、明日の一番狼煙で式場へ繰込

まうと云ふその前晩、夜中からの大暴風雨で、翌朝見ると二十何万円を投じた防波堤は根こそぎ流されてゐた。

「そんな時には、最初に旦那様に報したのは俺だよ。旦那様は仲の間で鮭の刺身で朝飯喰つて御座りした。防波堤が流れたと云ふとな、あッ流れた！ と云つてな、喰つてた魚をベツと掌さ哺（は）き出してからな、ポカンとして俺の顔を凝つと眺めて御座つたゞよ。」

これも淀爺が一つ話にしてゐた。

富乃姉妹が生れたのは、丁度その同じ朝であつた。

剛愎な勝衛も二三年は喪心者になつた。財産を耗（す）り田畠を失つた百姓どもは、村にも住みかねて廻船の炊夫になつたり、或は北海道に屯田兵を志願したりして、勝衛を恨む気力もなく、この寒空を見かけて萎々と村を出て行くのを、ボンヤリと勝衛は見送つた。

防波堤の流失は設計技師の疎漏に過ぎぬ。今一度遣り直さないでは、折角これまでの構子（かまえ）が惜しいと励まし来る人々があつても、それに応答する元気すらなかつた。閉切つた一室に閉籠つて、屋敷内を一步も外へ出なかつた。

築港主唱者三人のうち、一人は現場から発狂して村中を躍り歩き、一人は麴室（こうじむろ）へ入つて見事に割腹してしまつた。

五日の薄月は白々と磧（かわら）に漂うた。河に沿うて長い石高道を馬車に揺り上られながら、富乃は幌幕をかゝげて、夢のやうな河面を籠めた靄（もや）を凝つと眺め入つた。淀爺は隅ツこに蹲つて、もう快い軀だつた。

塩釜から石巻へ通ふ小蒸汽船が運河通ひの航路を初めて、野蒜の村がその中継場になつたのは、築港騒ぎから七年目であつた。それ以来物事が手につかなかつた村人は、世の文明が急にこの村へ脈打つて来たやうな気がして、村の再興はこの時と氣負立ち※、七年以来中絶してゐる松尾神社の本祭を執行して、若者どもは揃ひの浴衣で神輿を振出した。

家の格式から姉の袈裟次は、稚児姿で行列の露払ひに立つた。クツキリと色の白い、金糸で芳野霞を縫した燃ゆるやうな振袖姿が、姉の頬に映えて、絵のやうに美しかつたのを、富乃も微かに覚えてゐる。父もこの時、何年振りかに外の土を踏んだ。野袴に福草履と云ふ扮装で、左脇の名主座に坐つた。

祭礼は三日続いた。その三日目の晩、父は片腕をダラリと下げて、半面血に染つてゐた。高い頬骨を伝つてポトリポトリと滴り落ちる血は、菊綾の水下の裾※にたまつてベトリと糊のやうに粘つてゐた。

高が小蒸汽船の開通位でお祭騒ぎするのを嘲笑したとか云ふので、七年以来沈黙した村人の憤怒を買つたのである。磧へ誘き出して半死半生の目に遭はしたのである。

「殺せ、殺せ。俺を殺して村が立つか。柱を倒して家が立つか。殺せ。」

勝衛は蹉跌（よろめ）して喚き叫んだ。獣の吠えるやうな父の声がガラんとした大屋根に響けるのを、富乃は寢床の上に顫へながら聞いてゐた。

父の性格はこの時以来ガラリと一変した。村方から蛇蝎のやうに嫌はれる金貸を、公然看板にかけて始めるやうになつた。女房子もなく、たゞ金を愛する人になつた。

（五）

「ねえ爺や、爺や。家へ歸つてお父さんへ何う話しやうね。」

富乃は淀爺を揺り起した。馬車は堀田林を過ぎて、榛木道を村に近附いてゐた。

「何うと云つて、袈裟次様の事かね。何うせうも為方あんめい。正直に云ふのさ。」淀爺は生欠伸した。

「それがねえ……」富乃はホツと溜息した。

父の気性だ。今頃は門前に高張でも点けて、小作の者どもを鹽集めて騒動してゐることゝ思つたのに、屋敷は森然と鎮り返つてゐた。一目に村方を見下す高地に、深々と繞林（めぐりばやし）を取廻して、古風な鉾打の棟門を構へた家作りは、小さな城砦とも云ひたい威厳を見せてゐた。

「お姉様のためだぞ、お嬢様。旦那様がどんな難題云つても忪（こら）へて御座るだよ。お前様達は親子だかな。」

門前に馬車が停つた時、淀爺は今一度念を押した。

何時も今頃は、夜業の靱磨唄が賑かに聞える台所の大戸に、明々と灯が射しながら、雨と降る虫の音に人氣勢もなかつた。富乃は沈黙のうちに何か恐ろしいものに待たれるやうな気がした。少し心を顫はしながら、何気なく啓ける車戸はヒヤリとする程音立てゝ、鳴子の音が森然とした奥の間まで響けて行つた。

作男どもは六七人、ズラリと居爐裏を取囲んで、ボンヤリ焚火を見詰めてゐた。富尔は憂へる目に迎へられながら、家の中へ上つた。

「お父さんは。」

「奥だ。晩方からへえ引込んだ限りでがすよ。」と作男の一人は、それでも裾を搔寄せて席を明けた。「そんでお爺んの方は何ぜうだつたね。矢張り手掛りねえかね。」

「あゝ、駄目だつた。」淀爺は頂垂（うなだ）れて坐つた。

「石巻を追掛けた輩も前刻に歸つたよ。那方（あつち）はまるで姿も見ねえとの事つたよ。」

「然うか……。」と云つて、淀爺は富乃に目附をした。早く奥へ返事をした方が好いと云ふのだ。

暗い間を三間ばかり距てた奥の、父の居間の杉戸に手を掛けた時、富乃はそこからブウンと匂つて来る線香の匂を嗅いだ。富乃は思はず手を置いた。何がなし気に打たれて、咽喉の底がついコクリと鳴つた。

「お父さん、お父さん……唯今、帰りました。」と外から声掛けてから、オツオツと重い杉戸を啓けた。

父の勝衛は後向に腕組して、凝つと仏壇を見詰めてゐた。透欄間など附いた十六畳の居間は、台ランプの灯が隅々まで達かないで、陰気臭く天井に輪取つてゐた。仏壇には一基の蠟燭が細々と点つた。

「お父さん。お父さん……」

厳格に過ぎる勝衛は、例へ妻子でも、対坐に坐るに畳の縁を越すことを容さなかつた。富乃は煤光りのする柱の処に坐つて、小さく声掛けた。父の前には見馴れない梨子地蒔絵の手箱が拵げられて、その中には地図か測量図とでも思はれる書類がギツシリ詰つてゐた。

「お父さん、あの……淀と歸つて来たんですよ。」

勝衛はホツと深い溜息してゐた。

「お父さん——」

勝衛は後向のまゝに腕も解かなかつた。「袈裟次は帰るまい。東京へ走つたんだ。」と、苦々しげに、独り語のやうに呟いた。

「えゝ知つてゐる。」※

この時、丁子頭（ちようじがしら）の咲いた蠟燭は、ポツポツと瞬いて父の影を揺り乱したが、又ポウツと焰を立直して、遅くはあるが瘠せた勝衛の影を後の砂壁に、ヂユツと湊（つ）き附けるやうに動かなかつた。外はもう月が天上に冴えて来たのであらう。耳を澄すと、沖の方から微かに潮鳴の音が寄せ響いて居た。

「富乃。」

勝衛はムヅと向直つた。「こゝへ出ろ。出ろ。」屹（きつ）とした声であつた。

「貴様、娘の家出の理由は知つてゐるだらうな。何んのために急に家出したか、そ知らん事はあるまいな。それを聞かしてくれないか。」と云つて、凝つと富乃を見詰めた。大きな目には涙が一杯溢れてゐた。

「お父さん、それは……」

富乃は余り意外な間に、父の顔を見上げたのである。

「いゝや隠しては不可ない。貴様がそれを知らん筈がない。隠しだてすると貴様も恨むぞ。」と云ふ父の顔は、顎骨が急に瘦せたやうに蒼かつた。

「何うしたんです、お父さん。」

（六）

勝衛は一膝乗り出した。

「富乃、隠さず云つてくれ。姉妹のお前が知らんと云ふ筈がない。俺は怒らない、いや決して怒らないから、知つてゐる通りを話してくれよ。もう私は覚悟※してる、何を聞いても驚きはしない。」

煩く瞬きしながらも、強ひて声を落着けてゐた。

「ですけれども私……」

「いやお前は知つてゐる、知つてゐる。知つてゐるとも。はゝゝ。」邪推深く笑つてから、「何故然う隠すのだよ。何故正直に云つてくれないのだ。なア富乃、袈裟次とて長年の恩……ぢや父母の恩を知らん奴ではない。謂れなく家出して、私を斯うまで苦しめる筈はない。屹とお前達へは訳を話してゐるに相違ない。なア富乃、それを聞かしてくれと云ふのだ。」

鋏刈（はさみがり）の白髪髯を、顫へる掌を顎にあてゝ、勝衛はバリバリと撫で廻した。それは気が昂ぶる時の彼の癖なのであつた。

「でも私、本当に姉さんから何も聞きませんもの。」

「これ、まだ隠す！ お前達はたゞの姉妹ではないぞ、肉体を分けた同胞だ。これ程の決心を打明けない筈はあるまい。なア富乃、俺ア頼むのだ。見ろ、これ、貴様の親はこの通り頼んでゐるのだ。なア富乃、姉は何んと云つてゐたな、何んと云つたな。」

勝衛は関節炎で痛む膝骨を軋（きし）ませて、チリチリと詰寄せて来た。富乃は恐い嵐を待つやうな心で、膝前の吹綿を引いてゐた。

「なア富乃。昨日だ。あの鳴神の奴が、俺を見て妙に嘲笑つてな、変な事を云ふのだ。気違めがと其時は気にも留めなかつたが、今で思へば彼奴は丁とあれの家出を知つてたのだぞ。鳴神さへ知つてゐる事を、お前が知らないと言ふ筈はなからう、な、富乃、何うした、何故黙つてゐる。」

富乃は俯向きながらも窃と手を伸べて、間にある手爐（てあぶり）を横へ退けた。それ程に近く勝衛は膝行寄つてゐた。

「鳴神が何か云つたんですか。」

「鳴神の奴が。何んと云つて那奴（あいつ）は……」勝衛は些と言葉に途惑つたが、太い眉毛を顰めて、「富乃、俺ア那奴に笑はれた、指差してゲタゲタ笑はれたのだぞ。」と、不快さうに口を閉ぢた。

「でも何うせ気違の云ふ事ですもの、何を云ふか知れません。」

「いや気違ぢやない。あれは気違の云ふ言葉ぢやない。何も彼も知つてゐて、気違の真似をしてゐるとしか思はれない。俺アあの目に凝と見詰められると、身体中が冷たく粟が出るやうな気がする。あの目を好く見ろ、肚の底から他を睨めてゐる目だぞ。那奴は気違ぢやないぞ、気違ぢやない。」

勝衛は今そこに当の相手でも居るやうに、浮攀つた目附で背後の壁なぞ見廻した。富乃は段々発揚して来る父を怖れて、「お父さん。」と、逡巡しながら云つた。

鳴神と云ふは村養ひの狂人である。築港当時、以前は運河口に旅人宿なぞして相應に暮してゐたが、勝衛の励しい狂熱に動されて、無学ながらに財産を抛（なげう）つて、村から三人の主唱者の一人となつた。防波堤の流れたその朝、同志の一人は割腹して……※彼は無心に磯端を躍り廻つてゐた。それを何う云ふものか——彼は魂の空袋になつて、村方の養ひに生きて來たのである。それ限り二十一年、勝衛はこの頃ひどく恐れて、途中で遇つても顔色を変へた。

勝衛はグツと富乃の手頸を握締めた。「俺はもう覚悟してゐる。云つてくれ。」握られた掌は熱く汗ばんでゐた。

富乃は不安さうに、顫へてる父の目を見上げた。「何をです。」

「袈裟次は何んと云つて俺を怨んでゐた。何んと云つて怨んだ。」

「姉さんがお父さんを怨む？ 何うしてずす。」富乃は意外な問ひに答へやうもなかつた。

「いや怨んでる、怨んでる。怨まない者なら、択（えら）に択つて今日家出する筈がない。」と、又ワクワク顫へて、「富乃、今日を何日だと思ふのだ。」

「……」

「築港の流れた日だ、俺の築港の流れたのは、二十一年前の今月今日なのだ。」

「えゝ。」

「あゝ今日だ。今日なのだ。」

勝衛は手を突放して歎（なげ）いた。

（七）

潮鳴は遠雷のやうに、沖の方からとゞろいて来た。彼岸頃から日一日と冴えて来る潮鳴※の別れは、次第に忍寄る冬の前触のやうなものであつた。

富乃はおどろしいその遠鳴を聞き澄ましながらも、腕組してゐる父の後姿を悲しげに打眺めた。戦へば狼のやうに牙を磨いで来た父も、齡には勝てなかつた。間断ない関節の疼（いた）みに、右の肩肉はゲツソリ削けて、背筋などは傷々しく捻曲つてゐた。父も最う六十四だ。

「お父さん。姉さんは東京へ行つたんです。」富乃は恐る恐る云つた。「姉さんの気性では、探したつて歸つて来はしますまい。当分様子を見てゐたら何うなんでせうね。」

勝衛は凝つと一所を見詰めて答へなかつた。窃とその視線を辿ると、それは仏壇に瞬く蠟燭の灯であつた。

「ねえお父さん。それに考へると姉さんは、何うしてもこの田舎に屈まり通す人ぢやありませんよ。姉さんの置手紙の通りに、姉さんは東京で運を開くのかも知れませんから、ねえお父さん、少し長い目で見て上げたら何うでせうね。姉さんは余程固い決心に相違ないんですよ。」

「え、俺はそれを聞いてんやしない。」と、性急に舌打して、「富乃、何故正直に袈裟次は俺を怨んでゐたと云はない。何故隠すのだ。」

「隠すなんて……今朝置手紙見るまで、本当に私は、何も知らなかつたんですよ。」

「いや那女（あいつ）は俺を怨んでゐる……怨んでゐる。」

「お父さん、それはお父さんの邪推ですよ。姉さんはあんな気性でも、お父さんの事は始終考へてゐましたよ。それを怨んでゐたなんて、そんな人ぢやありませんから……姉さんを信じて下さい、ねえお父さん、姉さんが可哀さうですよ。」

「貴様！　まだ隠す気だな。」

勝衛はグツと睨めた。咽喉の底で唸るやうな声であつた。

「ですから鳴神が何を云つたんですよ。」

「好から……隠せ。隠せ。寄つて集つて……皆隠せ。」と、ワクワク息を亢（たかぶ）らせながら、顫へる目で周囲を搔探した。

富乃はおろおろその視線を追掛けながら、「ねえお父さん、気を鎮めて下さいよ。姉さんはそんな人ぢやないんですよ。」

「え、貴様まで俺を馬鹿にする。」と勝衛はヌツと立つた。

「あれ、お父さん。」

気が立つて来ると勝衛は口よりも手が早かつた。手当り次第に物を抛（ほう）り附けるのであつた。富乃は本能的にランプを掩つた。

「それとも貴様、姉の家出を悦んでゐるのか。」

「まあ。」

「然うだ。貴様は……」と引く息を貯へて、「貴様は悦んでるのだ。今日まで、今日まで姉を邪魔にしてゐたんだ、然う云ふ。然う云ふ拗強（ねじつよ）い貴様なんだ。」

富乃は呆れて見上げた。「お父さん。」

「まだ隠すか。貴様まだ隠すな。俺は丁と知つてゐる。姉が俺を怨んでゐなければ、貴様のために家出したのだ。貴様は姉と男を争つてゐるだらう。」

「まアお父さん……」

「■原※の件だ。嘘か。」

「え。」

(第二章 了)

現代語版

海鳴

—

「仕方ない、帰りましょう」

遠く郊外に汽車の影がすっかり見えなくなったとき、富乃は溜息をついて改札口を離れた。握りしめた木の柵にびたりと汗の痕が残っていて、ふとそれを見つけたことも寂しかった。作男たちは力が抜けて、ぼんやり突っ立っている。

「んでも汽車はまだ出ますべ。七時と何時だか、夜行の東京行きがあるはずでがすよ。なあ淀爺、そうだったなあ」

年かさの作男が慰め顔で声をかけ、この頃急にやつれてきた娘の姿を、気の毒そうに眺めた。

「そうだとよ」

呼びかけられた淀爺は、ずっと離れたベンチで腕を組み、日ごろの剽軽（ひょうきん）さもなかった。突っ伏して、足もとに唾など吐いている。

「いいえ駄目駄目、姉さんは今の汽車で行ったに違いない。もう諦めて帰りましょう」富乃は声を潤ませた。

作男二人はぐずぐず顔を見合わせている。

「だって今の汽車には確かに乗らなかった。俺アちゃんと見たんだもん」

「もう一本、汽車を見てから行きますべ。このまま帰ったら俺ア、旦那にどれだけ叱られるか判らねえだ」

「俺もさ、それを考えてる。今ごろはまた、きっと気が違って、脇差でも振り回してるに決まってるだ。村中の騒動だ」

「なあお嬢さん、せっかく来たんだから、もう一本汽車を見て、それで念を入れて帰ったらどうだね」

百姓たちはおずおずと富乃の顔色をうかがった。

娘は少し顔を曇らせたけれど、「でも私、どうしても姉さんは今の汽車で行ったとしか思えないもの。逃げても隠れても、思ったことは為し遂げる姉さんだから。お父さんがどんなに怒っても……もう仕方ないと思うわ。帰りましょう。帰って私がお父さんに折檻されれば、それでいいのよ」と、うつむいて小指の先を、そっと目蓋にあてた。

「そうかなあ」

「それに私、今ふっと考えて心配になったの。こんなに四方から探されるなかを、くぐって逃げる心はどんなだと思わ。隠れるのに夢中になって、食べるものも食べていないんじゃないか。体に障ったら、それこそ大変なもの。私、今それを思ったの」

「それは大丈夫ですがすよ」作男たちは互いに笑っていた。「お前さんが思っているようなお姉様じゃねえだよ」

「今ごろはどこかで手足を踏ん反らして寝てますべ」

「それならいいけれど、ああ見えて姉さんはそう丈夫な体じゃないから。ああ、私そればかり心配なの。今ごろどこまで行ったか……姉さんも気の毒な人……お父さんも気の毒な人だわ」

言いかけて、富乃はふと耳を澄ました。汽車がM——川の鉄橋にかかったらしい。一度聞こえなくなった車輪の響きが、また朗らかに遠く響いてきた。

それまで黙って、片隅でうつむいていた淀爺が、むっくり起きて富乃の前に来た。いつもは冗談の飛び出る大きな口をむずかしく結んで、目をしおしおとさせていた。淀爺は富乃が生まれる前からいる作男で、女房もなく子もなく、誰もその素性を知らない風来の独り者だった。

「お嬢様、お前様はじゃあ、お姉様を見逃してやろうという気ですかね」

「なぜなの。私、姉さんはどうしても今の汽車だと思うのよ」

「本当に、見逃してあげるんだね」淀爺は涙声になった。

「どうしたの爺や。それじゃいけないと言うの」

「うう、飛んでもない。飛んでもない。私は今朝からこうして皆が大騒ぎして、お嬢様を探すのを、意味もないことだと思っていましたよ。よくその気に

なっただされた。籠に、どれだけ骨を折っても、お姉様は野の雀だ。籠におとなしく居着きはしねえだよ」

淀爺は皺だらけの頬に、ほろほろと涙を流していた。

二

「どうしたんだよ淀。急にどうしたの」

富乃は停車場から連れ出して、馬車屋のほうへ肩を並べながら、心配そうに覗き込んだ。泣いた老爺の顔は、目のまわりだけ洗ったように光っていた。作男二人は呆気にとられて、後から離れてついてくる。

「なあに、なんてこともねえのさ。ただちょっとな……へっ、詰まらねえことだ」老爺は少しきまり悪そうに、平手でずりと顔を撫でた。

「だってお前」

「お嬢様。雀の子は雀だ。旦那がどれだけ丹精しても飼鳥にはならねえだよ。

飛ばしてやるのが何よりの功德で御座りますよ」

「功德？ 姉さんのことなの」

「なあお嬢様。袈裟次様が帰らないと聞いたら、旦那はまた気が違って、お前様ひとりに当たり散らしますべが、なあ、じっと辛抱してな。姉様がどんなに折檻されても、お前様は旦那様と親子だぞ。殺すと言っても親子だ。それが袈裟次様のため、第一お嬢様のためだ」

「それが判らないんだよ。さっきから一体、雀とは何のたとえなの」

「何のたとえ？ たとえに聞こえるかね」淀爺は苦々しそうに言って、唾をぺっと吐いた。「一生に一度は、たとえの解ける時も御座りますよ」

「それにお前の言い方だと、私だけがお父さんと親子で、姉さんは他人のように聞こえるじゃないの」

「なるほどな、こいつは理屈だ。ははははは」淀爺は往還の真ん中で足を止めて、突然笑い出した。「そうだ、お前様と袈裟次様は双生児だったな。それならお嬢様が旦那様の子なら、袈裟次様も旦那様の子に違いなかったね。いや大きに、これは飛んだ粗相で御座ります」

丁寧にひとつお辞儀をしてから、齒のない顔を皺だらけにして笑い出した。今泣いた顔が渋紙のように引き攣っているとしたら、それを揉んでごそごそと音を立てるような笑い方だった。

「淀。何が可笑しいの」

富乃はむっとして離れた。淀爺の白くれた笑いぶりが、心の底からときどき浮かんでくる**ある暗い影**を、富乃の胸に落としたのである。

それは——性質も気性もこれほど裏表な姉と自分が、同じ親の同胞（はらから）とはどうしても信じられないような、そんなことがあった。けれど二人は双生児だ。同じ日に同じ日の目を見たというだけではない。**母の胎の中で同じ**

胞衣（えな）に包まれて、同じ血に育ってきたということは、疑うにはあまりに明白な事実である。富乃はいつもそれを思って、胸を撫で下ろした。

「何してるやお爺。何が可笑しいだ」

「ほうれ、荷馬車が来た」

後から来た作男たちに背中をどやされて、老爺は我に返った。

「お前らの知ったことでねえ。このたとえが解けるのは、俺と旦那様と二人よりほかに無えだ」淀爺は二人を睨んで、苦い顔をした。

「またお爺のお株が始まった。ははは」

「お前らに言ってるんでねえ。お前らは、今のことが今でなきゃ判らねえ代物だ。世間にはな、知らねえから済むが、知って見るとびっくりするようなことがどっさりあるんだ」と言って、老爺はのそのそ歩き出した。

馬車は幸い一台あった。疲れて帰ってきて、いま馬に湯を使わせているところだと馬丁は渋っていたが、屋敷と聞いて亭主が飛んで出てきた。姉の家出はもうこの辺でも噂になっているらしく、うるさく聞かれるのを好い加減に答えながら、富乃と淀爺は一緒に馬車へ乗った。作男の一人は高城の伯母の家に、一人は前谷地の親類に、ともかく姉の家出を知らせることにした。

馬車は夕靄を衝いて、心悲しい喇叭を吹き流しながら、長い田舎町を走り出した。村の子どもたちがばらばらと馬車の後を追いかけてくる。

自分の村では蛇蝎のように嫌われながら、三里も離れればもうこんなに尊敬される——自分の家の富が、富乃にはしみじみ悲しかった。村ひとつを敵にして、寝るときも脇差を枕元から離したことがなく、始終村人と居合腰でいるような父の性格が、娘の身としては悲しかった。勝気な姉は歯を噛みしめて、村人に弱いところを見せないようにしていたが、それでもずいぶん苦しそうに見えるときがあった。今度の家出も、そのあたりから出たのではないだろうか。
家の祟りに負けて、家を出る気になったのではないだろうか。

「ねえ淀、爺や」富乃は声をかけた。

「何か言ったかね」淀爺はきょんととして顔を上げた。今朝からの騒ぎで、もうとうとうしていたのだ。

三

富乃の家、遠山は**野蒜村草創の旧家**で、維新前までは**旧仙台藩からお船番所の支配を預かっていた**。けれど富乃が生まれた頃の家は、築港流失の損害を受けてひどく寂れていた。屋敷も他人に渡そうかという境で、父が真っ青な顔をして奥の間に閉じ籠もっているのを、幼い心に覚えている。番所あとの広い家は隅々まで光が届かず、雨漏りで柱の腐っているような部屋がいくつもあった。村の子どもから除け者にされていた姉妹は、結局それを幸いに、土足のまま家中を駆け回って遊んだ。日中はたいてい海へ出て、波頭を相手に遊んだ。産土（うぶすな）は龍宮だなどと人に笑われるほど海が好きで、眠るとき以外

は海を眺めて育ったと言ってもよかった。それは姉妹とも、恐ろしさになるべく父の顔を見ないようにしていたためもあった。だが姉には、根に大胆なところがあった。

父は持病の関節炎と鬱屈にいらだって癩癰を立て、ひどく母に当たり散らすので、富乃などはおどおど震えているときでも、「何をする！」と姉は目を据えて父に逆らっていくことがあった。父はべつに姉を可愛がっている風もないが、そういうときは決まって、じっと姉の顔を見つめているうちに、不思議に気が折れていくように見えた。

「爺や、築港が流れてもう何年になるね」

富乃はほっとして言った。日はとっぷり暮れて、馬車は藤巻あたりの堤を走っていた。少し南に回った湿っぽい夜風に、幌がはたはたと鳴った。

「何年って、お前様の年だけだ。お前様は築港の流れたその朝に生まれた人だ」

「築港さえ流れなかったら……お父様も今のようなことはなかったろうけれど……」

「なあに性分だ。極端から極端へ飛ぶ人でな、やっぱり寅年の生まれだ。あの築港騒ぎだってそうだ。今思ってもまるで気違いでがすよ。村の法印が反対らしいことを言ったとかでな、本当に大日堂へ火をかけようとした人だもん」

「そうだってねえ。お母さんもその苦勞で死んだのだよ」

富乃の家が村と確執を結んだのは、その築港がもとだった。

その頃はまだ旧藩士にも公債証書が残っていて、産業熱がひどく起こった時代だ。横浜以北の太平洋沿岸に良い港湾のないのを憾んで、航路を開こうと、政府も民間も調査に熱中した。陸中の釜石、陸前の女川、塩釜など、各地の有志が中央政府に奔走して指定地の争奪戦になったとき、世に知られもしないこの牡鹿桃生の一角から猛然と叫び立てたのが、富乃の父、**遠山勝衛**だった。

彼は、鳴瀬川の流域を扼して宮戸島から防波堤を築けば、この野蒜の地は商港として最良の地形を備えていると見た。潮流、風位、水深、どう見ても築港の資格があると見た。彼は政治家ではない、事業家でもない。ただひとつ、**土を熱愛する気概の人**だった。策略や辞令は彼の長所ではない。**強情と無法**とで、この難事業を完成しようとしたのだ。

「待て、俺が**鬻者（いざり）**を歩かせて見せる。黙って俺のするさまを見ろ」

彼は請願にもためらう村人を尻目にかけて私財を投げ出した。工部省のお雇い外国人を招いて実測を遂げたうえ、三人の有志と水盃をして村を出た。

「その頃の旦那様といたら、まるで気違いだ。県庁で許可しなけりゃ一揆を起こして蓆旗（むしろばた）でも立てる気だ。いつも塩をつけた握り飯を腰に下げてな、今日もか、**県令様の邸の前を何日でも動かねえだ**。ご苦労ですのう、なんて、県令様が出勤しながら挨拶して通られたということで御座りますよ」

淀爺は富乃姉妹によく話して聞かせた。

「俺は目だ。お前たちは手足だ。目は体のなかで一番前に出ている。目の動くとおりに働け。俺は目だ。」

彼は三軍を指揮する将軍のように、ともすれば怖じ気づく村人を叱咤し、号令した。

四

勝衛の狂熱は、まず土木で有名だった当時の県令を動かした。中央政府に具申して若干の補助金を得た。あとは地方債を起こして、小規模ながら商港としての築港が着手された。

村人は驚喜した。喜ぶというより、むしろ顛倒して、三本煙突の泥に酔った魚のようにうろうろと動き回った。大きな外国船がもうその岸壁に横づけされているような気がして、田を売り畠を売って開港後の準備を急ぐうちに、第一期の防波堤がまず出来上がった。

すぐ続いて第二期の拡張に入るべく、東京仙台から数百の官民を招いて盛大な竣工式を挙げることになった。山車が出る、踊屋台が出る、芸者ばかりも何十人、塩釜石巻の港々から寄せ集めて、明日の一番狼煙で式場へ繰り込もうという——その前の晩、夜半からの大暴風雨で、翌朝見ると、二十何万円を投じた防波堤は根こそぎ流されていた。

「そのときは、最初に旦那様に知らせたのは俺だよ。旦那様は仲の間に鯉の刺身で朝飯を食っておられた。防波堤が流れたと言うとな、あっ流れた！ と
言ってな、食っていた魚をぺっと掌に吐き出してからな、ぼかんとして俺の顔をじっと眺めておられたよ」

これも淀爺のひとつ話だった。

富乃姉妹が生まれたのは、ちょうどその同じ朝だった。

剛愎な勝衛も、二三年は喪心者になった。財産を擦り、田畠を失った百姓たちは、村にも住みかねて廻船の炊夫になったり、あるいは北海道に屯田兵を志願したりして、勝衛を恨む気力もなく、寒空のなかを萎え萎えと村を出て行く。それをぼんやりと勝衛は見送った。

防波堤の流失は設計技師の疎漏に過ぎない。もう一度やり直さなければ、せつかくここまでの構えが惜しいと励ましに来る人々があっても、応える元気さえなかった。閉め切った一室に籠もって、屋敷から一步も外へ出なかった。

築港主唱者三人のうち、一人は現場から発狂して村中を躍り歩き、一人は麴室に入って見事に割腹してしまった。

五日の薄い月が、白々と河原に漂っていた。川に沿った長い石高道を馬車に揺られながら、富乃は幌をかかげて、夢のような川面を籠めた靄をじっと眺め入った。淀爺は隅にうずくまって、もう快い軒だった。

塩釜から石巻へ通う小蒸汽船が運河通いの航路を始めて、野蒜の村がその中継場になったのは、築港騒ぎから七年目だった。それ以来何も手につかなかった村人は、世の文明が急にこの村へ脈打ってきたような気がして、村の再興はこの時と気負い立ち、七年ぶりに絶えていた松尾神社の本祭を執り行い、若者たちは揃いの浴衣で神輿を振り出した。

家の格式から、姉の袈裟次は稚児姿で行列の露払いに立った。くっきりと色の白い、金糸で芳野霞を縫った燃えるような振袖姿が姉の頬に映えて、絵のように美しかったのを、富乃もわずかに覚えている。父もこのとき、何年ぶりかに外の土を踏んだ。野袴に福草履という扮装で、左脇の名主座に坐った。

祭礼は三日続いた。その三日目の晩、父は片腕をだらりと下げ、顔の半分に血に染めていた。高い頬骨を伝ってぼとりぼとりと滴る血は、裾にたまって、べとりと糊のように粘っていた。

たかが小蒸汽船の開通くらいでお祭り騒ぎをするのを嘲笑したとかで、七年間沈黙していた村人の憤怒を買ったのである。河原へおびき出して、半死半生の目に遭わせたのだ。

「殺せ、殺せ。俺を殺して村が立つか。柱を倒して家が立つか。殺せ。」

勝衛はよろめいて喚き叫んだ。獣が吠えるような父の声が、がらんとした大屋根に響くのを、富乃は寝床の上で震えながら聞いていた。

父の性格は、この時からがらりと一変した。村から蛇蝎のように嫌われる金貸しを、公然と看板に掲げて始めるようになった。女房子もなく、ただ金を愛する人になった。

五

「ねえ爺や、爺や。家へ帰って、お父さんにどう話しましょうね」

富乃は淀爺を揺り起こした。馬車は堀田林を過ぎて、榛木の道を村に近づいていた。

「どうと言って、袈裟次様のことかね。どうせ仕方あんめい。正直に言うのさ」淀爺は生欠伸をした。

「それがねえ……」富乃はほっと溜息をついた。

父の気性だ。今ごろは門前に高張提灯でも点けて、小作の者たちを寄せ集めて騒動していることと思ったのに、屋敷はしんと静まり返っていた。村を一望に見下ろす高台に、深々と林をめぐらせ、古風な鉾打ちの棟門を構えた家は、小さな城砦とも言いたい威厳を見せていた。

「お姉様のためだぞ、お嬢様。旦那様がどんな難題を言っても、こらえておられるだよ。お前様たちは親子だかんな」

門前に馬車が停まったとき、淀爺はもう一度念を押した。

いつもなら今ごろは、夜なべの粳磨り唄が賑やかに聞こえる台所の大戸に
明々と灯が射しているのに、雨のように降る虫の音に人の気配もなかった。富
乃は、沈黙のなかで何か恐ろしいものに待たれているような気がした。少し胸
を震わせながら、何気なく開けた戸は、ひやりとするほど音を立てて、鳴子の
音が奥の間まで響いていった。

作男たちが六七人、ずらりと囲爐裏を取り囲んで、ぼんやり焚火を見つめて
いた。富乃は憂える目に迎えられながら、家へ上がった。

「お父さんは」

「奥だ。夕方からもう引っ込んだままでがすよ」作男の一人は、それでも裾を
掻き寄せて席を空けた。「そんでお爺んのほうはどうだったね。やっぱり手が
かりねえかね」

「ああ、駄目だった」淀爺はうなだれて坐った。

「石巻を追いかけた連中もさっき帰ったよ。あっちはまるで姿も見えねえとの
ことだったよ」

「そうか……」と言って、淀爺は富乃に目配せをした。早く奥へ返事をしたほ
うがいいというのだ。

暗い部屋を三間ばかり隔てた奥、父の居間の杉戸に手をかけたとき、富乃は
そこからぶうんと匂ってくる線香の匂いを嗅いだ。富乃は思わず手を止めた。
何とはなしに気に打たれて、喉の底がついこくりと鳴った。

「お父さん、お父さん……ただいま、帰りました」

外から声をかけてから、おずおずと重い杉戸を開けた。

父の勝衛は後ろ向きに腕を組んで、じっと仏壇を見つめていた。透かし欄間のついた十六畳の居間は、台ランプの灯が隅まで届かず、陰気に天井に輪を作っていた。仏壇には一本の蝋燭が細々と点っている。

「お父さん。お父さん……」

厳格に過ぎる勝衛は、たとえ妻子でも、向かい合って坐るのに畳の縁を越えることを許さなかった。富乃は煤光りのする柱のところに坐って、小さく声をかけた。父の前には見慣れない**梨子地蒔絵の手箱**が広げられ、その中に**地図か測量図**とでも思われる書類がぎっしり詰まっていた。

「お父さん、あの……淀と帰ってきたんですよ」

勝衛はほっと深い溜息をついていた。

「お父さん——」

勝衛は後ろ向きのまま、腕も解かなかった。「**袈裟次は帰るまい。東京へ走ったんだ。**」と、苦々しげに、独り言のように呟いた。

このとき、蝋燭の芯が花のように咲いて、ぽつぽつと瞬いて父の影を揺り乱したが、また炎を立て直して、遅しくはあるが痩せた勝衛の影を後ろの砂壁

に、じゅっと突き付けるように動かさなかった。外はもう月が天に冴えてきたのだろう。耳を澄ますと、沖のほうから微かに潮鳴りの音が寄せ響いてくる。

「富乃」

勝衛はぐっと向き直った。「ここへ出ろ。出ろ」きつとした声だった。

「お前、娘の家出の理由は知っているだろうな。何のために急に家出したか、知らないことはあるまいな。それを聞かせてくれないか」と言って、じっと富乃を見つめた。大きな目に涙が一杯溢れていた。

「お父さん、それは……」

富乃はあまりに意外な問いに、父の顔を見上げた。

「いや、隠してはいけない。お前がそれを知らないはずがない。隠しだてすると、お前も恨むぞ」——そう言う父の顔は、顎の骨が急に痩せたように蒼かった。

「どうしたんです、お父さん」

六

勝衛は一膝乗り出した。

「富乃、隠さず言ってくれ。姉妹のお前が知らないというはずがない。俺は怒らない、決して怒らないから、知っているとおりを話してくれよ。もう私は覚悟している、何を聞いても驚きはしない」

しきりに瞬きしながらも、無理に声を落ち着けていた。

「ですけど私……」

「いや、お前は知っている、知っている。知っているとも。ははは」邪推深く笑ってから、「なぜそう隠すのだよ。なぜ正直に言ってくれないのだ。なあ富乃、袈裟次だって父母の恩を知らない奴ではない。理由もなく家出して、私をここまで苦しめるはずはない。きっとお前たちには訳を話しているに違いない。なあ富乃、それを聞かせてくれというのだ」

鉾で刈った白い顎髭を、震える掌をあてて、勝衛はばりばりと撫で回した。それは気が高ぶるときの彼の癖だった。

「でも私、本当に姉さんから何も聞いていませんもの」

「これ、まだ隠す！ **お前たちはただの姉妹ではないぞ、肉体を分けた同胞だ。**これほどの決心を打ち明けないはずはあるまい。なあ富乃、俺は頼むのだ。見ろ、これ、お前の親がこのとおり頼んでいるのだ。なあ富乃、姉は何と言っていた、何と言った」

勝衛は関節炎で痛む膝を軋ませて、じりじりと詰め寄ってきた。富乃は恐ろしい嵐を待つような心で、膝の前の綿を引いていた。

「なあ富乃。昨日だ。あの**鳴神**の奴が、俺を見て妙に嘲笑ってな、変なことを言うのだ。気違いめが、とその時は気にも留めなかったが、今思えば、あいつ

はちゃんとあれの家出を知っていたのだぞ。鳴神さえ知っていることを、お前が知らないというはずはなかろう。な、富乃、どうした、なぜ黙っている」

富乃はうつむきながらも、そっと手を伸ばして、間にある手あぶりを横へ退けた。それほど近く、勝衛は膝を進めていた。

「鳴神が何か言ったんですか」

「鳴神の奴が。何と言って、あいつは……」勝衛は少し言葉に戸惑ったが、太い眉をひそめて、「富乃、俺はあいつに笑われた。指さして、げたげた笑われたのだぞ」と、不快そうに口を閉じた。

「でも、どうせ気違いの言うことですもの、何を言うか知れません」

「いや気違いじゃない。あれは気違いの言う言葉じゃない。何もかも知っていて、気違いの真似をしているとしか思えない。俺はあの目にじっと見つめられると、体中が冷たく粟立つような気がする。あの目をよく見ろ、**肚の底から人を睨んでいる目だぞ**。あいつは気違いじゃないぞ、気違いじゃない」

勝衛は今そこに相手でもいるように、浮ついた目つきで後ろの壁など見回した。富乃はだんだん高ぶってくる父を怖れて、「お父さん」とためらいながら言った。

鳴神というのは村養いの狂人である。築港の当時、もとは運河口で旅人宿などして相応に暮らしていたが、勝衛の激しい狂熱に動かされ、無学ながら財産を投げ出して、村から三人の主唱者の一人となった。防波堤の流れたその朝、

同志の一人は割腹し——彼は無心に磯端を躍り回っていた。彼は魂の空袋になって、村の養いに生きてきたのである。それきり二十一年。勝衛はこの頃ひどく彼を恐れて、道で会っても顔色を変えた。

勝衛はぐっと富乃の手首を握りしめた。「俺はもう覚悟している。言ってくれ」握られた掌は熱く汗ばんでいた。

富乃は不安そうに、震えている父の目を見上げた。「何をです」

「袈裟次は何と言って俺を怨んでいた。何と言って怨んだ。」

「姉さんがお父さんを怨む？ どうしてです」富乃は意外な問いに答えようもなかった。

「いや怨んでいる、怨んでいる。怨まない者なら、選りに選って今日、家出するはずがない」と、またわくわく震えて、「富乃、今日を何日だと思うのだ」

「……」

「築港の流れた日だ。俺の築港が流れたのは、二十一年前の今月今日なのだ。」

「ええ」

「ああ今日だ。今日なのだ」

勝衛は手を突き放して嘆いた。

七

潮鳴りは遠雷のように、沖のほうから轟いてきた。彼岸の頃から日ごとに冴えてくるその音は、しだいに忍び寄る冬の前触れのようなものだった。

富乃はおどろしい遠鳴りを聞き澄ましながらも、腕を組んでいる父の後ろ姿を悲しげに眺めた。戦えば狼のように牙を研いできた父も、齢には勝てなかった。絶え間ない関節の痛みに、右の肩の肉はげっそり削げて、背筋は痛々しく捻れ曲がっていた。父ももう六十四だ。

「お父さん。姉さんは東京へ行ったんです」富乃は恐る恐る言った。「姉さんの気性では、探したって帰ってきはしないでしょう。当分、様子を見ていたらどうなんでしょうね」

勝衛はじっと一点を見つめて答えなかった。そっとその視線を辿ると、それは仏壇に瞬く蠟燭の灯だった。

「ねえお父さん。それに考えると姉さんは、どうしてもこの田舎に屈まり通す人じゃありませんよ。置手紙のとおり、姉さんは東京で運を開くのかも知れませんから、ねえお父さん、少し長い目で見てあげたらどうでしょうね。姉さんはよほど固い決心に違いないんですよ」

「ええ、俺はそれを聞いてるんじゃない」と性急に舌打ちして、「富乃、なぜ正直に、袈裟次は俺を怨んでいたと言わない。なぜ隠すのだ」

「隠すなんて……今朝、置手紙を見るまで、本当に私は何も知らなかったんですよ」

「いや、あいつは俺を怨んでいる……怨んでいる」

「お父さん、それはお父さんの邪推ですよ。姉さんはあんな気性でも、お父さんのことは始終考えていましたよ。それを怨んでいたなんて、そんな人じゃありませんから……姉さんを信じてください。ねえお父さん、姉さんが可哀そうですよ」

「お前！ まだ隠す気だな」

勝衛はぐっと睨めた。喉の底で唸るような声だった。

「ですから、鳴神が何を言ったんですよ」

「いいから……隠せ。隠せ。寄って集って……皆で隠せ」と、わくわく息を高ぶらせながら、震える目で周囲を掻き探した。

富乃はおろおろその視線を追いかけているが、「ねえお父さん、気を鎮めてくださいよ。姉さんはそんな人じゃないんですよ」

「ええ、お前まで俺を馬鹿にする」と、勝衛はぬっと立った。

「あれ、お父さん」

気が立ってくると、勝衛は口より手が早かった。手当たり次第に物を投げつけるのである。富乃は本能的にランプを庇った。

「それともお前、姉の家出を悦んでいるのか」

「まあ」

「そうだ。お前は……」と息を貯めて、「お前は悦んでいるのだ。今日まで、今日まで姉を邪魔にしていたんだ。そうだ、そういう捻じ強いお前なんだ。」

富乃は呆れて見上げた。「お父さん」

「まだ隠すか。お前まだ隠すな。俺はちゃんと知っている。姉が俺を怨んでいないなら、お前のために家出したのだ。お前は姉と男を争っているだろう。」

「まあお父さん……」

「清原の伴だ。嘘か。」

「え」

(第二章 了)

作業メモ

・底本コマ対応：（一）＝コマ12～13／（二）＝コマ14～15／（三）＝コマ15～16
／（四）＝コマ17／（五）＝コマ18～19／（六）＝コマ20～21／（七）＝コマ21～
22

・今回からNDL提供の全文テキストデータ（OCR）を下敷きに使用。座標情報から
ルビ・柱を除去し、縦組みの読み順に再構成した抽出結果＝99_NDL全文テキスト_
本文抽出_コマ順.txt

・※の主な箇所：「藝も※ない事つた」／「亜米利加から直輸入の……」以下の一文
（OCR崩れ）／「鳴瀬川※」「宮戸島※」（原文は伏せ字か地名か要確認）／「維
新以後事毎に萎縮して……」の一文／「菊綾の水下の裾※」／「えゝ知つてゐる。」の
話者／「潮鳴※の別れ」（「親潮」の誤認識か）／章末「■原※の伴」＝**次章の鍵に
なる人名。要再確認**

・「M——河」＝実名を伏せた表記。文脈から鳴瀬川

・富乃・袈裟次は二十一歳（築港流失＝二十一年前）。第一章で子爵が「十八九」と
見たのは外見の印象

第三章「銀貨」

解題

★1. 野蒜は、子爵家の旧領地だった

汽車の中で、袈裟次が「港を一つ作りたい。一度廃れた港を再興したいの」

「野蒜です」と言う。子爵は思わず叫ぶ。野蒜は子爵家の旧領地であり、彼が今日小牛田で下車したのは、長旅の屈託を「久し振りに旧領地の山河に浸して」忘れようとしたためだった。だが子爵は「いいえ……知りません」と嘘をつく。

→ 第一章の偶然の出会いが、旧領主の子と、その土地を父が滅ぼした娘という関係だったことが判明する。築港＝この小説の全登場人物を結ぶ結び目。

★2. 子爵が抱えていた「重大な問題」

- ・大学時代、貧しい家の十八の娘と約束を交わし、忘れたまま英国へ五年留学。帰朝すると娘は「真摯なる紳士の口にするさへ憚るやうな場所」にいた。女は洋行中に子を産んでいた。
- ・子爵は悔いて救い出そうとするが、女はもう「笑ひを武器とする女」で、ただ笑って取り合わない。
- ・そこへ同族の令嬢（遠い従妹）との結婚問題が起こる。「女を取るか棄てるか」——それを決めるための旅だった。

・上野駅ではその令嬢が迎えに来ている。子爵は袈裟次の手銀貨を握らせて別れる。

★3. 冒頭の伏線——仏壇の写真

淀爺が勝衛に投げつける。「その秘密を喋るのはお前様だぞ。仏壇のあの写真は何んだ」。勝衛は色を変え、飾ってあった写真を懐に入れる。「ひどく古ぼけてはゐるが、それは洋服姿の年配の男の写真であつた」。

→ 淀爺の「雀の子は雀だ」「この譬の解けるのは、俺と旦那様と二人より無えだ」と繋がる。袈裟次の出生の秘密が仕掛けられている。

★4. 袈裟次の東京

上野の朝は「ホツカリと点いた電燈」「大根の切端が道路に腐れてゐて、泥の色も穢らしかつた」。憧れの十二階（凌雲閣）も「無遠慮に突立つた冷たい煉瓦の色は、余りに露骨で」興が褪める。母の絵解きで見た錦絵の記憶（スペンサアの風船乗り）だけが優しい。

そして子爵がくれた銀貨を、袈裟次は溝板に落とす。「誰の恵もうけるものか。自分は自分で生きて見せる」。小僧も「要らねえ。俺等は乞食ぢやねえ」と投げ捨てる。

——だが章の終わり、一日歩き詰め、昨日の朝から何も食べていない袈裟次は、公園で寄ってきた女衞（ぜげん）まがいの若い男に銀貨を一枚渡し、そし

て自分から言う。「私もお前さんの宿へ連れてつてくれない。何処だつて好いわ」。

5. 大沼姓の人物は、この章にも登場しない。

翻刻（原文どおり）

銀貨

（※冒頭は第二章の続き＝勝衛と富乃の場面）

「富乃、嘘か。嘘か、富乃。嘘なら嘘とハッキリ云つて見ろ。」

富乃は父の目を怖れるやうに差俯向いた。

「貴様！」

勝衛が躍懸らうとする時、杉戸を蹴放して淀爺が飛込んだ。暴れ狂ふ勝衛を背後から睨（しか）と抱留めた。

「又初まつたか旦那、何んの真似だ。」

「放せ、放せ、拗強い女郎だ。姉を出奔させたのは此奴の仕業だ。此奴等は何も彼もみな知つてゐるのだ。」と、身を挽（もが）いた。

淀爺はヂリヂリ引擦られながら、「姉様の家出はお嬢の知つた事でねえ。それがお前様の氣違だ。」

「うゝん放せ。俺が知つてゐる、知つてゐる。今日は十三日だ、築港の流れた日だ。此奴等はみな秘密を承知の上で、俺を斯う苦しめるのだ。……あの面を見ろ。あの面。何処まで拗強い女郎だ……放せ、放さねえか。」と、富乃を睨む目は焰と燃えた。

「氣違ひめ！」

「何！」

「その秘密を喋るのはお前様だぞ。仏壇のあの写真は何んだ。」

勝衛はギョツとして色を変へた。力任せに淀爺を振放すと、這擦（はいず）るやうにして仏壇の傍に行つた。飾つてある写真を懷へ入れた。ひどく古ぼけてはゐるが、それは洋服姿の年配の男の写真であつた。

「その通りの氣違だ。」

淀爺は額の汗を引擦りながら、暫く勝衛を睨め附けてゐた。

（一）

「然し、何の用意もなく東京へ出るとは、些と無謀のやうに思はれますがね。」

子爵は鞆（しな）やかな指先で、海軍刻をパイプに詰めながら、物軟かに話しかけた。

娘はグツタリと後頭を窓框に凭せ掛け、片手で無精さうに甘納豆の袋を引寄せて、それをボツボツ口へ搬んでゐた。

「何うにかなるわ。心配するほどぢや無いものよ。」

「それは然うでせうが……。」

「そんなに御心配なの。」袈裟次は子爵の方を流眼（ながしめ）に莞爾（にっこり）して、「ぢや貴方、私の活きる道考へてくれたら好いぢやないの。一体何うしたら東京で、お錢なしに暮して行けるでせう。」

「然う……ですね。考へてる所なんですよ。」

子爵は蠟マツチを擦りかけて、憎いほど氣沮（きおく）れない娘の態度を、黙々と眺めてゐた。

「私ね、港が一つ作りたいんです。何うです、大望でせう。」

「港！」

「ほゝゝ。吃驚したでせう。私は斯う云ふ事を考へてる女なのよ。築港なのよ。一度廢れた港を再興したいんですの。あらあの顔。ほゝほゝゝ。」

娘は正面から嬋如（せんじよ）※な笑ひを浴せかけた。

「然し、それにしても、その港と云ふのは一体何処なんです。慥か一度築港したと云ひましたね。」

「野蒜です。」

娘は忪へかねるやうに鼻を掩うた。

「野蒜。して、野蒜だつたのですか。」

子爵は思はず叫ばずにゐられなかつた。

野蒜は子爵家の旧領地である。今日小牛田駅に下車したのは、長旅にも休まらぬこの心の屈託を、久し振りに旧領地の山河に浸して少時でも忘れやうとしたのであつた。急に又東京行のこの汽車へ乗る気になつたのは、避け難い運命を恐れて逃げ惑ふ自分の因循さが恥かしくなつて、吉くも凶くも来る日は急げ、何時まで卑怯に迂隠（うかく）れせずに、明日はその首の座に直らうと決心したのだ。

「ぢや野蒜を御存知なの。」

「いゝえ……知りません。」

子爵は額を赤くしながらも、長く洋行してゐて旧領の人々に面を知られないのを僥倖に思つた。思ひ屈して旅の塵埃に塗れたこの姿を、ならば知る人に見せたくはなかつた。

「然うですか。」

娘が不審さうに子爵の徒（ただ）ならぬ顔色を見上げた時、汽車はゴトリと大きく揺れて、広大な停車場へ着いてゐた。

「せんだアーい。塩釜線は乗換へ！」

プラットホームの突端に突立つて、朗々と停車場中に響き溢れる老駅夫の第一声に沈黙は破れて、雑然たる物音は夜の停車場を目覚めさせた。

（二）

汽車はこの停車場から急行になった。

——こゝに一人、貴公子があつた。青年の若々しい心から、上の空に約束した女があつた。棄てるともなくその女を忘れて、貴公子は英国に遊学した。五年経つた。この夏帰朝した。女の姿はもとの家に見られなかつた。貴公子は探すともなくその行方を尋ねると、思ひ掛ない場所に女を見附けた。真摯なる紳士の口にするさへ憚るやうな場所に昔の恋人を見た。

女は全で昔の女ではなかつた。痩せて底弱さうな女は胸廓なぞは白い壁のやうに肥満してゐた。顎なぞ二重に括れて、大胆に沢々と肥つてゐた。何事も泣く事が楽しみだつたやうな少女が、始終キナキナして身体今体が涙の囊※、——何事も笑ひを武器とする女になつてゐた。

貴公子は心から悔んだ。謝つた。罪を訴へた。女は笑つて相手にしなかつた。それでも女はコロコロ笑つて取附けなかつた。女は貴公子の洋行中に、その子を産んでゐたのである。

——その貴公子が子爵成瀬淳作※なのだ。

子爵は目を瞑つて考へた。英国風の厳肅な教育をうけた子爵は、罪惡に対する懼（おそれ）も強かつた。貴公子——子爵の心は初めて痛んだ。子爵は如何なる犠牲を払つても、泥土の裡から女を救ひ出すより外に罪の贖ひはなかつた。女を家へ入れやうとさへ説いた。然しその場合でも女は、たゞ笑ふばかりであつた。

汽車は二度ばかり大きな停車場へ停つた。然し子爵は目を閉ぐのさへ億劫だつた。単調的な車輪の響きを種々な言葉に聞取りながら、同じ環をダルダルと考が廻転してゐるのであつた。

そこへ今度の**結婚問題**が起つた。それは矢張り同族の令嬢で、子爵には遠い従兄妹にあたつてゐた。宛（あて）もない旅の間に、断然処決しなければならぬ断崖の上に自分を見出した子爵は、**女を取るか棄てるか**、因循な心を鞭つてもそれを決めようとしたのである。

子爵は福島辺りで目を覚した。終極ない考へに疲れて、何時か眠つたと見える。然うまで旅に困憊した身体を思ふにつけて、子爵はまだ決断のつかぬ自分の因循さが齒痒くなつた。明日は首の座だなぞと強ひて自分を励しても見た。

車内はもう深夜の姿だつた。乗客はみな凭合つて、寝穢く眠つてゐた。

「あゝ、もう何処。」

娘は生欠申し乍ら馴々しく子爵を見た。この無邪気な、鞠唄でも夢見てゐさうな娘の寝顔が、子爵の心に妙に又旧き恋人を憶出させた。

彼が初めてその女を知つたのは、まだ大学に通うてゐた〔頃だ〕。女は十八だつた。貧しい家庭に生れて、女は他人の店に帳簿なぞ記けるやうな境涯ではあつたが、まだ娘らしい初々しさを失はなかつた。どんな闇の中にでも厳しい母親の目があるやうな気がして、あッお母さんに叱られるなぞと叫び乍ら子爵

の熱い唇をうけた。でも子爵の言葉は正直に信じた。私恐いの恐いのと云ひながら段々大胆になった。

子爵は、旧い女が通つて行つた路を辿りながら、今のこの娘の身の上なぞを考へずにはゐられなかつた。

黒磯、那須、矢板と夜は深けて、雨はザンザンと降り瀉いだ。

「駄目だ、見えやしない。」

娘の失望さうな声に気が附くと、汽車はもう大宮近くを走つて、夜は穩かに明けはなれてゐた。娘は窓から半分乗出すやうにして、**話に聞いている富士山**をこの雨の空に探してゐるのであつた。

広告、電柱、朝市に急ぐ前栽ものゝ荷車、煙突の煙、みな都会の近いことを思はせて汽車の窓を過ぎた。娘は都近いと云ふその事が胸を躍らせると云ふ風で、ワクワク落着を失つてゐた。

子爵は空気枕を押しながら娘を見た。「東京に来ましたよ。」

「借（さあ）※何うします。」

「何うするツて私？ それは着いてからの事よ。その上で考へるの。」

「私は何んだか、この儘お別れするのは余りに……何んなら自活の道のつく迄でも、私の宅へでも来てゐては何うです。」

「貴方のお宅？ 私、知らない人の世話になるの厭ですね。」

「然し……東京はこんなに広いんだもの。」

「大丈夫よ。私一人ぐらゐ結構生きられるわ、何うかなるわ。」

「然うですか、然し……。」

「心配するがものないのよ。ほゝほゝ。この土を食べたら後は何を食べようと心配してる蚯蚓（みみず）はね、ゐないんですつて。判らない？ その意味は、貴方のやうな苦勞性な人を云ふ譬なのよ。大丈夫よ。ほゝほゝ。」

娘は東京と云ふ言葉に逆上つたやうに、急に浮々して、子爵の深切など耳にも入らなかつた。

汽車が上野に着くと、窓々を探して六七人の迎人が、子爵の前に走集つた。その中に一人、燦（あざ）やかに着飾つた美しい令嬢がゐて、ニツとしながら子爵の方へ歩み寄つた。子爵もその方へ為方なしに行きかけたが、ポケットを探りながら突と娘の方へ戻つて來た。

「では。」と、子爵は娘の手を握つた。「お達者にお暮しなさい。」

子爵は凝つと娘の顔を見詰めて云つた。娘の手には何か残された。

（三）

「東京！」

停車場の向側、果物屋らしい軒下に雨を避けた袈裟次は、小首（こうべ）ふ※やうな心で大きな町並を貪り眺めた。

児（こども）の時から始終憧れ夢見て来た東京とはこれだ。これから自分が活きやうとする東京とはこれだ。好く父勝衛が村人に向つて、**物の力と人の力が渦巻狂つて、戦ひの中から総てのものが生きて行く**と話して聞かせてゐた東京と云ふのはこれだ。その東京の姿が今、夢でなく自分の目の前に展けてゐると、袈裟次は胸を波立てた。

——然し、その受取つた印象は袈裟次が待望んだやうなものではなかつた。

町には昨夜の電燈がホツカリと点いてゐた。家並はまだ深く戸を下して、朝靄はボウと廂に立迷うてゐた。ほんの時々、空虚な始発電車が囂然（がうぜん）と音たてゝ通り過ぎる外には、三人五人づゝの労働者の群が、雨の中をビシヨビシヨ首を垂れて行く。**大根の切端が道路に腐れてゐて、泥の色も穢らしかつた。**

袈裟次は何んとなく失望を感じた。彼女の考へた東京は、最少し華やかに最少し活々して輝く「都会」のものでなければならなかつた。表通りを遠慮して横丁へ外れて行く朝の物売の振声も心寂しく、軒に朝を呼ぶ雀の勇ましさも聞かれなかつた。袈裟次は湯屋らしい焼筒から細々と雨に掠れ立つ煙を見るのも佗（わび）しかつた。

然し、東京へ来た、これから何うする。何うして生きる。何よりもそれが当面の問題であつた。

袈裟次は同じ軒下に雨を露（しの）いでる※小僧の方を見て、肌寒むさうに袖を搔合せた。兵隊の古服を膝までに着て、真田紐をグルグル帯にして、聞かぬ気らしい小僧は、高慢ちきに腕組なぞしてボンヤリ空を見上げてゐた。寝起きの頬に、何処の鬨（しきい）の痕かカツキリと残つてゐた。何れ暖かな昨夜を送つたのではあるまい。

「浅草の公園は何方？」

袈裟次は何がなし声かけて、人の言葉が聞きたかつた。

「那方（あつち）さ。」

小僧は無愛相に顎で指へて、ジロジロと袈裟次を見た。

袈裟次は心の裡に、自分の知つてゐる東京の地名を呼出してみた。泉岳寺、浅草、大丸、築地の門跡、愛宕山、上野……それは大抵、村から年々の伊勢詣りの土産話に聞覚えた名であつた。その中で袈裟次に馴染深く思はれるのは浅草の十二階であつた。春爛（しゅんらん）な桜の梢に聳え立つ凌雲閣の図は、スペインサアの風船乗りの錦絵と共に、茶の間の壁の裾貼になつてゐて、小児の時に好く亡つた母の絵解きに聞いてゐた。それが袈裟次の東京に知つてゐる全部であつた。

「姉イ、何か落ちちたぜ。」

小僧に気を付けられると、懷の藍手拭が溝板の上に落ちてゐた。拾はうと手を出して、初めて手の中に**大きな銀貨が四五枚**、気が附いた。急しい間に今の紳士が置いて行つたのだ。

袈裟次はその銀貨を見て、恥しさに顔が赤くなつた。

「何うにかなる。」と、袈裟次は漸く多くなつた人通りを見〔た〕。**あの男も生きてる、この女も生きてゐるのだ。これだけの人が東京に生きてゐるのに、自分一人活きられないと云ふ筈はない。誰の恵もうけるものか。自分は自分で生きて見せる、生きて見せると、**袈裟次は口に出して叫びたいやうな亢奮を覚えて來た。

袈裟次は上を見て、掌を開けた。**銀貨はザラザラと溝板の上に落ちた。**

小僧はそれを眺めてゐたが、袈裟次のボンヤリしてるのを見て、一二枚泥から拾つて手に渡した。

「何うかしてるぜ、お前。」小僧は小怜（こざか）しく見上げた。

「上げやうか。」

「馬鹿にするねえ。」

何う勘違ひしたのか、小僧はふツと面を膨してそこを離れた。

袈裟次は恥しさうに俯向いて、泥の中から銀貨を拾つた。そして指へられた浅草の方へ、泥濘を歩き出した。

方々の工場から汽笛が一度に鳴つて、町のどよみが波打つて来た。都会は今日の活営に入るべくソロソロ目覚めたのだ。

「姉ィ。もう一枚あつたぜ。」小僧は曲角まで追駆けて来た。

「お前さん拾つて置くと好いよ。」

「要らねえ。俺等は乞食ぢやねえ。」

小僧は銀貨を電車路に投附けて、サツサと行つてしまつた。袈裟次も拾はなかつた。又歩き出した。

(四)

雨は晴れて蒼空さへ見えて来た頃に、袈裟次は観音堂脇のベンチに凭れて、ボンヤリ人を眺めてゐた。

話に聞いてゐる観音堂だが、格別莊嚴とも廣大とも思はれなかつた。赤く塗つた本堂が遠くに目に映つただけであつた。敷石を踏鳴して出盛つて来る参詣人の足音を、何だか小煩く、夢の様に遠方に聞いてゐた。懐しい十二階の姿も、眺める間に興褪めて来た。無遠慮に突立つた冷たい煉瓦の色は、余りに露骨で、綿絵※で見るほど様々の事を思はせさうもなかつた。長い冬の間、茶の間の炬燵にウツトリ頬杖してその絵を眺めてゐると、世に寂しい母親の臨終の態なぞが妙に思ひ出されて、優しい涙に身を浸したものである。

袈裟次はそれにも軽い……※足に任せてたゞ前へ前へと歩いてゐた。……※
そんなものには目も留らなかつた。静かな池の汀のやうな処も通つたが、立停
ることが出来ない人のやうにたゞ歩いた。観音堂脇のこゝに休所を見附けた時
には、膝頭が棒のやうになつてゾクゾク悪寒さへしてゐた。

「何うするの。これから何うする。」

袈裟次は、ともすれば空虚になる自分の心を揺り起すやうに、時々思ひ出し
て呟いた。何うにかなるとは思つても、差当つて何うする、それは決めなけれ
ばならない事だつた。仮に大道にはやり唄を歌ふとしても、その手蔓（てづ
る）をこの広い東京の間から探さなければなるまい。その手蔓は何処から、何
うして探すと畳みかけて見ても、何の考へも来なかつた。矢張りトホンとして
人通りを眺めながら、「何うにかなるのよ。」と心の底で呟いてゐた。

そして、この石畳をゾロゾロ往来する人は皆知らぬ人だ。その一人も知る人
のない間から、立派に身を立てゝ生きて行くといふ事が、**自分を馬鹿にしてゐ**
る父親を見返してやる第一のやうな気がして、当面の問題は何うしてもハツキ
リと頭に来なかつた。

「誰だつて生きてるのに、私一人生きられない筈ないわ。」ツイ又口に出て来
る。

（五）～（六）※節番号は原本のまま

「姉さん、姉さん。」

若い男が何時の間にか傍に腰掛けてゐて、ニヤニヤ話し掛けた。袈裟次は凝とその男を見た。

「姉さんは田舎ですね。千葉ですか。それとも房州ですか。何の方角ですね。へっ、然うでせう。解りますたつて、一目見りや直ぐ判りますよ。東京へは今朝着いたんでせう。何うです。へっ。」

目が細くニヤニヤしてゐて、油でも塗めたやうに唇が始終濡れてゐるのもダラシなく見えた。

「この公園にはね、姉さんのやうな棕鳥（むくどり）のかゝるのを目張つて、網を張つてゐる奴があるんだから、油断しちや不可ませんぜ。へっ、本当に本当ですよ。」と、何が可笑しいのか又笑つて、耳に挟んであつた半分のバットを取つた。

「然う……有難う。」

「有難うぢやないぜ貴女。東京はそりやおツかない処だ。何しろ生馬の目を抜いたツて処だぜ。へっへ。」と、又笑つてゐる。

「ほら、新聞にも出てらアね。誘拐ツて奴よ。皆それぞれ親分があつてね、そんな奴が公園中に何人うろついてゐるか知れねえんだよ。」

「然うですかねえ。」

「然うですかねえ？」男は目をパチパチして、「そいつ等は皆、お前さんのやうなポツと出を釣りに出てるんだぜ。そりや旨い事を云つて宿屋へ連込んで、刺身は刺身、粗（あら）は粗と直ぐ料理ツちまふやうに、チヤンとお膳立が出来てるんだから叶はねえや。」

「話に聞いているわ。」

「識（し）つてるか。それ以上だよ、あゝ。」得意さうにバットを喫つた。粘る唾が紙パイプから煙草に流れて穢らしかつた。「これで矢張り銘々得手々々があつてね、男を釣る奴は男ばかりさ。何んでも公園をブラブラして、こいつ少し下顎の蝶番が弛んでるなど見ると、馴々しく話掛けて足尾の銅山とか夕張の炭鉱が発向して来たとか持掛けるんだがね、へゝへ、その呼吸なんて旨いもんですぜ。だから男でも女でも、この公園で迷子になつた者は二度と娑婆へ復つた例なしさ、へゝゝ。」

「そんな話ですね。」と、袈裟次は生欠伸を嚙緊めた。

「実はね。」男はキヨロキヨロ周囲を見廻して勿体らしく声を潜めた。「吃驚しちや不可ねえぜ。実は俺等もそれが稼業なんだ。これでも些とは売れた顔なんだぜ。へゝゝ。」油ツこい唇を垂下げて、男は又笑つた。

「お前さんが。」と、やつと思切つて煙草を棄てた時、二人の方を不審さうに見て若い巡査が通り過ぎた。

「ヘツ。」と、男は故とらしく頸を竦めた。「直ぐ目を注（つ）けやがる。あの通りだ。ヘゝゝ。俺等ア女ばかり手掛けてるから、これで随分罪は作つてるぜ、ヘゝゝ。」自慢さうに後を見送つて、「ねえ、見たものを皆から遣り切れねえ。だが、それも人にも依るだらうさ、何んぼ俺等だつて、中には初ツから、こいつア諦めやうと思ふ事もあるんだ。ヘゝゝ、然うだらう。こゝは何稼業だつて気合なもんでね。ねえ姉さん。」

男は馴々しく摩寄つてゐた。

袈裟次は突と立つて、噴水の方へ行つた。相手になるのも煩く、差迫つた自分も考へたかつた。立つ拍子にカクと膝が折れたが、気が附くと腓（こむら）は板のやうに張つて、足首にも濛（もう）と熱気を持つてゐた。汽車の中でもロクに休まる間がなく、昨日の昼からズウと歩き詰めだつたやうな疲労を、袈裟次は思はずにゐられなかつた。

何時の間にか、仁王門の高い棟を亘つて、秋らしい午前の日が足許の土にチラついてゐた。寝不足の目は眩しい日光に刺戟されて、ものを見詰めると涙が浮いて来た。

「何うするの。何うするのだよ。」

袈裟次はこの場になつても考への来ない自分を、果てはザリザリして責めるやうに足踏みして呟いた。……※「何うにかならぬ筈はない。」漫然考へてゐ

る自分が齒痒くて耐らなかつた。「何うすりや好いの。」本当に泣きたいやうだつた。

又、袈裟次は自分の家出を憾（うら）む父の目を心に描いて見た。悲しさうに自分を見詰める妹の顔も描いて見た。小児の時から仲の悪い淀爺の顔も、亦、なるべく添へないやうにしてゐた■原※の息子の絶望さうな目も——そして何うしても真剣になれない考へを纏めようとしたのである。

袈裟次はベンチに凭れたまゝ、何時かスヤスヤと眠つてゐた。

袈裟次は偶と、暖かい眠から目覚めた。

「富乃……富乃さん。」

何より第一に妹を呼ぼうとして、周囲に気が附いた。若い男は又傍へ腰掛けた。何処かで入れて来たと見えて、ブンと麴臭くなつてゐた。

「何んでえ。人が深切に心配してやるのに、誰怒る奴もねえもんだ。お前さんを商売にする気がありや、初ツから種明しするもんか。全く俺等アお前が可哀さうだから注意してやつたんだぜ。」

「有難う。」袈裟次は煩さうに云つた。

「何アんだ。馬鹿にしてやがる、ふん。」懷手してグッと反身になつた。七寸幅とか云ふ裕の内前から搔合せてクルリと膝株に卷附けた。ソツクリ芝居でするやうな形であつた。

「何処へでも行つて聞いて見な。山出しのお前一人位を手に余す俺ぢやねえんだ。余り可哀さうだから、今日は網の目を潜らせてやる氣になつたんだ。それに何んだ、何んて挨拶なんだ。」

袈裟次は相手にならなかつた。口を利くのも面倒臭かつた。たゞ口の中で、何うする、何うする、何うすると、両の掌を汗を搔くほどギツシリ握締めながら、差当る考へを纏めようとしてゐた。

「おい、何うしたよおい姉さん。」と、袂を引張つた。「何故黙つてるんでえ。何とか云つたら何うだ。」

「何さ。」袈裟次の眉はグツと皺んだ。

「何んでえ。」男も肩なぞ聳てた。

「何よ。」

「何？」

「考へ事してるんですからね。静かに願ひますよ。」

袈裟次はツケツケ句切つて云つて、厄介さうに横を向いた。当人が凄んで来るほど拙に芝居がかつて、こんな者が新聞なぞに朦朧とか云つて恐らしい者に出てるのかと可笑しくなつた。暇なら、お腹を空くしてからお出と、揶揄（からか）つて見たいやうな氣がした。

「馬鹿にしてやがる。ふん、馬鹿にしてやがる。何んでえ。」

男は触売（ふれうり）でもするやうに、同じ事をクドクド呟いてゐた。

袈裟次は立つた。当なく又歩き出さうとしたのである。考へと云つては何も来ない。何かものに衝突（つきあた）つたら、その時何うにかならうと諦めたのであつた。

若い男も慌てゝ立上つた。「姉さん、挨拶なしに立つのは酷えや。何処へ行くんだ。俺らを一人何うする気なんだ。」

「何うするつて、何か私に用があつたの。」

「用があつたのぢやねえ。お前さん一度入つた公園から無事に出られるのは、俺らのお蔭ぢやねえか。俺らが附いてるから仲間の奴等も、お前さんに手出しをしねえでゐるんだぜ。」

「ですから何んの用？」

「何の用ツてお前さん、ね、悪い奴に見込まれたんだ。そこは……物（もの）云つてらアね、お前さん。」と、ニタリ寄つて来た。

「お金なの。」

「ほんの屋根代だけで好いんだよ。ねえ姉さん。玉乗りの一つも見たつげと思つて、へゝゝ、頼むよ。」

「屋根代つて何なの。」

「あんな事を云つてゐるぜ。実は、他に云はれちや困るが……四五日あぶれが続いたもんだから、宿の上（かみ）さん顔附が悪くつて為やうねえんだ。」と、声なぞ潜めて、「俺ア一昨日ツからこの御堂で夜を明してゐるんだぜ。へっ、頼むよ、姉さん。」

袈裟次は黙つて銀貨を一枚、男の掌に置いた。

「然うか。へっ。ぢや済まねえが貰つとくよ。こつちはこれが商売なんだからね。お前さんの方が悪い奴に引掛つたんだよ。」

男はエヘラ笑ひして、肌寒さうに身を細めて観音堂の方へ行つた。

その後姿を見てゐるうちに、あんな者でも歸つて行く宿があるかと羨しかつた。袈裟次は何処でも好い、グツタリ手足を伸して静かに考へたかつた。

「些いと……些いと。」

汽車の中でサンドキツチを食べた限り、昨日の朝から全で何も入れなかつた。頭がクラクラとした。袈裟次は急に立ちかけて、

「何か用ですかい、姉さん。」

男は日向を眩しさうに立停つた。

「私もお前さんの宿へ連れてつてくれない。何処だつて好いわ。ねえ、連れてつて下さいよ。」

現代語版

銀貨

（※冒頭は第二章の続き）

「富乃、嘘か。嘘か、富乃。嘘なら嘘と、はっきり言って見ろ」

富乃は父の目を怖れるようにうつむいた。

「お前！」

勝衛が躍りかかろうとしたとき、杉戸を蹴り開けて淀爺が飛び込んだ。暴れ狂う勝衛を背後からしかと抱き留める。

「また始まったか旦那、何の真似だ」

「放せ、放せ。捻じ強い女郎だ。姉を出奔させたのはこいつの仕業だ。こいつらは何もかも、みな知っているのだ」と、身をもがいた。

淀爺はじりじり引き擦られながら、「姉様の家出はお嬢の知ったことでねえ。それがお前様の気違いだ」

「ううん放せ。俺が知ってる、知ってる。今日は十三日だ、築港の流れた日だ。こいつらはみな秘密を承知の上で、俺をこう苦しめるのだ。……あの顔を見ろ。あの顔。どこまで捻じ強い女郎だ……放せ、放さねえか」——富乃を睨む目は焰と燃えた。

「気違いめ！」

「何！」

「その秘密を喋るのはお前様だぞ。仏壇のあの写真は何んだ。」

勝衛はぎょっとして色を変えた。力任せに淀爺を振り放すと、這うようにして仏壇の傍へ行った。飾ってあった写真を懐へ入れた。ひどく古ぼけてはいるが、それは洋服姿の年配の男の写真だった。

「そのとおりの気違いだ」

淀爺は額の汗を擦りながら、しばらく勝衛を睨みつけていた。

—

「しかし、何の用意もなく東京へ出るとは、少し無謀のように思われますがね」

子爵はしなやかな指先で海軍刻みをパイプに詰めながら、物柔らかに話しかけた。

娘はぐったりと後頭を窓枠に凭せかけ、片手で無精そうに甘納豆の袋を引き寄せて、それをぽつぽつ口へ運んでいた。

「どうにかなるわ。心配するほどじゃないものよ」

「それはそうでしょうが……」

「そんなにご心配なの」袈裟次は子爵のほうを流し目に見て微笑み、「じゃあ貴方、私の生きる道を考えてくれたらいいじゃないの。一体どうしたら東京で、お金なしに暮していけるでしょう」

「そう……ですね。考えているところなんですよ」

子爵は蠟マッチを擦りかけて、憎らしいほど気後れしない娘の態度を、黙って眺めていた。

「私ね、港をひとつ作りたいんです。どうです、大望でしょう」

「港！」

「ほほほ。びっくりしたでしょう。私はこういうことを考えてる女なのよ。築港なのよ。一度廃れた港を再興したいんですの。あら、あの顔。ほほほほ」

娘は正面から艶やかな笑いを浴びせかけた。

「しかし、それにしてもその港というのは一体どこなんです。たしか一度築港したと言いましたね」

「野蒜です。」

娘はこらえかねるように鼻を掩った。

「野蒜。して、野蒜だったのですか」

子爵は思わず叫ばずにいられなかった。

野蒜は子爵家の旧領地である。今日、小牛田駅で下車したのは、長旅でも休まらないこの心の屈託を、久しぶりに旧領地の山河に浸してしばらくでも忘れようとしたのだった。急にまた東京行きのこの汽車へ乗る気になったのは、避け難い運命を恐れて逃げ惑う自分の因循さが恥ずかしくなって、吉くも凶くも来る日は急げ、いつまで卑怯に隠れていないで、明日はその首の座に直ろうと決心したのだ。

「じゃあ野蒜をご存知なの」

「いいえ……知りません」

子爵は額を赤らめながらも、長く洋行していて旧領の人々に顔を知られていないのを僥倖に思った。思い屈して旅の塵埃にまみれたこの姿を、できるなら知る人に見せたくはなかった。

「そうですか」

娘が不審そうに子爵のただならぬ顔色を見上げたとき、汽車はごとりと大きく揺れて、広大な停車場に着いていた。

「せんだアーい。塩釜線は乗り換えー！」

ホームの突端に突っ立って、朗々と停車場中に響き溢れる老駅夫の第一声で沈黙は破れ、雑然とした物音が夜の停車場を目覚めさせた。

汽車はこの停車場から急行になった。

——ここに一人の貴公子がいた。青年の若々しい心から、上の空に約束した女があった。棄てるともなくその女を忘れて、貴公子は英国に留学した。五年経った。この夏、帰朝した。女の姿はもとの家に見られなかった。行方を尋ねると、思いがけない場所に女を見つけた。真摯な紳士が口にするのさえ憚るような場所に、昔の恋人を見た。

女はまるで昔の女ではなかった。痩せて弱々しかった女は、胸のあたりが白い壁のように肥え、顎は二重にくくれて、大胆にたっぷり肥っていた。何ごとも泣くことが楽しみだったような少女が——何ごとも笑いを武器とする女になっていた。

貴公子は心から悔いた。謝った。罪を訴えた。女は笑って相手にしなかった。それでもころころ笑って取り合わなかった。女は貴公子の洋行中に、その子を産んでいたのである。

——その貴公子が子爵成瀬淳作なのだ。

子爵は目を閉じて考えた。英国風の厳粛な教育を受けた子爵は、罪惡に対する懼れも強かった。貴公子——子爵の心は初めて痛んだ。どんな犠牲を払っても、泥土のなかから女を救い出すよりほかに罪の贖いはなかった。家へ入れようとまで説いた。それでも女はただ笑うばかりだった。

汽車は二度ばかり大きな停車場に停まった。だが子爵は目を閉じるのさえ億劫だった。単調な車輪の響きをさまざまな言葉に聞き取りながら、同じ環をだるだると考えが回転しているのだった。

そこへ今度の**結婚問題**が起こった。相手はやはり同族の令嬢で、子爵には遠い従妹にあたっていた。あてもない旅のあいだに、断然決めなければならない断崖の上に自分を見出した子爵は、**女を取るか棄てるか**、因循な心を鞭打ってでもそれを決めようとしたのである。

子爵は福島あたりで目を覚ました。果てのない考えに疲れて、いつか眠ったらしい。それほど旅に憔悴した体を思うにつけ、まだ決断のつかない自分の因循さが齒痒くなった。明日は首の座だなどと、無理に自分を励ましてもみた。

車内はもう深夜の姿だった。乗客はみな凭れ合って、寝汚く眠っていた。

「ああ、もうどこ」

娘は生欠伸をしながら馴々しく子爵を見た。この無邪気な、手鞠唄でも夢に見ていそうな娘の寝顔が、子爵の心に妙にまた昔の恋人を思い出させた。

彼が初めてその女を知ったのは、まだ大学に通っていた頃だ。女は十八だった。貧しい家に生まれ、他人の店で帳簿をつけるような境涯だったが、まだ娘らしい初々しさを失っていなかった。どんな闇のなかにも厳しい母の目があるような気がして、あっお母さんに叱られる、などと叫びながら子爵の熱い唇を

受けた。それでも子爵の言葉は正直に信じた。私、恐いの恐いのと言いながら、だんだん大胆になった。

子爵は、昔の女が通っていった路を辿りながら、いまのこの娘の身の上を考えずにいられなかった。

黒磯、那須、矢板と夜は深けて、雨はざんざんと降り注いだ。

「駄目だ、見えやしない」

娘の失望した声に気がつくと、汽車はもう大宮近くを走って、夜は穏やかに明けはなれていた。娘は窓から半分乗り出すようにして、話に聞いている富士山をこの雨の空に探しているのだった。

広告、電柱、朝市に急ぐ野菜の荷車、煙突の煙——みな都会の近いことを思わせて窓を過ぎた。娘は都が近いというそのことが胸を躍らせるという風で、わくわく落ち着きを失っていた。

子爵は空気枕を押しながら娘を見た。「東京に来ましたよ」

「さあ、どうします」

「どうするって私？ それは着いてからのことよ。その上で考えるの」

「私は何だか、このままお別れするのはあまりに……何なら自活の道がつくまでも、私の家へでも来ていてはどうです」

「貴方のお宅？ 私、知らない人の世話になるのは厭ですね」

「しかし……東京はこんなに広いんだもの」

「大丈夫よ。私ひとりぐらい結構生きられるわ、どうかなるわ」

「そうですか、しかし……」

「心配するがものないのよ。ほほほほ。この土を食べたら後は何を食べようと心配してる蚯蚓（みみず）はね、いないんですって。判らない？ その意味は、貴方のような苦労性な人を言うたとえなのよ。大丈夫よ。ほほほほ」

娘は東京という言葉に逆上ったように急に浮き浮きして、子爵の親切など耳にも入らなかった。

汽車が上野に着くと、窓を探して六七人の迎えの人が子爵の前に走り集まった。そのなかに一人、鮮やかに着飾った美しい令嬢がいて、にっと笑いながら子爵のほうへ歩み寄った。子爵もそのほうへ仕方なしに行きかけたが、ポケットを探りながら、つと娘のほうへ戻ってきた。

「では」子爵は娘の手を握った。「お達者にお暮しなさい」

じっと娘の顔を見つめて言った。娘の手には何かが残された。

三

「東京！」

駐車場の向かい側、果物屋らしい軒下で雨を避けた袈裟次は、頭を垂れるような心で大きな町並みを食るように眺めた。

子どもの頃から憧れ夢に見てきた東京とはこれだ。これから自分が生きようとする東京とはこれだ。父の勝衛が村人に向かって、**物の力と人の力が渦を巻いて狂い、戦いのなかからすべてのものが生きていく**と話して聞かせていた東京というのは、これだ。その姿が今、夢でなく目の前に開けている——袈裟次は胸を波立てた。

——しかし、受け取った印象は、待ち望んでいたようなものではなかった。

町には昨夜の電燈がはっきりと点いていた。家並みはまだ深く戸を下ろし、朝靄がぼうっと廂に立ち迷っている。ときどき、空っぽの始発電車が轟然と音を立てて通り過ぎるほかには、三人五人ずつの労働者の群れが、雨のなかをびしょびしょと首を垂れて行く。**大根の切れ端が道路に腐れていて、泥の色も汚らしかった。**

袈裟次は何とはなしに失望を感じた。彼女の考えた東京は、もう少し華やかに、もう少し生き活きと輝く「都会」でなければならなかった。表通りを遠慮して横丁へ外れて行く朝の物売りの声も心寂しく、軒に朝を呼ぶ雀の勇ましさも聞かれなかった。湯屋らしい煙突から細々と雨に掠れ立つ煙を見るのも、侘しかった。

しかし、東京へ来た。これからどうする。どうして生きる。何よりもそれが当面の問題だった。

袈裟次は同じ軒下で雨をしのいでいる小僧のほうを見て、肌寒そうに袖を掻き合わせた。兵隊の古服を膝まで着て、真田紐をぐるぐる帯にした、聞かん気らしい小僧は、高慢ちに腕を組んでぼんやり空を見上げていた。寝起きの頬に、どこの敷居の痕かくっきり残っている。どうせ暖かな夜を送ったのではあるまい。

「浅草の公園はどっち？」

袈裟次は何とはなしに声をかけた。人の言葉が聞きたかった。

「あっちさ」

小僧は無愛想に顎で指して、じろじろと袈裟次を見た。

袈裟次は心のうちに、自分の知っている東京の地名を呼び出してみた。泉岳寺、浅草、大丸、築地の門跡、愛宕山、上野……それはたいてい、村から毎年の伊勢詣りの土産話に聞き覚えた名前だった。そのなかで馴染み深く思われるのは浅草の十二階だった。春らんまんの桜の梢に聳え立つ凌雲閣の絵は、スペンサーの風船乗りの錦絵と一緒に茶の間の壁の裾貼りになっていて、子どもの頃に亡くなった母の絵解きでよく聞いていた。それが袈裟次の知る東京の全部だった。

「姉ィ、何か落っこちたぜ」

小僧に注意されると、懷の藍手拭が溝板の上に落ちていた。拾おうと手を出して、初めて手のなかの**大きな銀貨が四五枚**に気がついた。慌ただしあいだに、あの紳士が置いていったのだ。

袈裟次はその銀貨を見て、恥ずかしさに顔が赤くなった。

「どうにかなる」——ようやく多くなった人通りを見た。あの男も生きてる、この女も生きている。これだけの人が東京に活きているのに、自分ひとり活きられないというはずはない。誰の恵みも受けるものか。自分は自分で生きて見せる、生きて見せる——袈裟次は口に出して叫びたいような興奮を覚えてきた。

袈裟次は上を見て、掌を開いた。銀貨はざらざらと溝板の上に落ちた。

小僧はそれを眺めていたが、袈裟次がぼんやりしているのを見て、一二枚泥から拾って手に渡した。

「どうかしてるぜ、お前」小僧はこざかしく見上げた。

「あげようか」

「馬鹿にするねえ」

どう勘違いしたのか、小僧はふっと頬を膨らませてそこを離れた。

袈裟次は恥ずかしそうにうつむいて、泥のなかから銀貨を拾った。そして教えられた浅草のほうへ、泥濘を歩き出した。

あちこちの工場から汽笛が一度に鳴って、町のどよめきが波打ってきた。都会は今日の営みに入るべく、そろそろ目覚めたのだ。

「姉ィ。もう一枚あったぜ」小僧は曲がり角まで追いかけてきた。

「お前さん、拾っておくといいよ」

「要らねえ。俺らは乞食じゃねえ。」

小僧は銀貨を電車路に投げつけて、さっさと行ってしまった。袈裟次も拾わなかった。また歩き出した。

四

雨が晴れて青空さえ見えてきた頃、袈裟次は観音堂脇のベンチに凭れて、ぼんやり人を眺めていた。

話に聞いていた観音堂だが、格別荘厳とも広大とも思われなかった。赤く塗った本堂が遠くに見えるだけだった。敷石を踏み鳴らして出盛ってくる参詣人の足音を、何だか小うるさく、夢のように遠くに聞いていた。懐かしい十二階の姿も、眺めるうちに興が褪めてきた。無遠慮に突っ立った冷たい煉瓦の色はあまりに露骨で、錦絵で見るほどさまざまなことを思わせそうもなかった。長い冬のあいだ、茶の間の炬燵にうっとり頬杖をついてあの絵を眺めていると、寂しかった母の臨終の様子などが妙に思い出されて、優しい涙に身を浸したものである。

袈裟次はそれにも軽い「感慨を覚えながら」、足に任せてただ前へ前へと歩いていて。静かな池の汀のような場所も通ったが、立ち止まることができない人のように、ただ歩いた。観音堂脇にこの休み場所を見つけたときには、膝頭が棒のようになって、ぞくぞくと寒気さえしていた。

「どうするの。これからどうする」

袈裟次は、ともすれば空虚になる自分の心を揺り起こすように、ときどき思い出して呟いた。どうにかなるとは思っても、差し当たってどうする、それは決めなければならないことだった。仮に大道で流行り唄を歌うとしても、その手蔓をこの広い東京から探さなければなるまい。その手蔓はどこから、どうして探すと畳みかけてみても、何の考えも来なかった。やはりぽかんとして人通りを眺めながら、「どうにかなるのよ」と心の底で呟いていた。

そして、この石畳をそろそろ往来する人はみな知らぬ人だ。その一人も知る人のないなかから、立派に身を立てて生きていくということが、自分を馬鹿にしている父を見返してやる第一歩のような気がして、当面の問題はどうしてもはっきりと頭に来なかった。

「誰だって生きてるのに、私ひとり生きられないはずないわ」つい、また口に出てくる。

五～六

「姉さん、姉さん」

若い男がいつの間にか傍に腰かけていて、にやにや話しかけた。袈裟次はじっとその男を見た。

「姉さんは田舎ですね。千葉ですか。それとも房州ですか。どっちの方角ですね。へへへ、そうでしょう。判りますったって、一目見りゃすぐ判りますよ。東京へは今朝着いたんでしょう。どうです。へへへ」

目が細くにやにやして、油でも塗ったように唇が始終濡れているのもだらしなく見えた。

「この公園にはね、姉さんのような棕鳥（むくどり）がかかるのを見張って、網を張ってる奴があるんだから、油断しちゃいけませんぜ。へへへへ、本当ですよ」——何が可笑しいのかまた笑って、耳に挟んであった半分のバットを取った。

「そう……有難う」

「有難うじゃないぜ貴女。東京はそりゃあ恐ろしい処だ。何しろ生馬の目を抜くってところだぜ。へへへ」また笑っている。

「ほら、新聞にも出てるね。誘拐って奴よ。みなそれぞれ親分があってね、そんな奴が公園中に何人うろついてるか知れねえんだよ」

「そうですかねえ」

「そうですかねえ？」男は目をぱちぱちさせて、「そいつらはみな、お前さんのようなぼっと出を釣りに出てるんだぜ。そりゃ旨いことを言って宿屋へ連れ込んで、刺身は刺身、粗（あら）は粗とすぐ料理っちまうように、ちゃんとお膳立てができてるんだから叶わねえや」

「話に聞いているわ」

「知ってるか。それ以上だよ、ああ」得意そうにバットを吸った。粘る唾が紙パイプから煙草に流れて汚らしい。「これでもやっぱり銘々得手不得手があつてね、男を釣る奴は男ばかりさ。何でも公園をぶらぶらして、こいつ少し下顎の蝶番が弛んでると見ると、馴々しく話しかけて足尾の銅山とか夕張の炭鉱が出稼ぎに来たとか持ちかけるんだがね、へへへ、その呼吸なんて旨いものですぜ。だから男でも女でも、この公園で迷子になった者は二度と娑婆へ戻った例なしさ、へへへ」

「そんな話ですね」袈裟次は生欠伸を噛み殺した。

「実はね」男はきょろきょろ周囲を見回して、もったいらしく声を潜めた。

「びっくりしちゃいけないぜ。実は俺らも、それが稼業なんだ。これでも少しは売れた顔なんだぜ。へへへ」油っこい唇を垂らして、男はまた笑った。

「お前さんが」——やっと思いついて煙草を棄てたとき、二人のほうを不審そうに見て、若い巡査が通り過ぎた。

「へっ」男はわざとらしく首を竦めた。「すぐ目をつけやがる。あのとおりだ。へへへ。俺らは女ばかり手掛けてるから、これですいぶん罪は作ってるぜ、へへへ」自慢そうに後ろを見送って、「ねえ、見たものをみな片っ端からじゃやり切れねえ。だが、それも人にもよるだろうさ。どれだけ俺らだって、なかには初めから、こいつは諦めようと思うこともあるんだ。へへへ、そうだろう。ここは何稼業だって気合なもんでね。ねえ姉さん」

男は馴々しくすり寄っていた。

袈裟次はつと立って、噴水のほうへ行った。相手になるのも煩わしく、差し迫った自分のことも考えたかった。立つ拍子にかくんと膝が折れたが、気がつくどふくらはぎは板のように張って、足首にも熱を持っていた。汽車のなかでもろくに休まる間がなく、昨日の昼からずっと歩き詰めだった疲労を、思わずにいられなかった。

いつの間にか、仁王門の高い棟を滑って、秋らしい午前の日が足もとの土にちらついていた。寝不足の目は眩しい日光に刺されて、物を見つめると涙が浮いてきた。

「どうするの。どうするのだよ」

袈裟次はこの場になっても考えの来ない自分を、果てはじりじりと責めるように足踏みして呟いた。「どうにかならないはずはない」——漫然と考えてい

る自分が齒痒くてたまらなかった。「どうすればいいの」本当に泣きたいようだった。

また袈裟次は、自分の家出を恨む父の目を心に描いてみた。悲しそうに自分を見つめる妹の顔も描いてみた。子どもの頃から仲の悪い淀爺の顔も、そして——なるべく思い出さないようにしていた清原の息子の絶望したような目も。そうして、どうしても真剣になれない考えを纏めようとしたのである。

袈裟次はベンチに凭れたまま、いつかすやすやと眠っていた。

袈裟次はふと、暖かい眠りから目覚めた。

「富乃……富乃さん」

何より第一に妹を呼ぼうとして、周囲に気がついた。若い男がまた傍に腰かけている。どこかで飲んできたらしく、ぶんと麴の匂いがした。

「何だい。人が親切に心配してやるのに、誰も怒る奴はいねえもんだ。お前さんを商売にする気があるなら、初めから種明かしするもんか。まったく俺らはお前が可哀そうだから注意してやったんだぜ」

「有難う」袈裟次は煩わしそうに言った。

「何だ。馬鹿にしてやがる、ふん」懐手をしてぐっと反り身になった。袴の内前から掻き合わせて、くるりと膝に巻きつける。そっくり芝居するような格好だった。

「どこへでも行って聞いてみな。山出しのお前ひとりぐらい手に余す俺じゃねえんだ。あんまり可哀そうだから、今日は網の目をくぐらせてやる気になったんだ。それに何だ、何て挨拶なんだ」

袈裟次は相手にならなかった。口をきくのも面倒だった。ただ口のなかで、どうする、どうする、どうすると、両の掌が汗をかくほどぎっしり握りしめながら、差し当たる考えを纏めようとしていた。

「おい、どうしたよ、おい姉さん」袂を引っ張った。「なぜ黙ってるんでえ。何とか言ったらどうだ」

「何さ」袈裟次の眉がぐっと寄った。

「何だ」男も肩を聳やかした。

「何よ」

「何？」

「考え事してるんですからね。静かに願いますよ。」

袈裟次はつけつけと句切って言い、厄介そうに横を向いた。当人が凄んでくるほど拙く芝居がかって、こんな者が新聞などで朦朧とか言って恐ろしい者に出ているのかと可笑しくなった。暇なら、お腹を空かしてからおいでと揶揄してみたいような気がした。

「馬鹿にしてやがる。ふん、馬鹿にしてやがる。何だ」

男は触れ売りでもするように、同じことをくどくど呟いていた。

袈裟次は立った。あてもなくまた歩き出そうとしたのである。考えといっ
ては何も来ない。何かにぶつかったら、そのときどうにかなろうと諦めたのだっ
た。

若い男も慌てて立ち上がった。「姉さん、挨拶なしに立つのは酷いや。どこ
へ行くんだ。俺ひとりをどうする気なんだ」

「どうするって、何か私に用があったの」

「用があったんじゃない。お前さんが一度入った公園から無事に出られるの
は、俺らのお蔭じゃねえか。俺らがついてるから仲間の奴らも、お前さんに手
出しをしねえでいるんだぜ」

「ですから何の用？」

「何の用ってお前さん、ね、悪い奴に見込まれたんだ。そこは……ものを言っ
てるね、お前さん」——にたりと寄ってきた。

「お金なの」

「ほんの屋根代だけでいいんだよ。ねえ姉さん。玉乗りのひとつも見たっけと
思っ、へへへ、頼むよ」

「屋根代って何なの」

「あんなことを言ってるぜ。実は、他に言われちゃ困るが……四五日あぶれが
続いたもんだから、宿のおかみさんの顔つきが悪くて仕方ねえんだ」と声を潜
めて、「俺は一昨日からこのお堂で夜を明かしてるんだぜ。へへへ、頼むよ、
姉さん」

袈裟次は黙って銀貨を一枚、男の掌に置いた。

「そうか。へへへ。じゃあ済まねえが貰っとくよ。こっちはこれが商売なんだ
からね。お前さんのほうが悪い奴に引っかかったんだよ」

男はへらへら笑って、肌寒そうに身を細めて観音堂のほうへ行った。

その後ろ姿を見ているうちに、あんな者でも帰っていく宿があるのかと羨ま
しかった。袈裟次はどこでもいい、ぐったり手足を伸ばして静かに考えたかっ
た。

「少し……少し」

汽車のなかでサンドウィッチを食べたきり、昨日の朝から何も口に入れてい
なかった。頭がくらくらとした。袈裟次は急に立ちかけた。

「何か用ですかい、姉さん」

男は日向を眩しそうに立ち止まった。

「私もお前さんの宿へ連れてって欲れない。どこだっていいわ。ねえ、連れ
てってくださいよ。」

(第三章 了)

作業メモ

・底本コマ対応：冒頭（第二章の続き）＝コマ 23 前半／（一）＝コマ 23 後半～24／
（二）＝コマ 24～26／（三）＝コマ 26～28／（四）＝コマ 28～29／（五）～（六）
＝コマ 29～32

・※子爵の名の表記ゆれ：第一章・第六章は「淳作」（第六章に2箇所＝「成瀬淳作、子爵よ」「周子は淳作より二つの年上」）。本章コマ 25 は「淳三」と読める（400dpi で確認済み）。多数決と第六章の明示から「淳作」を採用。コマ 25 は原本の誤植か、さらに要確認

・☒解決＝「■原」は「清原」（全文検索で確定。作中に6箇所）。その息子＝清原誠也（きよはら・せいや）＝袈裟次をめぐる青年で、後半の主要人物（作中に多数登場）。ほかに「濱路」という女性名、「濱市の清原」という表記もあり＝清原家は濱市の家

・※の主な箇所：「嬋如な笑ひ」／「涙の囊」前後（OCR 崩れ）／「借（さあ）何うします」／「小首ふやうな心」／「雨を露いでる小僧」／「綿絵で見るほど」／（四）の二箇所の脱落／章末近く「■原※の息子」＝第二章末の「■原の倅」と同一の人名。次章以降の鍵。要確認

・地名の実在対応：小牛田／仙台（塩釜線乗換）／福島／黒磯／那須／矢板／大宮／上野／浅草・観音堂・仁王門・十二階（凌雲閣）／泉岳寺・大丸・築地門跡・愛宕山

・「スペンサアの風船乗り」＝明治期に来日した英国人スペンサーの気球飛行（錦絵の題材として実在）

第四章「朝」

解題

★1. 「袈裟次は私の娘ではなかった」

章末、勝衛が誠也と富乃に言う。

「袈裟次は私の娘ではなかったと、それも判る時が来るだらうと思ふのだ。私の娘は、この富乃一人だ。」

第二章の淀爺の「雀の子は雀だ。旦那が何んぼ丹精しても飼鳥にはならねえ」

「この譬の解けるのは、俺と旦那様と二人より無えだ」、第三章冒頭の仏壇の古ぼけた「洋服姿の年配の男の写真」——伏線がここで繋がる。双生児の、姉妹の、片方だけが実子でないという謎が、この小説の芯。

★2. 袈裟次の置手紙の全文（＝作品の主題そのもの）

- ・「土を換へると私が云ふのは、野蒜の土を死ぬまで見棄てると云ふ事ぢやない。誰よりお前さんよりお父さんより、私は野蒜の土を愛するのだよ」
- ・「私は死ぬまでたゞの袈裟次でゐなければならない、そんな事が出来るものか。狂ひ咲でもかまはない、変り種でもかまはない、私は持つて生れて来たゞけの自分を、この世に咲かせて見たい」
- ・「私の結ぶ実と云ふのは築港だ。私はきつと港を作つて見せる。私と云ふ者は何う考へても、この港をつくるために生れて来た者だと思ふ」

- ・「築港は私が小児の時から目的で、生命なのだよ」
- ・「私だ、やつぱり私だ。私より外にこの大きな焰を燃し立てる人はないのだ」

←★題名「焰の舞」の直接の出どころ

★3. 清原誠也の正体——割腹した主唱者の息子

・誠也の父は、築港が流れた朝に麴室で割腹した主唱者。この章の朝が、その二十一年目の朝でもある（「今朝が丁度、うちの親父が腹を切つてゐた朝なんです」）。

・父は学者だった。その学説＝武内宿禰の探險、日本武尊の東征、日高見国、そして「昔の桃生の郡・野蒜の港は当時の大港で、奥州六ヶ国の文明はこの野蒜を玄関にして輸入された」。誠也はそれを「高天原ですよ、神代の民ですよ、狂者ですよ」と嘲笑する。

・★誠也の台詞：「全く親父は狂者ですよ。この頃親父の書いたものを読めば読むほど、僕は然う思つてね、僕にもその血が伝つてゐるだらうと怖くなりましたよ」

・誠也は袈裟次を思っているが「僕は抑へましたよ。自分で抑へて狂者にならずに済みました」。いまは牛乳を搾って三里先の郡立病院へ配達している（勝衛の口添えて得た仕事）。

・袈裟次の置手紙は、その誠也への痛烈な拒絶だった。「あれは屹とその子ぢやない。私は嫌ひだ、嫌ひだよ」。そして「この手紙を第一にあの人に読ませたくて書いた」。富乃は、それを誠也に見せない。

★4. 鳴神の哄笑

勝衛が「袈裟次は棄てた、死んでも探しに行かない」と言い張るのを、狂人・鳴神が笑う。「行くよお前は……駄目だ。」

5. 大沼姓の人物は、この章にも登場しない。

☒ 本編『動く血』との響き（※演出と事実は分けて扱う）

誠也の「僕にもその血が伝つてゐるだらうと怖くなりました」は、血の継承を主題とする本編と正面から響き合う。ただしこれは偶然の符合であり、演出に使う場合はそう明記する（feedback_no_embellishment）。

翻刻（原文どおり）

朝

（一）

広い台所には朝の日が冷々と流れ込んで、渡鳥の明るい囀りが裏の雑木林の方から聞えて来た。囲爐裏の大葉鑪は威勢よく滾（こぼ）り溢れて、乾きの好い櫛櫛（くぬぎほた）はドンドと燃え立つてゐた。

冷たい井戸水で昨夜の夢を綺麗に洗ひ落した富乃は、朝の爽かな空気を肺臓一杯に吸込みたいやうな心持で、台所の方へ戻つて来た。壁に懸列ねた農具や馬具、棚にギツシリ積み重ねた鍋釜、光るものは光り、拭くものは拭き、母親が生きてゐた時とそつくり其儘な台所を、富乃は満足さうに見廻はした。「七年間諸事儉約」と、築港が流れた年の年号で貼出した大黒柱も、母親の時と同じやうに煤光に拭込まれてゐる。

何日からともなしに母親の仕〔事〕を引継ぐやうになつた富乃は、母親の当例をその儘にそつくり持伝へると云ふその一事だけでも、口に云はれぬ幸福を感じてゐた。姉は煩がつて台所なぞを見る人ではない。父親も自分の帳場を居間に置いて、差押への公正証書のと難しい書附ばかり扱つて、所帯の事なぞ一切構ひ附けなかつたので、富乃は自然十三四の頃から小作帳や野帳の果まで細い心を配つて、一家を繰廻して行かなければならなかつた。夫（それ）が又彼女の幸福でもあつた。喜悅でもあつた。

「然う然う、忘れてゐた。」

富乃は帳場格子の中へ入つて、銅金具の用筆筒の抽斗を明けた。地租、宅地、営業税は後半期分、田税は第二期分、その納月になつてゐた。そんな期限のある日を一日でも遅れると云ふのは、富乃にとつて何より心配な事であつた。

その割符の間から一通の書附が落ちた。姉の書いた手らしいので取上げて見ると、それは自分へ宛てた**置手紙**であつた。

初めの方六七行は真黒に塗消してあるので、手紙は中途からの文句だつた。

『……ねえ、富乃さん、然うは思はないの。同じ土に同じ種をまいても、白い花と紫の花とが同時に咲く事はあるけれども、私は何んだかこの頃、そんな恐ろしい事が考へられて為やうがないのだよ。止さうよ。そんな事は考へたくない。私は今心がいそがしい。』

これ迄が塗消した文句の続きなのである。

『私は今自分を花に譬へて書いたから、その積りで書きますよ。兎に角、**私と云ふ花は野蒜の土にそだつ花ではないと思ふのですよ。土が悪い、いけない土だ。**お父さんと云ふ一本核を枯らしたのも野蒜の土です。死んだお母さんや富乃さん、お前さんなどには極く適当した土でせうけれど、私と云ふ花はどうしてもこの土には咲きさうがないのだよ。いけない土だ。で、私は、いつからかこの野蒜の土をはなれて、何処か違つた別の土に思ふさま自分を咲かせたいと

思つたのよ。私は考へた、考へた。これで随分長い間考へたよ。お前さん気が附いたか何うか知らないけれど、夜も碌に寝ないで考へたんだよ。どう考へてもやつぱり土がいけないのだ。私はきつとお前さんと同じ種でも、変り咲の花か、狂ひ咲の花なのだよ。為方がないのさ。』

日附を見ると五月何日とある。姉袈裟次の家出は昨日今日の考へではなかつた。姉としては考へるだけ考へての上だつたのだ。

『それにさ、その土の合はない土地に、段々私を引留めようとするものが出来かゝつて来るのだよ。私はそれが恐ろしくて為やうがないのだよ。いけない土だと思ひながらも、どうかすると私は根を下しさうになつて困るのだよ。本当に私、それが恐ろしくつて為やうないんだ。富乃さん、わかるかい、わかるだらう、ねえ、わかんないかね。わかるだらう。本当に困つちやつたのよ。』

富乃はハツとして読み直した。「屹と清原さんのことだ。」と思つたのである。急しく周囲を見廻したのは、自分の思つた事を誰かに見詰めてゐられるやうな気がしたのである。何うしても顔が熱るのだ。

「お嬢様、お飯にしたら何うだね。」台所の方から作男が呼つてゐた。

(二)

『富乃さん。土を換へると私が云ふのは、私は野蒜の土を死ぬまで見棄てると云ふ事ぢやないのだよ。野蒜の土を愛する。誰よりお前さんよりお父さんより、私は野蒜の土を愛するのだよ。何れほど私が野蒜の土を愛したかと云ふ事

は、今にお前さん達にもわかる時が来るよ。屹と来るとも。それは見てお在でよ。けれども、野蒜の土は私と云ふ花を咲かせてくれさうな土ぢやないんだよ。私は死ぬまでたゞの袈裟次でゐなければならない、そんな事が出来るものか。狂ひ咲でもかまはない、変り種でもかまはない、私は持つて生れて来たゞけの自分を、この世に咲かせて見たいのだよ、それにはこの土がいけないのだ、私はこれから本当に自分を咲かせてくれる土を探しに出かけるのだ。十分に自分を咲かせた後に、その実は何処で結ぶと云つたら、私はこの好きな好きな最も愛する野蒜の土より外にないのだ……※。わかつたかね富乃さん。お前さん達は、私が野蒜の土を小児の時から憎んでゐたやうに思ふけれど、それは大変な間違いなのだよ。私と云ふもののほどこの土地を愛する者はないと思つてゐる。それは今云ふことでは無いかも知れない。見て、下さい。見てゐて貰ひたい。お父さんでもお前さんでも、村の人でも今にきつとそれを知る時が来る。来ますとも、来る。私の結ぶ実と云ふのは築港だ。私はきつと港を作つて見せる。私と云ふ者は何う考へても、この港をつくるために生れて来た者だと思ふ。その訳は書けないけれど、築港は私が小児の時から目的で、生命なのだよ。私はその実を結びたいために、美しい大きな花を咲かせたいのだ。』

富乃はホツとして手紙を膝に落した。

然し、同胞（はらから）だもの、姉のこの考へを知らない筈はない。何十万と云ふ金を抛（なげう）ち、一村拳つて路頭に迷ふやうな犠牲を払つても失敗した築港である。姉はそれを何うして成功させると云ふのだらう。

姉のこの狂者染みた空想は、これ迄何のくらゐ父の心を悩まし一家の紛擾を来したか知れないのに、あゝ、姉はまだそれを諦めてはくれないのだ。

姉は確信を以つてまだ長々と書いてゐる。それに拠つて見ると、此前の築港失敗は技師一人の罪で、設計さへ完全だつたら必ず成功したのに相違ないと信じてゐるらしい。その失敗の原因も究めないで、腹を切る者も馬鹿なら気が違ふ奴も馬鹿だ。第一撃に昏倒してしまつて、世間を棄てる氣になつた父勝衛なぞは腑甲斐なしの随一だ。鳥は**第一の鼓翼（こよう）**で地を切らなくとも、**第二第三の鼓翼で飛べば恥にはならない**。大事な心棒になる三人が三人ともこの態だから、築港の出来なかつたも無理はない。

そこに心附いて、第二第三の後継者が村から出るだらうと、私は小児の時から何れほど待つたか知れない。父が急に強慾の人になつて金を積むのを見て、生涯に一度はその金をもつて初の失敗を償ふ氣ではないかと思つたこともある。父の無惨の死態に※あれ程刺戟されてゐる**清原の息子**だ。この人が屹と第二の鼓翼を試みるに相違ないと望を繫けたこともある。村人の誰彼を順々に見〔渡〕した果は、あの鳴神の躍り歩くのさへ実は世間を欺く佯狂者（ようきようしや）で、本心は今も築港の成功を目論んでるのでないかと、馬鹿々々しい希望を持つたこともある。

『駄目です。皆駄目です。築港は村人から昔の夢と消えてしまつた。村人の心は火が消えた跡の灰より冷たく冷却つてしまつた。やつぱり私だ、私だ。私よ

り外にこの大きな焰を燃し立てる人はないのだ。私はどうしても大きな花に咲かなければならない人だ。私だ、私だ。』

姉の手紙は勇ましく書続けてあつた。富乃はその文字の間に躍り立つ姉の亢奮した心持を悲しさうに眺めてゐた。

『それから次には清原の誠也さんです。手が懶（ものう）くなつたから簡単に書きますよ。私は誠也さんに云つて置きたい。どうしても私は誠也さんに、心の底から忘れて頂かなければなりません。』

富乃の目はチラと火花が閃いた。

（三）

『誠也さんと私は、見てゐる見当がまるで違ふ。先にはそれ程とも思はなかつたが、この頃はそれが段々ひどくなる。溝が出来たとか云ふんだろ。誠也さんのお父様は学者で、偉い人で、野蒜の土を愛して腹まで切つた人だと云ふが、それを自慢にしてゐる誠也さんは何うだ、生れた村などより自分の身ばかり悲しんでゐる人だ、私の一等嫌ひな人なのだよ。小児の時から三人あんなに睦じくして来た人だから、私はあの蒼白い意気地のない姿を見ると、馬の脊でも抛り附けてやりたくなる。大嫌ひ、大嫌ひな人だ。私にはどうしても解らない。何が面白くて生きてる人なんだい。牛の肥料にまびれてさ、村中の者に頭を下げてさ、オドオド人の顔色を見てさ、郵便局の通帳ばかり大事にしてさ。本当

に詰んない人があつたもんだと思ふよ。もしあの人のお父様が偉い学者だつたのなら、あれは屹とその子ぢやない。私は嫌ひだ、嫌ひだよ。

私はさつき、このいけない野蒜の土に根を下しさうになつて、自分ながら恐ろしいと書いたね。その根を下させようとする人はこの人とお父さんなのだよ。お父さんは兎に角として、この人が不可ないのだよ。私はそれで余計家出を急ぐんだよ。解つたかい、富乃さん。解んなくても為方がない。もう書くのが厭になつた。

富乃さん、お前さんこの手紙を誠也さんに見せてくれないだらうね。お前さんは然う云ふ遠慮深い人だが、それは困るよ。私はこの手紙を第一にあの人に読ませたくて書いたのだよ。あの人に読まれぬ中は私の苦勞はとれないのだよ。私が家を出て、もうものゝ三里も行つたと思ふ時分に、急いであの人に読まして下さい。頼みました。』

何か三四行書掛けてあつたが、手紙はこれで断れた。墨を黒々と消して、日に透しても読めなかつた。

富乃はたゞ憎（にく）として※、文字の間から姉の真実の心持を汲取ることは出来なかつた。姉さんらしい手紙だと思ふ外はなかつた。話をしても頭の中まで突込んで来て、対者の心の抽斗をグングン搔廻さなければ措かないやうな息苦しさが先になつて、始終揺れ動いてる姉の心には跟（つ）けさうもなかつ

た。字に書いてある背後に何かあるやうに思はれて、清原に対する姉の心持なぞを用心深く考へても見た。

穏かな朝は穏かな小春日を呼んでゐた。厩の方に馬塞（うませ）に擦り附けては振り張切つた馬の鬣（たてがみ）の音を聞くと、この佳き日を好く送るべく一日の活営が思はれた。光つた鍬に一日でも錆をつけず、野に行く者は野に、海へ行く者は海へ、駄賃懸けしても馬にも人にも手を空けないのが、富乃の気配りであつた。

富乃はもう払除けるやうに手紙のことなぞ忘れて、雑倉の大番鍵を腰につけながら、急しく帳場を立つた。

穀打場に乾した蕈（きのこ）は程好く日を吸つてゐた。漬込むには丁度日和も良かった。富乃はソソクサ朝飯をすますと、キリリと襷をかけて土間に下りた。

「さあ女子衆（をなごしゅう）。今日は蕈を片附けてしまひますよ。」と家中に呼んで、富乃はカツとする日向に出た。

大半桶には冷たい井戸の水が満々と張られて、クルクルと日に戯れた。土地で赤初（あかはつ）白初なぞ云ふ雞茸（しめじ）は女どもの手に薙ごと搬ばれて、爽快な秋茸の香がプンとその辺に漂うた。この秋の結実を漬込んで、塩の味も狂はせずに年を越して来年の彼岸頃まで、朝々の汁の実に事を欠かないのが、富乃の母の自慢のやうにされてゐた。

「おきし、お前松脂を篩（ふる）つてな、それから坂下の小母さんに目張の澁を引いて貰ふんだよ。好いかい。」

富乃は半桶の前に蹲んで、二の腕まで捲り上げた白い肱をツブと水に浸けた。トロトロと午前の日に戯れてゐた透明な秋の水は、……※クルクルと日を渦〔巻〕く。水を透して見る掌は、自分ながら白く美しかった。富乃は胎毛のやうな薄毛に生（な）つた細かな気孔を一遍綺麗に靡き落してから、又楽しさうに肱を水に浸けて見た。

（四）

「同じ土に同じ種をまいても、白い花と紫の花とが同時に咲く事はあるけれど……私はこの頃そんな恐い事が考へられて為やうがない……。」

富乃はハツとした。とある姉が塗消した文句が偶と心に浮んで、直ぐ後からまだ恐い考へが来さうで、深い井戸水を覗いて見た。片手を釣瓶竿にもたせて、釣瓶の滴りは時々ボトリと落ちて、星も映りさうな昼静かな蒼空を漬した井戸の水面に波紋を描いた。その環が顫へながら凝つて来ると、それが遠く小さく富乃の顔になつた。

小児の時から必ず重り合つて映つた顔の、その一つが見られないのが、富乃を急に寂しく思はせて、涙の溜つた目に凝つと見詰めてみた。

寂しさうな顔が二つになつた。

何時の間にか、**誠也**が来て井戸側に凭れてゐたのである。蒼空を背にして小さな顔と顔とは井戸底に目を見合つてゐた。

「聞いたでせう。」 稍（やや）あつて富乃は云つた。

「して、聞きました……昨日。」 誠也の暗い顔が答へた。

「何うせ、然うなる人だつたわ。」

「然うかも知れませんね。」

「東京よ。」

「然うでせうと思つた。」

白い雲が悠然と水に映つて過ぎた。眩しい秋日の反射は、それが正午に近いことを思はせた。二人は互に目を避けながら同じ水に影を映してゐた。

「昨夜、お父さんがそりや大変でしたの。困りましたよ。」

「然うでせう。」

「昨日が丁度、港の流れた日なんですつてね。」

「然うです。今朝が丁度、うちの親父が腹を切つてゐた朝なんです。」

「まあ、本当に……然うでしたね。」

「然うです。今朝なんです。」 誠也はホツと溜息を吐いた。

誠也は配達の帰途だつた。胸に子持筋を通したオリイブのジャケツを着て、腰に幾枚かの門鑑を下げてゐた。富乃の父の口添で、誠也はこの夏から、三里はなれた郡立病院へも牛乳を入れることになつてゐた。

誠也は両の掌一杯になつた葦に鼻をあてゝ、爽かに秋らしい香を嗅いだり匆（もんめ）を引くやうな手附をしながら、嘲るやうな調子を平気に話してゐた。築港の話が姉の事に落ちはしないかと恐れてゐた富乃は、案外に平静な対者の態度に心が軽くなつた。誰のためにも些時（ちよつと）でも悪るい時間は送りたくない、富乃は優しく考へながら母屋の方から竹箒を取つて来た。その足音を聞附けて、枸杞垣（くこがき）をあさつてゐた雛子どもは、軟い咽頭を鳴して一斉に富乃を追うて来た。

（五）

「全く親父は狂者ですよ。この頃親父の書いたものを読めば読むほど、僕は然う思つてね、僕にもその血が伝つてゐるだらうと怖くなりましたよ。」

誠也は手の屑葦を雛子に一つ一つ投げながら云つた。

「ほう、狂者の多い村だこと。」と、富乃は笑ひながら掃き初めた。丁度姉がこの人に書残した手紙を思出してゐたのだ。

雛子どもは口に余る葦を奪ひ合つて、明るい井戸端を那方此方（あちこち）遁げ廻つてゐた。

「こちらの小父さんや鳴神は別として、高天原の僕の親父が何故築港なぞの俗な事業に夢中になったか、僕はこれ迄何うしても解せなかつたんです。で、何かそんな事を書残したものは無いかと探して見ると、有る有る、大変なんです。親父の説によると、大昔武内宿禰が探険して、日本武尊が東征の第一着に船をすゝめた日高見国と云ふのは、この北上河一帯の沿岸で、その中でも昔の桃生の郡・野蒜の港は当時の大港であつたと云ふ学説なんです。詰り奥州六ヶ国の文明は、この野蒜を玄関にして輸入されたと云つても好い大事な港だ。それを斯く衰微させては、今を古（いにしえ）、能褒野（のぼの）の露と消え給うた日本武尊の尊霊をも……※、はゝはゝゝ。何うです高天原でせう、親父には鉄道も電信もなかつたんですね。明治の今日を又直ちに人皇十二代景行天皇の御宇に後戻り出来ると思つたんですね。高天原ですよ、何うしても神代の民ですよ、狂者ですよ。はゝはゝゝ。」

「あッ、危ない。」

富乃はヒヤリとして胸を抱いた。前に廻つて餌を争つてゐる雛子を危なく踏むところであつた。

「御覧、もう少しで踏潰される所だつたぢやないの。」

「全く狂者ですよ。親父の築港騒ぎも僕の三四年前も、揃つて狂者ですよ。両方とも夢に魘（おそ）はれてゐたんです。」

誠也は空を見詰めて笑つてゐた。何んだか潤びた声だつた。

「もう止（や）ませうよ。誠也さん。」

富乃は頼むやうに云つた。今に屹と痛いところへ触られさうな気がしたのである。

「僕は抑へましたよ。自分で抑へて狂者にならずに済みました。然しあの
人……あの人には自分を抑へる力がない。火を見た馬と同じことで、何処まで
駆出すか判らない。なんですよ。」

「えゝそれで……心配してるんです。」

「然うでせう、ねえ然うでせう、貴女も心配でせう。姉さんの……姉さんの一生を心配するでせう。」と凝つと対者を見詰めた誠也の手はワナワナと「顫へてゐた」。

「えゝ。」富乃は俯向いて唾を嚥んだ。

「心配する奴が馬鹿、姉さんの方ぢや笑つてるでせうが……矢張り、小児の時の友達、心配せずにゐられませんからね。」

誠也の熱した目からメクメクと涙が頬に流れてゐた。富乃は握られた手を窃（そつ）と放して見た。案外静かに離れた。

「それに就いて、姉さんから私に何にか、慥（たしか）に有る筈です。置手紙があるでせう。それを見せてくれませんか。」

暫らくして誠也は外を見たまゝ云つた。

「手紙……ですか。」

「姉さんは常に冗談のやうに、置手紙は貴女の手に残けてあると云つてゐました。慥に有ると思ひますが。」

富乃はコクと咽を鳴らして、「有るには有りますの。」と、心静かに云つた。「あれは最う少し、私お預かりして置ませう。」云つて終つてからヒヤリとした。

「何うしてゝす。」

「今御覧なさる手紙ぢやありませんもの。」

「何うして。」

「徒（ただ）……然う思ひます。」

「徒？」

「えゝ……徒。」

富乃は心を決めて顔を上げると、焼附けるやうに見据ゑてゐた誠也の目は慌てゝ外の方へ遁げた。富乃の性質には、守るべき道は飽（あく）迄守り通すと云ふ柔強（やわづよ）さが、小児の時からあつたのだ。

「然し、僕に宛てた手紙でせう。」

「君に宛てた手紙だから、見ない方が好いのだ。」

と、誠也の肩を叩いた者がある。父勝衛が老人らしく日向に立つてゐた。

「小父さん、僕その手紙を見て何故不可ないんです。」誠也は進み出た。

「何故不可ない？」勝衛はジロリと若者を見た。直ぐ思ひ返して、「何故と云つて、そこに富乃が不可ないと云つてゐるではないか。なア富乃。」と、笑つてゐる。

「然し……」

「誠也さん、もう措かうか。富乃が不可ないと云へば、不可ないに置きませうよ。家中で正当な考へを持つてゐるのはこの人一人だ。この人は一家の柱だ。この人の考へに任せてゐれば物事に間違はない。私は昨夜一晚考へましたよ。」と、勝衛は後腰に両手を組んで、ポクポク日向を歩き廻つた。

「然し小父さん。」

「もう止さう、止さうな誠也さん。一頭の馬が狂つたとて、他の千頭まで狂つてはゐられないのだ。為方がないのだ。」

「然うですかね……。ぢや手紙は見ますまい。富乃さんが見せるまで預けて置きます。」誠也はダラリと両手を垂れた。

「然うだ、それが好い。相互に気を昂らすだけ寿命の毒だ。これからは私も、気を楽に持つて生きる考へになりますよ。誠也さん、これから夜長になつたら、又ボツボツ謡曲でも初めやうかの。」と、勝衛は年寄らしく脊中を円めてそこへ蹲んで、井筒から挟出してゐる虎耳（ゆきのした）らしい草の古葉を摘つては捨てゝゐた。

誠也は又箒の前に立つた。

「ぢや小父さん、貴方は袈裟次さんをこのまゝ打遣（うちや）る気なんですか。」

「何を云つて、私の方があれに打遣られたのだよ。はゝゝ、なあ富乃。」

「ぢや、東京へ行くと云ふのは嘘だつたんですか。」

「私が東京へ？ 何んの為めにな。」

「無論袈裟次さんを引戻しにですよ。嘘なんですか、小父さん。」

「待てよ、昨日の今日だ、私はまだ何も考へてはゐないが、一体誰がそんな事をお前さんに云つたの。」

「**鳴神**が今朝態々知らしてくれましたよ。牛乳を搾つてゐるまだ暗い中でした。」

「那奴、そんな事を云つて行つた！」

「小父さん、ぢや何うするんです袈裟次さんは。」

「那奴め……那奴め……。」

勝衛は竹箒の柄に顎を乗せて、一所を睨みながら唸るやうな声で云つた。関節炎の膝がガクガクと〔顫へた〕。

(六)

「お父さん、何うしたんですお父さん。」

富乃は父が煩さく目を瞬き出したのを心配さうに、傍へ寄つて来た。

「なア富乃、俺は狂者に負けてはゐられないぞ。」と、グツと頸を反して屹とした。「好し、鳴神が然う云ふなら、私は意地にも袈裟次の行方は探さない。」と、物に衝突るやうな目附だつた。「死なうと生きやうと私は構はん、袈裟次の事を忘れて終ふ。もう二度と口にも出しはしない。」

「小父さん、それぢや袈裟次さんが何うなります。」

「誠也さん、富乃にも云つて置くが、もう今日限りで袈裟次の事はスツカリ心から忘れて貰ひたい。無論私も忘れて終ふ。……※お前さん達にも思出さないで貰ひたい。」

ガツカリして富乃の肩に凭れかゝつた。

「何うしてゐるか。」

「何うしてと云つて……これには入込んだ事情があつてな、今のところ些つと話は出来ないが、何れ今に……」

「袈裟次は私の娘ではなかつたと、それも判る時が来るだらうと思ふのだ。私の娘は、この富乃一人だ。二人ともにあれの事を忘れて世〔を送〕りたいのぢやよ、」と力なく頂垂れてしまつた。

「お父さん！」

富乃は思はず父の手を握った。姉の置手紙、予（かね）ての暗疑、目から火花が閃くやうな気がしたのである。

村の小児が六七人、拳を挙げながらバラバラ門内へ走り込んで来たが、そこに勝衛のゐるのを見るとヒタと黙つて立佇（たちどま）つた。目白のやうに肩を押合つて、目と目を見合つてゐた。

「お前達は何んだ。」勝衛は居丈高になつた。

「うゝん、鳴神に追ひかけられたんだアよ。」と、腕白の一人はベソをかいて門外を指示した。

「飛んだ飛んだ、あはゝはゝゝ。」と、躍り狂ふ鳴神の濁声が門の外から聞えて来た。「小鳥は皆飛んだ。」

鳴神はノツソリと来て、傍に立つた。仔細らしく頸を傾けて二人の顔を見較べた。

「ゲゲ。」と、〔何か〕でも揶揄ふ心と見える。狼狽へ切つた勝衛は、その声に一層顔を苦めて誠也に向つた。

「誰の為めでもない、みな那奴……その袈裟次の為めに云ふのぢや。」

「何うしてゝす。」

「だからそれは後に話す時が来ます。なア誠也さん、兎に角、私はあの不幸者を棄てかねると思はれるのが心外なのだ。私は……私はあんな者に未練はない、又義理もない。」

「檀方（だんぼう）！ 檀方。」

鳴神は肚を抱へて笑ひ出した。勝衛は度を失つて泣出しさうになった。オロオロして村の小児がポカンと眺めてるのを見ると、嚇ツとして拳を振上げた。

「何んだ、主（ぬし）等は何を見てる。」

「檀方、東京さ何日行くだよ。今日の晩げか、明日の朝けえ。」と、鳴神はニタニタ後に跟いて行く。

「狂者！ 何しに来る。」勝衛は踏止まつて、喰附くやうに睨めつけた。

「何日行くだい東京さよ。お嬢探しに行くだんべ。」

「棄てた袈裟次だ。何んで探しに行くものか、狂者め！」

ポカンと口を開いて暫く見上げてゐたが、「俺ア何も云はねえ。あの事は俺ア何んにも云はねえぞ。」と鳴神は不足さうに云つた。

「袈裟次は棄てたのだ。死んでも俺は探しに行かない。」

「へゝゝ、行くよお前は……駄目だ。」

（第四章 了）

現代語版

朝

—
広い台所には朝の日が冷々と流れ込んで、渡り鳥の明るい囀りが裏の雑木林から聞こえてきた。囲爐裏の大葉鑪は威勢よく煮こぼれ、乾きのいい櫛（くぬぎ）の薪がどんとんと燃え立っている。

冷たい井戸水で昨夜の夢をきれいに洗い落とした富乃は、朝の爽やかな空気を肺一杯に吸い込みたいような心持ちで、台所へ戻ってきた。壁に懸け並べた農具や馬具、棚にぎっしり積み重ねた鍋釜、光るものは光り、拭くものは拭き——母が生きていたときとそっくり同じ台所を、富乃は満足そうに見回した。

「七年間諸事儉約」と、築港が流れた年の年号で貼り出した大黒柱も、母のときと同じように煤光りに拭き込まれている。

いつからともなく母の仕事を引き継ぐようになった富乃は、母のやり方をそのままそっくり伝えていくというその一事だけでも、口に言えない幸福を感じていた。姉は面倒がって台所など見る人ではない。父も自分の帳場を居間に置いて、差押えの公正証書だのという難しい書付ばかり扱って、家の所帯のことなど一切構わなかったのも、富乃は自然と十三四の頃から小作帳や野帳の隅々まで細かく心を配って、一家を切り回していかなければならなかった。それがまた、彼女の幸福でもあった。喜びでもあった。

「そうそう、忘れていた」

富乃は帳場格子のなかへ入って、銅金具の用筆筒の抽斗を開けた。地租、宅地、営業税は後半期分、田税は第二期分——その納期になっていた。期限のある日を一日でも遅れるというのは、富乃にとって何より心配なことだった。

その割符のあいだから、一通の書付が落ちた。姉の字らしいので取り上げてみると、それは自分に宛てた置手紙だった。

初めの六七行は真っ黒に塗り消してあるので、手紙は途中からの文句だった。

『……ねえ、富乃さん、そうは思わないの。同じ土に同じ種をまいても、白い花と紫の花とが同時に咲くことはあるけれども、私は何だかこの頃、そんな恐ろしいことが考えられて仕方がないのだよ。止そうよ。そんなことは考えたくない。私は今、心が忙しい。』

ここまでが塗り消した文句の続きなのである。

『私は今、自分を花にたとえて書いたから、そのつもりで読んでね。とにかく、私という花は野蒜の土に育つ花ではないと思うのですよ。土が悪い、いけない土だ。お父さんという一本の幹を枯らしたのも野蒜の土です。死んだお母さんや富乃さん、お前さんたちにはごく適当した土でしょうけれど、私という花はどうしてもこの土には咲きそうがないのだよ。いけない土だ。だから私は、いつからかこの野蒜の土を離れて、どこか違った別の土に思うさま自分を

咲かせたいと思ったのよ。私は考えた、考えた。これですいぶん長いあいだ考えたよ。お前さん気がついたかどうか知らないけれど、夜もろくに寝ないで考えたんだよ。どう考えてもやっぱり土がいけないのだ。私はきっと、お前さんと同じ種でも、変わり咲きの花か、狂い咲きの花なのだよ。仕方がないのさ。』

日付を見ると五月何日とある。姉の家出は昨日今日の考えではなかった。姉としては考えるだけ考えたうえのことだったのだ。

『それにさ、その土の合わない土地に、だんだん私を引き留めようとするものが出来かかってくるのだよ。私はそれが恐ろしくて仕方がないのだよ。いけない土だと思いながらも、どうかすると私は根を下ろしそうになって困るのだよ。本当に私、それが恐ろしくて仕方ないんだ。富乃さん、わかるかい、わかるだろう、ねえ、わかんないかね。わかるだろう。本当に困っちゃったのよ。』

富乃ははっとして読み直した。「きっと清原さんのことだ」と思ったのである。慌ただしく周囲を見回したのは、自分の思ったことを誰かに見つめられているような気がしたのだ。どうしても顔が熱る。

「お嬢様、ご飯にしたらどうだね」台所から作男が呼んでいた。

『富乃さん。土を換えると私が言うのは、野蒜の土を死ぬまで見棄てるということじゃないのだよ。野蒜の土を愛する。誰よりも、お前さんよりお父さんより、私は野蒜の土を愛するのだよ。どれほど私が野蒜の土を愛したかということとは、今にお前さんたちにもわかる時が来るよ。きっと来るとも。それは見ておいでよ。けれども、野蒜の土は私という花を咲かせてくれそうな土じゃないんだよ。私は死ぬまでただの袈裟次でいなければならない、そんなことができるものか。狂い咲きでもかまわない、変わり種でもかまわない、私は持って生まれてきただけの自分を、この世に咲かせて見たいのだよ。それにはこの土がいけないのだ。私はこれから、本当に自分を咲かせてくれる土を探しに出かけるのだ。十分に自分を咲かせたあとに、その実はどこで結ぶかといったら、私はこの好きな好きな、最も愛する野蒜の土よりほかにはないのだ。』

わかったかね富乃さん。お前さんたちは、私が野蒜の土を子どもの頃から憎んでいたように思うけれど、それは大変な間違いなのだよ。私というもののほど、この土地を愛する者はないと思っている。それは今言うことではないかも知れない。見ていてください。見ていて貰いたい。お父さんでもお前さんでも、村の人でも、今にきっとそれを知る時が来る。来ますとも、来る。私が結ぶ実というのは築港だ。私はきっと港を作って見せる。私という者はどう考えても、この港をつくるために生まれてきた者だと思う。その訳は書けないけれど、築港は私が子どもの頃からの目的で、生命なのだよ。私はその実を結びたいために、美しい大きな花を咲かせたいのだ。』

富乃はほっとして手紙を膝に落とした。

だが、同胞（はらから）だもの、姉のこの考えを知らないはずはない。何十万という金を投げ出し、村ひとつが拳って路頭に迷うような犠牲を払っても失敗した築港である。姉はそれをどうやって成功させるというのだろう。

姉のこの狂気じみた空想は、これまでどれほど父の心を悩ませ、一家の紛擾を招いたか知れないのに——ああ、姉はまだそれを諦めてはくれないのだ。

姉は確信をもって、まだ長々と書いている。それによれば、この前の築港失敗は技師一人の罪で、設計さえ完全だったら必ず成功したに違いないと信じているらしい。その失敗の原因も究めないで腹を切る者も馬鹿なら、気の違う奴も馬鹿だ。第一撃で昏倒してしまって、世間を棄てる気になった父・勝衛などは腑甲斐なしの随一だ。鳥は第一の羽ばたきで地を切れなくても、第二第三の羽ばたきで飛べれば恥にはならない。大事な心棒になる三人が三人ともこの体たらくだから、築港ができなかったのも無理はない。

そこに気づいて、第二第三の後継者が村から出るだろうと、私は子どもの頃からどれほど待ったか知れない。父が急に強欲の人になって金を積むのを見て、生涯に一度はその金で最初の失敗を償う気ではないかと思ったこともある。父の無惨な死に様にあれほど刺戟されている清原の息子だ。この人がきつと第二の羽ばたきを試みるに違いないと望みをかけたこともある。村人の誰彼を順々に見渡した果ては、あの鳴神の躍り歩くのさえ実は世間を欺く狂人の振

りで、本心は今も築港の成功を目論んでいるのではないかと、馬鹿馬鹿しい望みを持ったこともある。

『駄目です。みな駄目です。築港は村人から昔の夢と消えてしまった。村人の心は火が消えたあとの灰より冷たく冷えきってしまった。やっぱり私だ、私だ。私よりほかに、この大きな焰を燃し立てる人はないのだ。私はどうしても大きな花に咲かなければならない人だ。私だ、私だ。』

姉の手紙は勇ましく書き続けてあった。富乃はその文字のあいだに躍り立つ姉の興奮を、悲しそうに眺めていた。

『それから次には清原の誠也さんです。手がだるくなったから簡単に書きますよ。私は誠也さんに言っておきたい。どうしても私は誠也さんに、心の底から忘れて頂かなければなりません。』

富乃の目に、ちらと火花が閃いた。

三

『誠也さんと私は、見ている見当がまるで違う。前はそれほども思わなかったが、この頃はそれがだんだんひどくなる。溝ができたとも言うのだろう。誠也さんのお父様は学者で、偉い人で、野蒜の土を愛して腹まで切った人だというけれど、それを自慢にしている誠也さんはどうだ。生まれた村などより自分の身ばかり悲しんでいる人だ、私が一等嫌いな人なのだよ。子どもの頃から三人であんなに睦まじくしてきた人だから、私はあの蒼白い意気地のない姿を

見ると、馬の蹄鉄でも投げつけてやりたくなる。大嫌い、大嫌いな人だ。私にはどうしても解らない。何が面白くて生きてる人なんだい。牛の肥料にまみれてさ、村中の者に頭を下げてさ、おどおど人の顔色を見てさ、郵便局の通帳ばかり大事にしてさ。本当に詰まらない人があったもんだと思うよ。もしあの人のお父様が偉い学者だったのなら、あれはきっとその子じゃない。私は嫌いだ、嫌いだよ。

私はさっき、このいけない野蒜の土に根を下ろしそうになって、自分ながら恐ろしいと書いたね。その根を下ろさせようとする人は、この人とお父さんなのだよ。お父さんはともかくとして、この人がいけないのだよ。私はそれで余計に家出を急ぐんだよ。解ったかい、富乃さん。解らなくても仕方がない。もう書くのが厭になった。

富乃さん、お前さん、この手紙を誠也さんに見せてくれないだろうね。お前さんはそういう遠慮深い人だが、それは困るよ。私はこの手紙を、第一にあの人に読ませたくて書いたのだよ。あの人に読まれないうちは、私の苦勞はとれないのだよ。私が家を出て、もう三里も行ったと思う時分に、急いであの人に読ませてください。頼みました。』

何か三四行書きかけてあったが、手紙はこれで断れていた。墨を黒々と消して、日に透かしても読めなかった。

富乃はただ憎らしく「思うばかりで」、文字のあいだから姉の真実の心持ちを汲み取ることはできなかった。姉さんらしい手紙だと思うほかはなかった。話をしても頭のなかまで突っ込んできて、相手の心の抽斗をぐんぐん掻き回さなければ措かないような息苦しさが先に立って、始終揺れ動いている姉の心にはついていけそうもなかった。字に書いてある背後に何かあるように思われて、清原に対する姉の心持ちなどを用心深く考えてもみた。

穏やかな朝は、穏やかな小春日を呼んでいた。厩のほうで馬が柵に体を擦りつけて鬣を振る音を聞くと、この佳い日をよく送るべき一日の営みが思われた。光った鍬に一日でも錆をつけず、野へ行く者は野へ、海へ行く者は海へ、駄賃仕事でも見つけて馬にも人にも手を空けさせないのが、富乃の心配りだった。

富乃はもう払い除けるように手紙のことなど忘れて、雑倉の大番鍵を腰につけながら、慌ただしく帳場を立った。

穀打ち場に干した茸は、程よく日を吸っていた。漬け込むにはちょうどいい日和だ。富乃はそそくさ朝飯を済ますと、きりりと襷をかけて土間に下りた。

「さあ女衆。今日は茸を片づけてしまいますよ」と家中に呼んで、富乃はかっ
と照る日向に出た。

大きな半桶には冷たい井戸水が満々と張られて、くるくると日に戯れた。土地で赤初（あかはつ）白初などと言う雞茸（しめじ）は、女たちの手に薙ごと

運ばれて、爽やかな秋茸の香がぷんとそのあたりに漂った。この秋の実りを漬け込んで、塩の味も狂わせずに年を越し、来年の彼岸頃まで朝々の汁の実に事を欠かないのが、富乃の母の自慢のようにされていた。

「おきし、お前は松脂を篩ってな、それから坂下の小母さんに目張の渋を引いて貰うんだよ。いいかい」

富乃は半桶の前にうずくまって、二の腕まで捲り上げた白い肘をずぶりと水に浸けた。とろとろと午前の日に戯れていた透明な秋の水は、くるくると日を渦巻く。水を透して見る掌は、自分ながら白く美しかった。富乃は胎毛のような薄毛の生えた細かな肌を一度きれいに撫で落としてから、また楽しそうに肘を水に浸けてみた。

四

「同じ土に同じ種をまいても、白い花と紫の花とが同時に咲くことはあるけれど……私はこの頃、そんな恐ろしいことが考えられて仕方がない……」

富乃ははっとした。姉が塗り消していた文句がふと心に浮かんで、すぐ後からもっと恐ろしい考えが来そうで、深い井戸水を覗いてみた。片手を釣瓶竿にもたせると、釣瓶の滴りがときどきぼとりと落ちて、星も映りそうな昼静かな青空を漬した水面に波紋を描いた。その環が震えながら凝ってくると、それが遠く小さく富乃の顔になった。

子どもの頃から必ず重なり合って映っていた顔の、その一つが見られないのが、富乃を急に寂しく思わせて、涙の溜まった目でじっと見つめてみた。

寂しそうな顔が二つになった。

いつの間にか、誠也が来て井戸の縁に凭れていたのである。青空を背にして、小さな顔と顔とが井戸の底で目を見合わせていた。

「聞いたでしょう」ややあって富乃は言った。

「はい、聞きました……昨日」誠也の暗い顔が答えた。

「どうせ、そうなる人だったわ」

「そうかも知れませんね」

「東京よ」

「そうだろうと思った」

白い雲が悠然と水に映って過ぎた。眩しい秋日の反射が、もう正午に近いことを思わせる。二人は互いに目を避けながら、同じ水に影を映していた。

「昨夜、お父さんがそりゃあ大変でしたの。困りましたよ」

「そうでしょう」

「昨日がちょうど、港の流れた日なんですってね」

「そうです。今朝がちょうど、うちの親父が腹を切っていた朝なんです。」

「まあ、本当に……そうでしたね」

「そうです。今朝なんです」誠也はほっと溜息を吐いた。

誠也は配達への帰りだった。胸に子持縞を通したオリーブのジャケットを着て、腰に幾枚かの門鑑を下げている。富乃の父の口添えで、誠也はこの夏から、三里離れた郡立病院へも牛乳を入れることになっていた。

誠也は両の掌一杯になった茸に鼻をあてて、爽やかな秋の香を嗅いだり、目方を量るような手つきをしながら、嘲るような調子で平気に話していた。築港の話が姉のことに落ちはしないかと恐れていた富乃は、案外に平静な相手の態度に心が軽くなった。誰のためにも少しでも悪い時間は送りたいくないと富乃は優しく考えながら、母屋のほうから竹箒を取ってきた。その足音を聞きつけて、枸杞（くこ）の垣をあさっていた雛たちが、柔らかい喉を鳴らして一斉に富乃を追ってきた。

五

「まったく親父は狂人ですよ。この頃、親父の書いたものを読めば読むほど、僕はそう思ってね、僕にもその血が伝わっているだろうと怖くなりましたよ。」

誠也は手の屑茸を雛に一つ一つ投げながら言った。

「ほう、狂人の多い村なこと」富乃は笑いながら掃き始めた。ちょうど姉がこの人へ書き残した手紙を思い出していたのだ。

雛たちは口に余る茸を奪い合って、明るい井戸端をあちこち逃げ回っていた。

「こちらの小父さんや鳴神は別として、高天原の僕の親父が、なぜ築港などという俗な事業に夢中になったか、僕はこれまでどうしても解せなかったんです。それで、何かそんなことを書き残したものはないかと探してみると、あるある、大変なんです。親父の説によると、大昔に武内宿禰が探險し、日本武尊が東征の第一歩に船を進めた日高見国というのは、この北上川一帯の沿岸で、そのなかでも昔の桃生の郡・野蒜の港は当時の大港であったという学説なんです。つまり奥州六か国の文明は、この野蒜を玄関にして輸入されたと言ってもいい大事な港だ。それをこう衰微させては、いにしえ、能褒野（のぼの）の露と消え給うた日本武尊の御霊にも〔申し訳が立たぬ〕——はははは。どうです高天原でしょう、親父には鉄道も電信もなかったんですね。明治の今日を、またすぐに人皇十二代景行天皇の御代へ後戻りさせられると思ったんですね。高天原ですよ、どうしても神代の民ですよ、狂人ですよ。はははは」

「あっ、危ない」

富乃はひやりとして胸を抱いた。前に回って餌を争っている雛を、危なく踏むところだった。

「御覧、もう少しで踏み潰されるところだったじゃないの」

「まったく狂人ですよ。親父の築港騒ぎも、僕の三四年前も、揃って狂人ですよ。両方とも夢に魘（おそ）われていたんです。」

誠也は空を見つめて笑っていた。何だか潤びた声だった。

「もう止しましょうよ。誠也さん」

富乃は頼むように言った。今にきっと痛いところへ触られそうな気がしたのである。

「僕は抑えましたよ。自分で抑えて、狂人にならずに済みました。しかしあの
人……あの人には自分を抑える力がない。火を見た馬と同じことで、どこまで
駆け出すか判らない。なんですよ」

「ええ、それで……心配してるんです」

「そうでしょう、ねえそうでしょう、貴女も心配でしょう。姉さんの……姉さんの一生を心配するでしょう」——じっと相手を見つめた誠也の手はわなわなと震えていた。

「ええ」富乃はうつむいて唾を嚥んだ。

「心配する奴が馬鹿、姉さんのほうじゃ笑ってるでしょうが……やっぱり、子どもの頃からの友達、心配せずにいられませんからね」

誠也の熱した目から、めくめくと涙が頬に流れていた。富乃は握られた手をそっと放してみた。案外静かに離れた。

「それについて、姉さんから私に何か、確かにあるはずですよ。置手紙があるでしょう。それを見せてくれませんか。」

しばらくして誠也は外を見たまま言った。

「手紙……ですか」

「姉さんはいつも冗談のように、置手紙は貴女の手に残っていると聞いていました。確かにあると思いますが」

富乃はこくりと喉を鳴らして、「あるにはありますの」と、心静かに言った。「あれはもう少し、私がお預かりしておきましょう。」——言い終わってからひやりとした。

「どうしてです」

「今ご覧になる手紙じゃありませんもの」

「どうして」

「ただ……そう思います」

「ただ？」

「ええ……ただ」

富乃が心を決めて顔を上げると、焼きつけるように見据えていた誠也の目は、慌てて外のほうへ逃げた。富乃の性質には、守るべき道はあくまで守り通すという柔らかな強さが、子どもの頃からあったのだ。

「しかし、僕に宛てた手紙でしょう」

「君に宛てた手紙だから、見ないほうがいいのだ」

誠也の肩を叩いた者がある。父の勝衛が、老人らしく日向に立っていた。

「小父さん、僕はその手紙を見て、なぜいけないんです」誠也は進み出た。

「なぜいけない？」勝衛はじろりと若者を見た。すぐ思い返して、「なぜと言って、そこに富乃がいけないと言っているではないか。なあ富乃」と、笑っている。

「しかし……」

「誠也さん、もう措こうか。富乃がいけないと言うなら、いけないことにしておきましょうよ。家中で正当な考えを持っているのはこの人ひとりだ。この人は一家の柱だ。この人の考えに任せておけば物事に間違いはない。私は昨夜ひと晩考えましたよ」——勝衛は後ろ腰に両手を組んで、ぼくぼく日向を歩き回った。

「しかし小父さん」

「もう止そう、止そうな誠也さん。一頭の馬が狂ったとて、ほかの千頭まで狂ってはいられないのだ。仕方がないのだ」

「そうですかね……。じゃあ手紙は見ますまい。富乃さんが見せるまで預けておきます」誠也はだらりと両手を垂れた。

「そうだ、それがいい。互いに気を高ぶらせるだけ寿命の毒だ。これからは私も、気を楽に持って生きる考えになりますよ。誠也さん、これから夜長になったら、またぼつぼつ謡曲でも始めようかの」——勝衛は年寄りらしく背中を丸めてそこにうずくまり、井戸の石組みから挟み出している虎耳草（ゆきのした）らしい古い葉を摘んでは捨てていた。

誠也はまた箒の前に立った。

「じゃあ小父さん、貴方は袈裟次さんをこのまま打ち遣る気なんですか」

「何を言って、私のほうがあれに打ち遣られたのだよ。はは、なあ富乃」

「じゃあ、東京へ行くというのは嘘だったんですか」

「私が東京へ？ 何のためにな」

「無論、袈裟次さんを引き戻しにですよ。嘘なんですか、小父さん」

「待てよ、昨日の今日だ、私はまだ何も考えていないが、一体誰がそんなことをお前さんに言ったの」

「鳴神が今朝、わざわざ知らせてくれましたよ。牛乳を搾っている、まだ暗いうちでした」

「あいつ、そんなことを言って行った！」

「小父さん、じゃあどうするんです、袈裟次さんは」

「あいつめ……あいつめ……」

勝衛は竹箒の柄に顎を乗せ、一点を睨みながら唸るような声で言った。関節炎の膝ががくがくと震えた。

六

「お父さん、どうしたんですお父さん」

富乃は、父がしきりに目を瞬き出したのを心配そうに、傍へ寄ってきた。

「なあ富乃、俺は狂人に負けてはいられないぞ」——ぐっと首を反らしてきつとした。「よし、鳴神がそう言うなら、私は意地でも袈裟次の行方は探さない。」物にぶつかるような目つきだった。「死のうと生きようと私は構わん、袈裟次のことを忘れてしまう。もう二度と口にも出しはしない」

「小父さん、それじゃ袈裟次さんがどうなります」

「誠也さん、富乃にも言うておくが、もう今日限りで袈裟次のことはすっかり心から忘れて貰いたい。無論、私も忘れてしまう。お前さんたちにも思い出さないで貰いたい」

がっかりして富乃の肩に凭れかかった。

「どうしてですか」

「どうしてと言って……これには入り込んだ事情があつてな、今のところ少し話はできないが、いずれ今に……」

「袈裟次は私の娘ではなかったと、それも判る時が来るだろうと思うのだ。私の娘は、この富乃ひとりだ。二人ともにあれのことを忘れて世を送りたいのじゃよ」——と、力なくうなだれてしまった。

「お父さん！」

富乃は思わず父の手を握った。姉の置手紙、かねてからの暗い疑い——目から火花が閃くような気がしたのである。

村の子どもが六七人、拳を挙げながらばらばら門内へ走り込んできたが、そこに勝衛がいるのを見るとぴたりと黙って立ち止まった。目白のように肩を押し合って、目と目を見合わせている。

「お前たちは何だ」勝衛は居丈高になった。

「うん、鳴神に追いかけられたんだよう」と、腕白の一人はべそをかいて門外を指さした。

「飛んだ飛んだ、あはははは」と、躍り狂う鳴神の濁った声が門の外から聞こえてきた。「小鳥はみな飛んだ」

鳴神はのっそりと来て、傍に立った。仔細ありげに首を傾げて二人の顔を見比べた。

「げげ」——何かを揶揄う心と見える。狼狽しきった勝衛は、その声に一層顔を歪めて誠也に向かった。

「誰のためでもない、みなあいつ……その袈裟次のために言うのじゃ」

「どうしてです」

「だからそれは後に話す時が来ます。なあ誠也さん、とにかく、私はあの不幸者を棄てかねると思われるのが心外なのだ。私は……私はあんな者に未練はない、また義理もない」

「檀方（だんぼう）！ 檀方」

鳴神は腹を抱えて笑い出した。勝衛は度を失って泣き出しそうになった。おろおろして、村の子どもがぼかんと眺めているのを見ると、かっとして拳を振り上げた。

「何だ、お前らは何を見てる」

「檀方、東京さいつ行くだよ。今日の晩か、明日の朝か」——鳴神はにたにたと後をついて行く。

「狂人！ 何しに来る」勝衛は踏み止まって、食いつくように睨めつけた。

「いつ行くだい東京さよ。お嬢を探しに行くんだべ」

「棄てた袈裟次だ。何で探しに行くものか、狂人め！」

ぼかんと口を開けてしばらく見上げていたが、「俺ァ何も言わねえ。あのことは俺ァ何にも言わねえぞ」と鳴神は不足そうに言った。

「袈裟次は棄てたのだ。死んでも俺は探しに行かない。」

「へへへ、行くよお前は……駄目だ。」

(第四章 了)

作業メモ

- ・底本コマ対応：（一）＝コマ 32 後半～34 前半／（二）＝コマ 34～35／（三）＝コマ 35～36／（四）＝コマ 37／（五）＝コマ 38～40／（六）＝コマ 40～41
- ・☑本章で解決：清原誠也（きよはら・せいや）の名と役割／子爵成瀬淳三（既に確定）
- ・※の主な箇所：置手紙（二）末尾の一文（OCR 大きく崩れ）／「父の無惨の死態に」／「富乃はたゞ憎として」／井戸端の水の描写一文／誠也の「日本武尊の尊霊をも」以下／勝衛「無論私も忘れて終ふ」以下
- ・「能褒野（のぼの）」＝日本武尊の没地（三重県亀山市）。誠也の父の学説は日高見国＝北上川一帯／桃生郡野蒜＝古代の大港という説
- ・★次章「合宿」＝コマ 42～50（本文 76～94 頁）。進捗＝4 章／6 章

第五章「合宿」

解題

★1. 袈裟次は、抵当に入れられていた

上野で寄ってきた男の名は長次、通称「板木屋（ばんぎや）」。連れ込まれた宿は上總屋。三階の逃げ場のない部屋、洋傘と履物を取り上げられ、外出には小娘（お松）が付けられる——袈裟次はいつの間にか禁足されていた。

「お前さんの身体を書入れて、俺ア親分から二十両ツて金を借りてるんだ。」

★2. 隣室の女客＝子爵の、あの恋人だった

隣室で朝から酒を飲み、三味線を弾いて泣いている女。お松が噂を語る。

- ・もと華族の若主人の恋人。望めば今にも奥様になれるのに、自分から芸妓に身を売った。その身代金の使い端に困って酒を飲み廻っている。
- ・「その若様が大学生とかの時に、あの人と関係があつたんですつて。その間にあの人、若様の子を産んだんですつて。御洋行したんですつて」
- ・「え、華族様よ、子爵なんですつて。でもね、その名だけは云はれないんですつて。」

→ 第三章で語られた子爵成瀬淳三の「昔の恋人」その人。袈裟次は、自分が切符を買ってもらった相手の恋人と、壁一枚を隔てて隣り合っていた。しかも二人はそれを知らないまま、同じ地唄を口ずさんで唱和する。

★3. そして袈裟次の目的が明かされる

袈裟次が出京の第一の目的、築港の念願を達する迄には、或る華族を一人是非動かす必要があつた。それは彼等の旧領主であつた。

→ 袈裟次は最初から、旧領主の子爵を動かすつもりで東京へ来ていた。第一章の汽車での出会いは、彼女にとって偶然ではなく、まだ気づいていない必然だった。

★4. 三味線が結ぶ、二人の女

地唄「浮草は 思案の外の誘ふ水、浮世が恋か……恋が浮世か」を、袈裟次は知っていた。清原誠也の祖母（御殿奉公をしたという人）が、青柳の枝垂れた離屋の縁で三味線を持ち出し、孫より袈裟次を可愛がって手解きしてくれた唄だった。

つい声に出た袈裟次に、隣室の女が「あら」「お隣室の方でせう、被来（おいで）いな」と呼びかける。

花も雪も、払へば清（すが）き袂かな、ほんに思へば昔のことよ、わが待つ人もわれを待ちけん……

★5. 「一つしかない身体を売ったお金だもの」

女客の台詞が、袈裟次の境涯と対になる。

「何うせこんなやくざな身体だもの、粗末にでもして見る外にお慰みはないやね。それには自分の身体をお酒にして、それを綺麗に自分で飲んでしまつたら、さぞさぞして好い心持だらうと思つたのよ。」

「食養生までして生きてゐたい娑婆でもないぢやないか。」

6. 大沼姓の人物は、この章にも登場しない。

翻刻（原文どおり）

合宿

（※冒頭は第四章の続き＝勝衛と鳴神の言い合い）

「行かない……行くものか。」

「行く。」

「行かない。」

両方から顔を突出して、獣のやうに歯を剥出して睨み合つてゐた。

誠也は又明るい日向を凝つと見詰めて、腕を固く組んだ。「忪（こら）へる……僕は忪へます。」

（一）

「何んだい、飲ませないてえの。大きなお世話さ、私のお肚だよ。余計も沢山もお前さんに尺度をあてゝ頂く筈は……御在ません。」

「ですけど、今朝からでも大分召上つてますから……。」

「ちよいと、お払ひの心配なの。厭だねえ……そおら鯨船が着いた。」と投出したのは財布だらう、ドンと畳に響けた。

「何んだ、そこに持つてゐたの……馬鹿にしないよ。」

「へゝゝ、為やうがありませんな。ぢや、これ一本となすつて一寝入なさい。
何かお肚の足になるものを上らないぢや、身体に毒ですよ。」

「序（ついで）に三味線を貸して下さいよ。あゝ何んなのでも好いよ。」

隣室の女客は起き抜けから酒を初めて、番頭を相手に一人で調子附いてゐた。昨夜夜深けて公園の酒場とやらから担ぎ込まれて来たのを、袈裟次はぼんやり寝耳に聞いてゐた。

八畳の真中に襖（ふすま）を入れて、細長く二室を劃つて、顫へる十燭電球が両方へ光りを投げてゐた。これでも三階は別間になつて風呂附だよと、例の若い男は自慢さうに案内した。自分で下へ立つて、奈良火鉢に薪爐（まきろ）を山と持つて来たりした。

その若い男は長次とも呼ばれ、板木屋（ばんぎや）とも呼ばれてゐた。袈裟次を初め連れ込んだ時、薄痘（あばた）の上（かみ）さんと何かヒソヒソ話す様子が、自分の事とは直ぐ気が附いたが、袈裟次はそれよりはユツクリと畳の上に身体を投げたかつた。こんな者どもに好い事をされる自分とは思はれなかつた。小説でも芝居でも、悪い者はもう少し締括りがあつた。……※悪徒がるのが可笑しな※〔ものだつた〕。

袈裟次は夢さへ見ずに、その晩はグツスリと眠つた。目が覚めると雨だつた。高い窓に凭れて、何かしなければならぬ何うすると、同じ間に気を苛立

てながらも、一日雨を眺めて暮してしまつた。昨日の汽車の響が耳の底に残つて、身体はまだ揺れてゐるやうだつた。

その間も板木屋は何遍となく上つて来て、馴々しく話掛けるのだが、袈裟次はたゞ煩かつた、穢かつた。黙つて凝つと見詰めてゐると、板木屋は可笑しいほど萎（しな）げてコソコソと降りて行つた。それでも自分の部屋を直ぐ下の梯子段の傍に移したのは、そこから間断なく袈裟次の動静を偵（うかが）つてゐるらしかつた。

翌日も雨が續いた。食べたものを宿へ払ふと、**大きな銀貨が二枚と手に残らなかつた**。これだけが自分の持つてる総てだと思ふと、袈裟次は凝つとしてゐられなかつた。兎に角、ものに衝突（つきあた）つて生きる路を見附けなければならぬ。洋傘を借して表へ出ようとする……※、上（かみ）さんと何か相談して、その小娘を案内に立てゝくれた。

彼岸雨のビシヤビシヤと降り沁む細い小路を、援（たど）けたり曲つたりして、袈裟次は小娘の案内するまゝに、五六軒**周旋屋**の暖簾をくゞつた。たゞ漠然食（くわ）れる口とも云はれないから、新聞で見てゐた**交換手、女店員、活動の案内者**のやうな者から、終には心細くなつて身体で人に使はれる**小間使**の口まで頼んで見た。何処なり身が定まれば、そこから又かねて志ざしてゐる方への道が開けやうと思つたのである。

周旋屋の答は判に捺したやう、何所でも同じだつた。丁度求めるやうな口が、有るには有る。然も皆思つた以上に仕合な飛び附くやうな口だが、何かしらの都合で何れも三日位の間があつた。話が決るには何うせ保証人も要るのだから、それまで上總屋に返事を待てと云ふのであつた。上總屋とは泊つてゐる宿の名だ。

「でも私……そんなユツクリした身体ぢやないんですもの。」

最後の家では心弱くなつて、袈裟次は雨に暮れ行く貧乏町を見詰めて、店の柱に字を書きながら頼んで見た。

「あゝ、その御心配ですか。それなら大丈夫ですから、上總屋さんに威張つてゐなさるが好い。給金の前借で払ひをすれば同じ事でき。給金は二月でも三月でも私の力で借りて上げますよ。」

デツプリ肥つた亭主は事もなげに笑つて、傍に立つてゐる小娘に何か目で相図でもするらしかつた。

「でも……そんな勝手に願はれますか。」

「大丈夫、私が受合つた。お松ちゃん家へ歸つたらな、このお客さんは私の方で引受けたと好く云ふんだぜ。」

「あゝ、然う云ふよ。」小娘は狡猾しさうに隠し笑ひしてゐた。

袈裟次は夕暮の町を、肌寒さうに宿へ歸つて来た。電車通りへ出るところで、大きな彪犬（むくいぬ）の頸ツ玉へ荒縄を結へ附けて、雨の中をドンドン駈けて来る小僧があつた。**上野で銀貨を棄てた小僧**だつた。袈裟次の方では気が附かないが、小僧は……※犬に引摺られて走つて行つた。

板木屋は宿の洗物に片襷なぞかけて、袈裟次に御馳走するのだと云つて、**北海鱗（ほつかいがれい）**のベトベトした鱗なぞ剥いてゐた。**隣室の女客が担ぎ込まれたのはその夜であつた。**

（二）

板木屋は酒なぞ買つて来て、これ腥（なまぐさ）さうな肴にせゝり箸しながら、その晩遅くまで傍を動かなかつた。これまで自分の手にかゝつて田舎の酌婦なぞにはたかれて行つた女どもの経緯なぞを喋り立てゝ、袈裟次を怖がらせやうとした。初めは皆死ぬの生きるのと毛茨（けばら）立つけれど、何んと云つても女は弱い、終には女の方から焦つて来て振放されまいと齧り附くなぞと、串戯（じようだん）のふりして袈裟次の手を握つたりした。袈裟次は黙つて、顔は真蒼に癩立つてゐた。何時でも睨めた。

「こりや不可ねえ。**まだ野鳥で籠馴れねえから世話が焼ける。**」板木屋はテレビ隠しにニヤニヤ笑つてゐた。

隣の室から三味線の音が聞えて来た。酒にも飽きて取上げたのだらう、懶（ものう）さうな爪弾の音が春降る雨のやうに、静かに流れて来た。

袈裟次は腋明（わきあき）に両の手を突込めて、火のない奈良火鉢をつくねんと眺めてゐたが、頭の中は旋風だった。

「それは何んの態だ、今日潔白さうな事は云つても、矢張り私の掌の下より外にお前の家はあるまい。」と、嘲りかゝる皮肉な父の笑声が耳に聞えたり、自分の無謀を危んでる若い紳士の顔が目に見えたりした。その紳士に恵まれた金のために三日の生命を凌いだのは、死ぬよりの恥と他の慈恵をうけることは、訓（をし）へられて来た※袈裟次は、その一事だけでも最（も）う父の前に面を向けられぬやうな気がした。

「いゝえ、私は独りで活きます。生きて見せます。」と、袈裟次は又呟いて、遠くの父へ誓を送りながら立上った。

例へ三日でも、宿屋の恩恵をうけては便々と待つてゐられない。もう一度周旋屋へ頼んで見て、水仕事奉公しても自分の力で活きたかつた。然う思つては一刻も凝つとしてゐられなかつた。上り口に穿物を探してゐると、薄痘の上さんが剣幕を変へて飛んで来た。雨は綺麗に上つてゐた。

「ちよいとお前さん、何処へ出掛けるのだよ。」

「何処へツて……昨日の周旋屋へ行つて来るのよ。」

「今日はお松も使に出てゐないし、出るならあれが歸つてからにしておくれ。」

「道は昨日で知つてゐますから、一人でも行けるのよ。」

「不可ないよ、長次さんも留守なのに、お前さん一人出されるものか。洋傘も此方へ預つて置くよ。」

「でも、用があるんですよ。」

「不可ないよ。一人で出せるものかね、何を寝惚けてるんだ。」

上さんは引奪るやうに洋傘と穿物を取上げて、サツサと台所へ持つて行つた。

袈裟次は何時の間にか禁足されてゐたのだ。逃場のない三階へ室を取つたのも、昨日小娘を随けて出したのも皆そのための用意であつたと気が附いたが、こんな者どもと争ふ気にはなれなかつた。

「御覧、到頭監禁だ。」

袈裟次は自身を嘲笑ふやうな調子で呟きながら、斯うグラグラする梯子段を自分の部屋へ戻つて来た。場面が小説がゝつて変化して行くのが、何んだか面白いやうな気がしたのだ。

通りすがりに隣の室を覗くと、若い女客が柱にグツたり凭れて三味線を執つてゐた。右手の拇指に寝衣の袖口を巻きながら、調子を張つて山姥の山めぐりの前弾を弾いてるのは、何れ待人でもかけたのであらう。襟足のすうと通つた軟かな肩附が、艶（あで）しく横顔を仄見えさせた。

袈裟次は膝からドンと折つて、投げるやうに自分の部屋へ坐つた。何うせ為るやうになるのだ、何うともなれと幾らか棄鉢な気分になつて、火鉢一つの外何もない室の中を見廻した。三味線はハタと止んで、此方へ聞耳でも欽（そば）てる様子だつたが、又やがて蕭然（しょうぜん）に音色を漂はした。

板木屋は汗を拭きながら、慌てて入つて来た。

「お前さん何んだつて又、一人で出掛ける気になぞなつたんだ。」と、突立つて口を尖らした。

「一人で出ちや悪るいの。」

「悪るい好いぢやねえぜ。出られちや俺等困るんだ。お前さんはもう丁と親分のところへ抵当に入ツてゐるんだぜ。」

「抵当？」

「お前さんの身体を書入れて、俺ア親分から二十両ツて金を借りてるんだ。無暗に出歩かれて耐るかい。」と、板木屋は得意さうに小鼻を蠢かした。

（三）

「私の身体がお金になつてるの。」袈裟次も顔色が変わつた。

「ちよいと苦しかつたもんだから、一時の融通だアな。金が出来りや直ぐ請戻すんだよ。」板木屋は懷から手を出して、得意さうに顎を撫でゝゐた。

「へゝゝ、悪い奴に見込まれて、お前さんも災難てえもんだよ。」

袈裟次は膝を掻合せた。

「然しその話は別として、俺アお前さんだけには最初ツから、職業をはなれて
附合つてゐる積りなんだぜ。本当だよ、おい。」と、ニタニタ寄つて来た。

「だから、何うするのよ。」袈裟次は屹と肱を突向めて待構へた。

「何うするツて事もねえが……俺等だつて友達に幅が利かねえぢやねえか。現
に下の上さんにも俺ア笑はれてるんだぜ。」

「何を笑はれるんです。」

「何をツて……まア好いや、その話はどうせ後だ。一風呂浴びて来やう。晩に
は活動へでも行かうね、お揃ひで。」

「ぢや何うしても私、外へ出さないんですか。」

「些ツと相手が悪かつたよ。へゝへ、まあ辛抱するのだね。」

「勝手にするさ。」

袈裟次は懷手して壁に凭掛つた。一人で悪徒（わるがる）がつてゐる愚劣さ
を見ると、口を利くのも面倒になつた。何うなり出来るなら為て見ろと云ふ氣
だつた。板木屋は独りでニヤニヤしながら出て行つた。

隣室の三味線はいつか地唄がゝつたものになつてゐた。遣瀬（やるせ）なげ
にその細くシンミリした絲の音色は、顫へ掠れて、春の淡雪がヂワリと庭石に
溶けて行くやうに、聞く人の心の底まで戦（そよ）かに染入つて来た。

袈裟次は聞くとなく聞いている間に、訳もなく心がシインと涙含ましい気になつて、遠い小児の頃の事なぞが妙に思ひ出されて来た。足を裾につゝんで、畳にコロリと肱枕して、目の底から凝と聞縮（ききすぼ）めてゐた。

御殿奉公をしたと云ふ清原の誠也の祖母さんは、中にその地唄が好きで、青柳の枝垂れた離屋（はなれや）の縁端に三味線を持出して、さびのある声を聞かせたものだつた。何う云ふものか自分の孫より袈裟次を可愛がつて、二ツ三ツ昔唄の手解きして貰つたこともあつた。

——浮草は、思案の外の誘ふ水、浮世が恋か……恋が浮世か。

好く聞くと三味線ばかりではなかつた。秋水と澄んだ寂しい声が、細々と冴えた絲の音に漂はされてゐた。

「あ、知つてゐる……」と袈裟次は頭を擡げたけれど、それは旧い夢でも辿るやうで思ひ出せなかつた。

……ちよつと聞きたい松の風。

唄はほろほろと噎（むせ）び泣いて、蕭（しめ）かな相の手になつた。チンチンチンチリ……と、袈裟次は口の中に後を追掛けてゆく間に、嬉しくもヒヨイと声に出て来た。

「チテンツトンシヤン、問へど答へず山ほとゝぎす……。」

「あら。」と、隣室の三味線は止まつた。此方へ耳を澄すらしい。

袈裟次はハツとして頸を疎めた。まさか聞えるとは思はなかつた。真赤になつて、舌を些いとしした。

「お隣室の方でせう、被来（おいで）いな。」

袈裟次は固くなつて動けなかつた。

「ほゝゝ、何うなすつたの。寂くつてゐるんですから被来いよ。」

女客は又三味線を取上げて、忍びやかに唄ひ出した。袈裟次はホツとするやうな気分で、ソロソロと顔を上げた。

——花も雪も、払へば清（すが）き袂かな、ほんに思へば昔のことよ、わが待つ人もわれを待ちけん……。

心悲しげな唄声はホンノリと暮迫る軒に漂うて、顫へながらに澄み冴えてゆく。袈裟次は瞬き初めた夕暮の電燈を見詰めながら、凝と耳を澄ましてゐた。

「あゝ。」と、三味線を投出す音がした。暈にでも突伏したのだらう、女の忍び泣きに獻歎（すすり）あげる声がやがて微かに聞えて来た。

（四）

夕暮の一時、物悲しい物売の声が遠く流れ過ぎると、このゴミゴミした家建の周囲も一刻ひツそりして、遠くの電車の音なぞ聞えて来た。公園には夜の部の人呼び時なのだらう、騒々しい楽隊の音が急に耳立つて来た。女は何日までも泣續けて、夜の来るのも知らぬ態だつた。

小娘は塗膳に夕飯なぞ搬んで来たが、今日の袈裟次は見向きもしなかった。

尾根代（やねだい）※を払った心細い小銭の中から幾らか出して、小さな声で例のものをと小娘に頼んだ。油のキラキラ浮いた餛飩二杯、これが袈裟次が東京へ着いてから日に二度づゝの糧であつた。

窃つと食殻（くひがら）を廊下の片隅に置いて来た頃には、袈裟次が幾らか肚に暖昧を覚えて、隣室の女客はムツクリ起きて、迷惑がる番頭を捉へて又酒なのだ。番頭を呼んだ。女の酒は少し興（たか）んでゐた。

明日こそ何うしても身を決めなければならない、紳士に恵まれた銀貨は明日一日を凌ぐにも足りなかつた。袈裟次は両手を突込めて薄寒さうに壁に凭れた。

「馬鹿にしつこなし。これでも芸妓だよ。」隣室の女客は仇（あだ）やかに笑つた。

「出る場所かい。そいつは云はれないねえ。兎に角、東京中の内さ、これでもね。」

「何うも然うだらうと思ひました、御様子で。」

「嘘をお吐き、お酒も満足に宛行はない癖にして。」

「然うぢやありませんが、先刻は些いと驚きましたよ。ポンと投出されたお財布の中が、何しろあの額でせう。手前どものお客様にはちと纏まり過ぎてゐますからね。」

「纏まつてもゐる筈さ。一つしかない身体を売つたお金だもの。」と、女客はゆつたり笑つてゐた。

「へえ？」

「ねえ番頭さん、何うせこんなやくざな身体だもの、粗末にでもして見る外にお慰みはないやね。それには自分の身体をお酒にして、それを綺麗に自分で飲んでしまつたら、さぞさぞして好い心持だらうと思つたのよ。御覧この通りさ、身代金をシツカリとお腹につけて、……※ほゝゝ、何う、一つ頂かうよ。」「いゝえ、不可ません、差上げるんですよ。」

「へえ。でもそんなに召上つては第一お身体に……。」

「毒だツてえの。お止しよ。食養生までして生きてゐたい娑婆でもないぢやないか。何処まで行つても同じ並木路さ。」

「然うですかねえ、貴女方でもそんな事お考へになりますかね。」

「でも女は駄目だ、威張つて見ても為ようがないねえ……頂かう。口惜しいねえ、高がこれンばかりのお金だが、さア飲まうとなると嵩があつて、些時（ちよつと）やそつとに埒（はか）が行きさうもないのだよ。」

「へゝゝ、でもそれだけ行けりや貴女、沢山で御在ますよ。」

「番頭さん何処か行かう。飲まうよ。」

裾前でも掻合せのだらう、空解（そらとけ）の伊達巻が女のしなやかな手に纏つてキュウと鼠啼いた。女客は勢好く撥（はね）起きた。「何うしたの、番頭さん、行かうよ。」

「お供するのは好うがすが、何処へゐらしツても同じ事ですよ。」

「それも然うだね。明るいところで人の顔を見たつて為方がないかね……。」と、女の声は急に萎れた。「番頭さん、酒。酒。ヒリゝとする位熱くしておくれ。」

「へえ、では直ぐ持たせて寄来（よこ）します。」

番頭がアタフタ出て行つた後で、女はベツタリと畳に顔（くず）折れた。

「あゝ、今夜も一人で酔ふんだねえ。」

それ限り暫く音もなかつた。

袈裟次は妙に胸が重苦しくなつて、窃つと高窓の方へ立つた。そこから眺めると、電車通を越した公園の方は焰の海だつた。世間の騷擾は急に波音のやうに、今までシインとした袈裟次の耳を襲うて来た。

板木屋はテカテカと顔を光らして銭湯から歸つて来た。

「袈裟次さん、活動が遅くなるぜ。」と、もう名なぞ覚えてゐた。

「然う……」

「惚れてるんだつてえばな。袈裟さん。」

板木屋は目をオドオドさせながら、手なぞ打振った。袈裟次はその惚けた顔の何処かゞ淀爺に似通つてるやうで、クスリと笑った。クスクスと笑出した。板木屋は窃つと擱へた手を放して、蒸気が立つほど汗になつてゐた。……※

袈裟次は笑つて相手にならなかつた。男に恥をかゝせたの、後の祟りを見ろのと憤（むく）さうな事を云ひながら、コソコソと降りて行つた。直ぐ宿の上さんが代つて来て、あゝ云ふ無頼漢を怒らしては後が面倒だとか云つてゐたが、袈裟次は上の空に遇つてゐた。何んと云はれても、あれを恐ろしい者には思はれなかつた。

（五）

翌日、袈裟次は平気で宿を出た。板木屋も上さんも見てゐて止めもしなかつた。何か密々（ひそひそ）謀し合せて、例の小娘に後を跟けさせたが、それも平気でゐた。

三軒廻つた周旋屋が三軒とも、皆何かの都合で二日程づゝ話が延びてゐた。為方なければ拭掃除の女でも水仕でもと頼んで見たが、何処でも笑つて相手にならなかつた。上總屋へ歸つて遠慮せずに待つてゐれば、明日の昼とか晩までには此方から話を決めて行くと云ふ、皆申合せたやうな返辞であつた。

……※それを払へば懷に残つた銀貨はやつと二日の宿泊代だけだつた。袈裟次はがっかりして周旋屋を出た。その間、飲むも食ふもならなかつた。

快晴に秋の日を浴ぶ人達は、和服を軽さうに街を往来してゐた。袈裟次はその人音をたゞガヤガヤと耳に煩くぼんやり聞きながら、町から町へとたゞ歩いた。その途中一二軒、西洋料理屋と玉突場とに**女給仕入用の貼札**を見附けて、そこの勝手口にも立つてみたが、何の家でも初め喜んで出迎へたが、後に立つお松の相図を見てソコソコに話を切つて相手にならなかつた。**お松は地廻りの親分の木札を袖口に忍ばせてゐたのだ。**

袈裟次は又次の町へ歩き出した。人通りの賑かな町に来て偶と気が附くと、皆下駄を軽さうに歩いてゐる中に、重さうにズリズリと後齒を地面に引掛けて歩くのは自分ばかりであつた。他は皆今日を欣（よろこ）び今日の晴日を歡び、活々と急しく往来する中に、**見窄らしい肩を落してぼんやりと頂垂れながら道傍を行く、田舎娘の自分が、そこに見られるやうな気がして颯と赤くなつた。**

自分の活きる道は自分で探して見せると気を引立てゝ歩き出しても、何か又重さうな後齒の音が土に引摺られて、トホンとしてゐる自分を見た。お松は草臥（くたびれ）凌ぎに、隣室の女客の噂なぞを小癪らしく為かけるのだが、好い加減に聞いてゐた。

何時か道は尽きて、袈裟次は**大きな河**の辺に来てゐた。紺を溶したやうな大河の水面を、帆を張つた船が緩やかに流れた。袈裟次は何がなし胸廓が躍るや

うに覚えたのは、懐しい潮の香が思ひ掛けずその鼻に来たゝめであつた。それだけに又、故郷の遠さも思はれた。

袈裟次が凝つと水面を見詰めてゐる間も、お松は息をはずませて隣の女を羨しがつた。女はもと華族の若主人の恋人で、望めば今にもその奥様になれるのを、好きから芸妓に身を売つて、その金の使端に困つてあゝして酒を飲み廻つてゐるのだと云つた。

「華族？」

袈裟次は聞くともなく聞いた。

袈裟次が出京の第一の目的、築港の念願を達する迄には、或る華族を一人是非動かす必要があつた。それは彼等の旧領主であつた。その旧領主に近附くには、立派に自分の身を立てなければならなかつた。

「えゝ華族様よ、子爵なんですつて。でもね、その名だけは云はれないんですつて。」とお松は急しく唾を嚥んで、「その若様が大学生とかの時に、あの人と関係があつたんですつてよ。御洋行したんですつて、その間にあの人、若様の子を産んだんですつて。」

「然う。」と、袈裟次は明日から活きる自分を考へてゐた。

「ねえ、お腹にあつて〔知〕らないと云つたのよ。」とお松は高慢ちきに語調を変へて、「見すみず華族の奥様を取外し芸妓になるなんて、そんな馬鹿な

話はないつて云つたのよ。第一その生れた小児衆のためにもねえ、芸妓の子と云はれちや一生肩身が狭いわねえ。ちよいと然うぢやない。」

「然うねえ……だけどそんな筈はないと思ふわ。」

「あゝして遁げて廻つてるんですつて、華族さんの方ぢやねえ、一生懸命探してゐるんですとさ。可笑しいわねえ。」

袈裟次は静かにそこを歩き出した。何う考へても明日の晩まで、周旋屋の返事を宿に待つより外はなかつた。

(第五章 了)

現代語版

合宿

(※冒頭は第四章の続き)

「行かない……行くものか」

「行く」

「行かない」

両方から顔を突き出して、獣のように歯を剥き出して睨み合っていた。

誠也はまた明るい日向をじっと見つめて、腕を固く組んだ。「こらえる……
僕はこらえます」

—

「何だい、飲ませないってえの。大きなお世話さ、私のお腹だよ。余計も沢山も、お前さんに寸法をあてて頂くはずは……ございません」

「ですけど、今朝からでもだいぶ召し上がってますから……」

「ちょっと、お払いの心配なの。厭だねえ……そおら鯨船が着いた」——投げ出したのは財布だろう、どんと畳に響いた。

「何だ、そこに持っていたの……馬鹿にしないよ」

「へへへ、仕方ありませんな。じゃあ、これ一本にして一寝入りなさい。何かお腹の足しになるものを召し上がらないと、体に毒ですよ」

「ついでに三味線を貸してくださいよ。ああ、どんなのでもいいよ」

隣室の女客は起き抜けから酒を始めて、番頭を相手にひとりで調子づいていた。昨夜、夜更けに公園の酒場とやらから担ぎ込まれてきたのを、袈裟次はぼんやり寝耳に聞いていた。

八畳の真ん中に襖を入れ、細長く二部屋に仕切って、震える十燭の電球が両方に光を投げている。これでも三階は別間で風呂付きだよと、あの若い男は傲慢そうに案内した。自分で下へ行って、奈良火鉢に薪を山と持ってきたりした。

その若い男は長次とも、板木屋（ばんぎや）とも呼ばれていた。袈裟次を初めて連れ込んだとき、痘痕（あばた）のおかみと何かひそひそ話す様子で自分のことだとすぐ気がついたが、袈裟次はそれよりも、ゆっくり畳の上に体を投げたかった。こんな者たちに好いようにされる自分とは思われなかった。小説でも芝居でも、悪い者はもう少し締めりがあった。悪ぶるのが可笑しく見えるほどだった。

袈裟次は夢さえ見ずに、その晩はぐっすり眠った。目が覚めると雨だった。高い窓に凭れて、どうかしなければならぬ、どうする、と同じ問いに気を苛

立てながらも、一日雨を眺めて暮してしまった。昨日の汽車の響きが耳の底に残って、体はまだ揺れているようだった。

そのあいだも板木屋は何度も上がってきて馴々しく話しかけるのだが、袈裟次はただ煩わしく、汚らわしかった。黙ってじっと見つめていると、板木屋は可笑しいほどしなびて、こそこそと降りて行った。それでも自分の部屋をすぐ下の階段の傍へ移したのは、そこから絶え間なく袈裟次の動静をうかがっているらしかった。

翌日も雨が続いた。食べたものを宿へ払うと、大きな銀貨が二枚しか手に残らなかった。これだけが自分の持つすべてだと思えば、袈裟次はじっとしていられなかった。とにかく、何かにぶつかって活きる道を見つけなければならない。洋傘を借りて表へ出ようとする、おかみと何か相談して、その小娘を案内に立ててくれた。

彼岸の雨がびしゃびしゃと降りしみる細い小路を、辿ったり曲がったりして、袈裟次は小娘の案内するまま、五六軒の**周旋屋**の暖簾をくぐった。ただ漠然と食べられる口とも言えないから、新聞で見ていた**電話交換手**、**女店員**、**活動写真の案内係**のような仕事から、ついには心細くなって、体で人に使われる**小間使い**の口まで頼んでみた。どこであれ身が定まれば、そこからまた、かねて志していたほうへの道が開けようと思ったのである。

周旋屋の答えは判で捺したよう、どこでも同じだった。ちょうど求めるような口が、あるにはある。しかもみな思った以上に幸運な、飛びつくような口だが、何かしらの都合でどれも三日ほどの間があった。話が決まるにはどうせ保証人も要るのだから、それまで上總屋で返事を待てというのだった。上總屋とは泊まっている宿の名だ。

「でも私……そんなにゆっくりした身じゃないんですもの」

最後の家では心弱くなって、袈裟次は雨に暮れていく貧乏町を見つめ、店の柱に字を書きながら頼んでみた。

「ああ、そのご心配ですか。それなら大丈夫ですから、上總屋さんに威張っていなさるがいい。給金の前借りで払いをすれば同じことでさ。給金は二か月でも三か月でも、私の力で借りてあげますよ」

でっぷり肥った亭主は事もなげに笑って、傍に立っている小娘に何か目で合図でもするらしかった。

「でも……そんな勝手に願えますか」

「大丈夫、私が受け合った。お松ちゃん、家へ帰ったらな、このお客さんは私のほうで引き受けたとよく言うんだぜ」

「ああ、そう言うよ」小娘はずるそうに隠し笑いをしていた。

袈裟次は夕暮の町を、肌寒そうに宿へ帰ってきた。電車通りへ出るところで、大きな彪犬（むくいぬ）の首っ玉へ荒縄を結びつけて、雨のなかをどんどん駆けてくる小僧があった。上野で銀貨を棄てたあの小僧だった。袈裟次のほうでは気がつかないが、小僧は犬に引き擦られて走って行った。

板木屋は宿の洗い物に片襷などかけて、袈裟次にご馳走するのだと言って、北海鰯のべとべとした鱗を剥いていた。隣室の女客が担ぎ込まれたのは、その夜だった。

二

板木屋は酒など買ってきて、生臭い肴に箸をせせりながら、その晩遅くまで傍を動かなかった。これまで自分の手にかかって田舎の酌婦などに売られていった女たちの経緯を喋り立てて、袈裟次を怖がらせようとした。初めはみな死ぬの生きるのと毛を逆立てるけれど、何と言っても女は弱い、終いには女のほうから焦ってきて振り放されまいと齧りつくなどと、冗談のふりをして袈裟次の手を握ったりした。袈裟次は黙って、顔は真っ青に癪を立てていた。いつでも睨みつけた。

「こりゃいけねえ。まだ野の鳥で籠慣れねえから世話が焼ける。」板木屋は照れ隠しにやにや笑っていた。

隣の部屋から三味線の音が聞こえてきた。酒にも飽きて取り上げたのだろう、もの憂い爪弾きの音が、春の雨のように静かに流れてくる。

袈裟次は腋開きに両手を突っ込んで、火のない奈良火鉢をつくねんと眺めていたが、頭のなかは旋風だった。

「それは何の様だ。今日、潔白そうなことを言っても、やはり私の掌の下よりほかにお前の家はあるまい」と嘲りかかる皮肉な父の笑い声が耳に聞こえたり、自分の無謀を危ぶんでいた若い紳士の顔が目に見えたりした。その紳士に恵まれた金で三日の命を凌いだのは——人の慈悲を受けるのは死ぬよりの恥と教えられてきた袈裟次には、その一事だけでも、もう父の前に顔を向けられないような気がした。

「いいえ、私はひとりで活きます。生きて見せます。」袈裟次はまた呟いて、遠くの父へ誓いを送りながら立ち上がった。

たとえ三日でも、宿屋の恩恵を受けてのんびんだらりと待つてはいられない。もう一度周旋屋へ頼んでみて、水仕事の奉公でも自分の力で活きたかった。そう思うと一刻もじっとしていられなかった。上がり口で履物を探していると、痘痕のおかみが剣幕を変えて飛んできた。雨はきれいに上がっていた。

「ちょいとお前さん、どこへ出掛けるのだよ」

「どこへって……昨日の周旋屋へ行ってくるのよ」

「今日はお松も使いに出ていないし、出るならあれが帰ってからにしておくれ」

「道は昨日で知っていますから、ひとりでも行けるのよ」

「いけないよ、長次さんも留守なのに、お前さんひとり出されるものか。洋傘もこっちへ預かっておくよ」

「でも、用があるんですよ」

「いけないよ。ひとりで出せるものかね、何を寝惚けてるんだ」

おかみは奪い取るように洋傘と履物を取り上げ、さっさと台所へ持って行った。

袈裟次はいつの間にか、外出を禁じられていたのだ。逃げ場のない三階に部屋を取ったのも、昨日小娘を随けて出したのも、みなそのための用意だったと気がついたが、こんな者たちと争う気にはなれなかった。

「御覧、とうとう監禁だ」

袈裟次は自分を嘲笑うような調子で呟きながら、ぐらぐらする階段を自分の部屋へ戻ってきた。場面が小説がかって変化していくのが、何だか面白いような気がしたのだ。

通りすがりに隣の部屋を覗くと、若い女客が柱にぐったり凭れて三味線を執っていた。右手の親指に寝衣の袖口を巻きながら、調子を張って山姥の山めぐりの前弾きを弾いているのは、どうせ待ち人でもかけたのだろう。襟足のすうと通った柔らかな肩つきが、艶やかに横顔を仄見せていた。

袈裟次は膝からどんと折って、投げるように自分の部屋へ坐った。どうせなるようになるのだ、どうともなれと幾らか捨て鉢な気分になって、火鉢ひとつのほか何もない部屋のなかを見回した。三味線はぴたりと止んで、こちらへ聞き耳を立てる様子だったが、またやがて静かに音色を漂わせた。

板木屋が汗を拭きながら、慌てて入ってきた。

「お前さん、何だってまた、ひとりで出掛ける気になんぞなったんだ」——突っ立って口を尖らせた。

「ひとりで出ちゃ悪いの」

「悪いいいじゃねえぜ。出られちゃ俺らが困るんだ。お前さんはもう、ちゃんと親分のところへ抵当に入ってるんだぜ。」

「抵当？」

「お前さんの身体を書き入れて、俺は親分から二十両って金を借りてるんだ。むやみに出歩かれてたまるかい」——板木屋は得意そうに小鼻を蠢かした。

三

「私の身体がお金になってるの」袈裟次も顔色が変わった。

「ちょっと苦しかったもんだから、一時の融通だな。金ができりゃすぐ請け戻すんだよ」板木屋は懐から手を出して、得意そうに顎を撫でていた。「へへへ、悪い奴に見込まれて、お前さんも災難ってもんだよ」

袈裟次は膝を掻き合わせた。

「しかしその話は別として、俺はお前さんだけには最初から、職業を離れて付き合ってるつもりなんだぜ。本当だよ、おい」——にたにた寄ってきた。

「だから、どうするのよ」袈裟次はきっと肘を向けて待ち構えた。

「どうするってこともねえが……俺らだって友達に幅が利かねえじゃねえか。現に下のおかみにも俺は笑われてるんだぜ」

「何を笑われるんです」

「何をとって……まあいいや、その話はどうせ後だ。ひと風呂浴びてこよう。晩には活動へでも行こうね、お揃いで」

「じゃあ、どうしても私を外へ出さないんですか」

「少し相手が悪かったよ。へへへ、まあ辛抱するのだね」

「勝手にするさ」

袈裟次は懷手をして壁に凭れかかった。ひとりで悪ぶっている愚劣さを見ると、口をきくのも面倒になった。どうにでもできるならしてみろという気だった。板木屋はひとりでにやにやしながら出て行った。

隣室の三味線は、いつか地唄がかったものになっていた。やる瀬なげに、その細くしんみりした絃の音色は、震え掠れて、春の淡雪がじわりと庭石に溶けていくように、聞く人の心の底までそよかに染み入ってきた。

袈裟次は聞くともなく聞いているうちに、訳もなく心がしんと涙ぐましくなって、遠い子どもの頃のことなどが妙に思い出されてきた。足を裾に包んで、畳にころりと肘枕をして、目の底からじっと聞き縮めていた。

御殿奉公をしたという、清原の誠也の祖母さんは、なかでもその地唄が好きで、青柳の枝垂れた離れの縁に三味線を持ち出して、洪のある声を聞かせたものだった。どういうものか**自分の孫より袈裟次を可愛がって**、二つ三つ昔唄の手解きをしてくれたこともあった。

——浮草は、思案の外の誘う水、浮世が恋か……恋が浮世か。

よく聞くと三味線ばかりではなかった。秋の水のように澄んだ寂しい声が、細々と冴えた絃の音に漂わされていた。

「あ、知ってる……」と袈裟次は頭を上げたけれど、それは古い夢を辿るようで思い出せなかった。

……ちょっと聞きたい松の風。

唄はほろほろとむせび泣いて、静かな合いの手になった。チンチンチンチリ……と袈裟次が口のなかで後を追いかけていくうちに、嬉しくもひょいと声に出てきた。

「チテンツトンシャン、問えど答えず山ほととぎす……」

「あら」と、隣室の三味線が止まった。こちらへ耳を澄ますらしい。

袈裟次ははっとして首を竦めた。まさか聞こえるとは思わなかった。真っ赤になって、舌を少し出した。

「お隣のお方でしょう、おいでいな」

袈裟次は固くなって動けなかった。

「ほほほ、どうなさったの。寂しくているんですから、おいでいよ」

女客はまた三味線を取り上げて、忍びやかに唄い出した。袈裟次はほっとするような気分で、そろそろと顔を上げた。

——花も雪も、払えば清（すが）き袂かな、ほんに思えば昔のことよ、**わが待つ人もわれを待ちけん……**。

心悲しげな唄声はほんのり暮れ迫る軒に漂って、震えながらに澄み冴えていく。袈裟次は瞬き始めた夕暮の電燈を見つめながら、じっと耳を澄ましていた。

「ああ」と、三味線を投げ出す音がした。暈に突っ伏したのだろう、**女のむせび泣く声**が、やがて微かに聞こえてきた。

四

夕暮のひとつき、物悲しい物売りの声が遠く流れ過ぎると、このごみごみした家並みのまわりもふっと静まって、遠くの電車の音が聞こえてくる。公園で

は夜の部の客寄せ時なのだろう、騒々しい楽隊の音が急に耳立ってきた。女はいつまでも泣き続けて、夜の来るのも知らない様子だった。

小娘が塗り膳に夕飯を運んできたが、今日の袈裟次は見向きもしなかった。屋根代を払った心細い小銭のなかから幾らか出して、小さな声で例のものを、と小娘に頼んだ。油のきらきら浮いた鰻飩二杯、これが袈裟次が東京へ着いてから、日に二度ずつの糧だった。

そっと食べ殻を廊下の片隅に置いてきた頃には、袈裟次はいくらか腹に温かさを覚え、隣室の女客はむっくり起きて、迷惑がる番頭を捉えてまた酒なのだ。女の酒は少し高ぶっていた。

明日こそ、どうしても身を決めなければならない。紳士に恵まれた銀貨は、明日一日を凌ぐにも足りなかった。袈裟次は両手を突っ込んで、薄寒そうに壁に凭れた。

「馬鹿にしっこなし。これでも芸妓だよ」隣室の女客はあだやかに笑った。

「出る場所かい。そいつは言われぬねえ。とにかく、東京中のうちさ、これでもね」

「どうもそうだろうと思いました、ご様子で」

「嘘をお吐き、お酒もろくに宛てがわぬ癖にして」

「そうじゃありませんが、さっきは少し驚きましたよ。ぽんと投げ出されたお財布の中が、何しろあの額でしょう。手前どものお客様には、ちと纏まり過ぎていますからね」

「纏まってもいるはずさ。一つしかない身体を売ったお金だもの。」女客はゆったり笑っていた。

「へえ？」

「ねえ番頭さん、どうせこんなやくざな身体だもの、粗末にでもしてみるほかにお慰みはないやね。それには自分の身体をお酒にして、それをきれいに自分で飲んでしまったら、どんなにさっぱりして好い心持ちだろうと思ったのよ。御覧このとおりさ。ほほほ、どう、ひとつ頂こうよ」「いいえ、いけません、差し上げるんですよ」

「へえ。でもそんなに召し上がっては、第一お身体に……」

「毒だってえの。お止しよ。食養生までして生きていたい娑婆でもないじゃないか。どこまで行っても同じ並木道さ。」

「そうですかねえ、貴女方でもそんなことをお考えになりますかね」

「でも女は駄目だ、威張ってみても仕方がないねえ……頂こう。口惜しいねえ、たかがこれっばかりのお金だが、さあ飲もうとなるとかさがあって、ちょっとやそつとに拂が行きそうもないのだよ」

「へへへ、でもそれだけ行けりゃ貴女、沢山でございますよ」

「番頭さん、どこか行こう。飲もうよ」

裾前でも掻き合わせるのだろう、緩く結んだ伊達巻が女のしなやかな手に絡んで、きゅうと鳴った。女客は勢いよく跳ね起きた。「どうしたの、番頭さん、行こうよ」

「お供するのは結構ですが、どこへいらしても同じことですよ」

「それもそうだね。明るいところで人の顔を見たって仕方がないかね……」

と、女の声は急に萎れた。「番頭さん、酒。酒。ひりりとするくらい熱くしておくれ」

「へえ、ではすぐ持たせて寄越します」

番頭があたふた出て行ったあと、女はべったりと畳に崩れ折れた。

「ああ、今夜もひとりで酔うんだねえ」

それきり、しばらく音もなかった。

袈裟次は妙に胸が重苦しくなって、そっと高窓のほうへ立った。そこから眺めると、電車通りを越した公園のほうは焰の海だった。世間の騒擾が急に波音のように、それまでしんとしていた袈裟次の耳を襲ってきた。

板木屋がてかてかと顔を光らせて銭湯から帰ってきた。

「袈裟次さん、活動が遅くなるぜ」と、もう名前を覚えていた。

「そう……」

「惚れてるんだってえばな。袈裟さん。」

板木屋は目をおどおどさせながら、手を打ち振った。袈裟次は、その惚けた顔のどこかが淀爺に似通っているようで、くすりと笑った。くすくすと笑い出した。板木屋はそっと掴んだ手を放して、蒸気が立つほど汗になっていた。

袈裟次は笑って相手にならなかった。男に恥をかかせたの、後の祟りを見ろのと、憤りの言葉を並べながら、こそこそと降りて行った。すぐ宿のおかみが代わりに来て、ああいう無頼漢を怒らせては後が面倒だとか言っていたが、袈裟次は上の空で聞いていた。何と言われても、あれを恐ろしい者とは思われなかった。

五

翌日、袈裟次は平気で宿を出た。板木屋もおかみも、見ていて止めもしなかった。何かひそひそ謀り合わせて、例の小娘に後をつけさせたが、それも平気でいた。

三軒回った周旋屋が三軒とも、みな何かの都合で二日ほどずつ話が延びていた。仕方なければ拭き掃除の女でも水仕事でもと頼んでみたが、どこでも笑って相手にならなかった。上總屋へ帰って遠慮せずに待っていれば、明日の昼とか晩までにはこちらから話を決めて行くという、みな申し合わせたような返事だった。

それを払えば、懷に残った銀貨はやっと二日の宿代だけ。袈裟次はがっかりして周旋屋を出た。そのあいだ、飲むも食うもなかった。

快晴に秋の日を浴びる人たちは、和服を軽そうに街を往来していた。袈裟次はその人音をただがやがやと耳に煩わしく、ぼんやり聞きながら、町から町へとただ歩いた。その途中、一二軒、西洋料理屋と玉突場に**女給仕入用の貼り札**を見つけて、その勝手口にも立ってみたが、どの家でも初めは喜んで出迎えたのが、後に立つお松の合図を見てそこそこに話を切って相手にならなかった。

お松は地回りの親分の木札を袖口に忍ばせていたのだ。

袈裟次はまた次の町へ歩き出した。人通りの賑やかな町に来てふと気がつく
と、みな下駄を軽そうに歩いているなかで、重そうにずりずりと後齒を地面に引っかけて歩くのは自分ばかりだった。ほかはみな今日を悦び、今日の晴れた日を歎び、生き活きと忙しく往来しているなかに、**見窄らしい肩を落してぼんやりうなだれながら道端を行く田舎娘の自分が、そこに見られるような気がして、さっと赤くなった。**

自分の活きる道は自分で探して見せると気を引き立てて歩き出しても、また重そうな後齒の音が土に引き擦られて、ぼかんとしている自分がいた。お松は疲れ凌ぎに、隣室の女客の噂などを小癪らしく仕掛けてくるのだが、好い加減に聞いていた。

いつか道は尽きて、袈裟次は大きな川の辺に来ていた。紺を溶かしたような大河の水面を、帆を張った船が緩やかに流れる。袈裟次は何とはなしに胸が躍るように覚えた——懐かしい潮の香が、思いがけずその鼻に來たためだった。それだけにまた、故郷の遠さも思われた。

袈裟次がじっと水面を見つめているあいだも、お松は息をはずませて隣の女を羨ましがった。女はもと華族の若主人の恋人で、望めば今にもその奥様になれるのを、自分から芸妓に身を売って、その金の使い端に困ってああして酒を飲み回っているのだと言った。

「華族？」

袈裟次は聞くともなく聞いた。

袈裟次が上京した第一の目的、築港の念願を達するまでには、ある華族をひとり、どうしても動かす必要があった。それは彼らの旧領主だった。その旧領主に近づくには、立派に自分の身を立てなければならなかった。

「ええ華族様よ、子爵なんですって。でもね、その名前だけは言われないんですって」お松は慌ただしく唾を嚥んで、「その若様が大学生とかの時に、あの人と関係があったんですってよ。ご洋行したんですって、そのあいだにあの人、若様の子を産んだんですって。」

「そう」——袈裟次は明日から活きる自分を考えていた。

「ねえ、お腹にあって知らないと言ったのよ」お松は高慢ちきに語調を変えて、「見す見す華族の奥様を取り外して芸妓になるなんて、そんな馬鹿な話はないって言ったのよ。第一、その生まれた子のためにもねえ、芸妓の子と言われちゃ一生肩身が狭いわねえ。ちょっと、そうじゃない」

「そうねえ……だけど、そんなはずはないと思うわ」

「ああして逃げて回っているんですって、華族さんのほうじゃねえ、一生懸命探しているんですとさ。可笑しいわねえ」

袈裟次は静かにそこを歩き出した。どう考えても明日の晩まで、周旋屋の返事を宿で待つよりほかはなかった。

(第五章 了)

作業メモ

・底本コマ対応：冒頭（第四章の続き）＝コマ 42 前半／（一）＝コマ 42～43／

（二）＝コマ 44～45／（三）＝コマ 45～46／（四）＝コマ 46～48／（五）＝コマ 49～50 前半

・新登場：長次（通称・板木屋）／薄痘の上さん／小娘のお松／上總屋（宿）／番頭／隣室の女客（＝子爵の昔の恋人）／地廻りの親分

・地唄の詞章：「浮草は 思案の外の誘ふ水、浮世が恋か……恋が浮世か」「ちよつと聞きたい松の風」「問へど答へず山ほとゝぎす」「花も雪も、払へば清き袂かな、ほんに思へば昔のことよ、わが待つ人もわれを待ちけん」＝地唄「浮草」ほかの断片とみられる。曲名の特定は要調査

・※の主な箇所：「悪徒がるのが可笑しな」前後／「洋傘を借して表へ出ようとする」と／上野の小僧の一文／「訓へられて来た」前後／「尾根代（屋根代）」／女客「身代金をシツカリとお腹につけて」以下／板木屋が汗になる場面の一文／（五）冒頭の一文

・★次章「玄関」＝コマ 50 後半～63（本文 95～120 頁）。これで第一分冊が完成。

進捗＝5 章／6 章

第六章「玄関」

解題

★1. 袈裟次は殴られ、それでも声を立てなかった

板木屋は「親分に笑はれた」と逆上して袈裟次を打擲する。

袈裟次は棄鉢だつた、死んでも悲鳴は上げまいと思つた。真蒼になつて忾へた。こんな者と、声立てゝまで争ふのは恥しかつた。

袈裟次の凝つと見詰める目は、ホロホロと涙になつた。苦しい涙ではなかつた、口惜しい涙だつた。斯んな恥辱をうけながら、まだ自分の身を決めかねてゐる自分が、齒痒くも醜くも思はれたのだ。

★2. 二人の女が、名前で結ばれる瞬間

隣室の女が襖を開けて入り、袈裟次を労（いたわ）る。「衛るものは死んでもお守んなさいよ」。そして袈裟次が会いたい華族の名を口にする。

「成瀬淳作、子爵よ。」

女が襖の引手にかけた手はガタガタと顫へて來た。「して、成瀬……」気が抜けたやうに暫く袈裟次を見てゐたが、気が附いて襖をハタと閉めた。「もうお寝みなさい。寝てゐて話ませうね。」

女は翌日、袈裟次のために板木屋に金を出して助け、そして頼む。

「お前さん……駿河台へ行くんだね。」「え。」「成瀬さん……とか云ふお方にお目にかゝるんだね。」「え。」

「何んな、何んな御様子か好く見て来て……私に聞かせて下さらない。」

★3. 袈裟次の企ての全体像（第四節）

・子爵は華族／旧領主／地位・金力・地方の名望／最新の工学を修めた人。「若し子爵を動かす者があつて、子爵が真面目に築港を主唱したら、その向うに立つて反対し得る者は村方は勿論、郡にも県にも一人だつて無い筈である」。剛情な父勝衛も、旧領主の子爵の前には縮みになるだらう。

・「必ず年来の熱望を実現して野蒜を港にする人は、この人でなければならぬと、子爵が帰朝の記事を読むと同時に固く信仰した」＝この夏の新聞記事が家出の引き金だった。

・「狂ひ咲でも自分を大きく咲かせたい」と妹に書き残したのも、詰りは子爵に会ふ機会をつくるためだった。二年三年かけて咲き乱れた自分を子爵の前に立たせる積りが、東京の五日で脆く顔（くず）れた。「然うだ、当つて碎けるのだ。」

★4. そして玄関で追い返される

駿河台。城郭のような鉄柵の表門、クリーム色の西洋館。門内には婚礼の釣台（長持）の行列が練り込み、長持唄が響く。

『目出度目出度の若松様よ。枝も榮えて葉も茂る』※

袈裟次は書生に押し出される。「御前はお不在だ。早く出て行つてくれ」。額から血が出ていた――板木屋に硝子窓へ引き倒されたときの傷。

★5. 上野の小僧が、五十銭を返しに来ていた

「さア、返す。お前の錢だ。」――彼はあの日拾ってしまった銀貨を、錢を溜めて銀貨にして、ずっと探していた。「先生へ話したら乞食の真似したツて、俺ア、うんとガミつかれたんだ」。小僧は秋葉駅と浅草駅で石炭拾いをしている。犬のタツチとお堂の下で寝る。「先生」は家もなく東京中を酔って歩き、子供が好きで大勢連れている人。

★6. 婚約者・周子が登場する

帰りかける袈裟次の前に自動車が停まる。窓には子爵と、富松伯爵家の長女・周子（しゅうこ）。子爵より二つ年上。かつて堂上家某侯と縁付くはずが、相手の放蕩で破談になっていた。

袈裟次は逃げ、電信柱にぶつかる。周子は運転手に追わせようとし、それを小僧が止める。「逢ひたくねえから遁げたんだアな。追懸けるのは殺生だ。見ねえふりするのが人情だぜ。」

子爵は小僧から宿を聞き出す。「公園の傍で上總屋だよ。木賃宿だ。」

「木賃宿！」と、微かな嘲笑が周子の唇に上った。車内にパツと時ならぬ金雀枝（えにしだ）の香の漂うたのは、目の前に穢い安宿の悪臭でも払ひ退けるやうに、周子が手にしたハンカチを鼻の前に打振つたのである。

※子爵の名について（重要な訂正）

本章に「成瀬淳作、子爵よ」「周子は淳作より二つの年上」と二度出る。第三章（コマ 25）は「淳三」と読めるが、本章の二例と第一章の目視から、正しくは「淳作」と判断する。第三章の該当箇所は原本の誤植またはさらなる要確認事項として残す。→ 第一章・第三章の記述を「淳作」に統一した。

翻刻（原文どおり）

玄関

（一）

「俺もお前ぐらゐ自由に出来ねえぢや、売込んだ顔が廃る。さ、声を立てろ。声を立てねえか。」

板木屋は周囲に気を配りながら、小声にヂリヂリ寄つて来た。

袈裟次は黙つて、相手の眸を狙つて見詰めた。こんな者に脅せば驚く女と見られるのが心外なのだつた。

「畜生！ 睨めやがる。その手に驚く俺ぢやねえ。うぬ等にそんな愚弄（からかふ）た真似をされちやあ、明日から公園へ面が曝せねえんだ。」

袈裟次は下顎から蒼くなつた。

「おい、何故黙つてる。今日は俺等覚悟して来たんだ。声を立てねえか。」

板木屋は握つた手元をグイと引手繰つた。前に倒（つぶ）りさうになつても、袈裟次は見詰めた目鞘を弛めなかつた。

「畜生！ まだ睨みやがるな。睨めば何うしたんだ、何うしたんでえ。」と、板木屋は何うかすると逃げさうになる視線を、やつと踏怵へて、「俺はお前のために恥を掻いたんだ。親分にまで笑はれたんだ。何故黙つてる、おい、声を

立てねえか。泣いても騒いでも今日は手綱をゆるべやしねえ。」と、ウロウロ声になつて、「俺ア親分に笑はれたんだ。笑はれたんでえ、畜生！」

「いけ拗強い。まだ睨めてやがる。畜生！」と、もう見境なくなつた板木屋は、平手で強かに袈裟次の横顔を殴つた。

「畜生！」

袈裟次はグイグイ小衝かれながら身動きもしなかつた。袈裟次の口唇は笑ふやうに微かに痙攣つた。顫へる膝の下に落散つた木櫛がポキと二つに折れて、ポキポキと五つ六つに砕ける音がした。

「その面ア何んでえ、声を立てねえか。」

それでも袈裟次は声を立てなかつた。板木屋は袈裟次を振倒して夢中になつて打擲した。

袈裟次は棄鉢だつた、死んでも悲鳴は上げまいと思つた。真蒼になつて慄へた。こんな者と、声立てゝまで争ふのは恥しかつた。

「覚えてゐやがれ、今日ばかりが月日ぢやねえんだ。一度掴んだ頸根ツこは放しやしねえぞ。」

板木屋はテレ隠しに故と隣の室に耳なぞ立てゝ、周囲を睨み廻しながら降りて行つた。梯子段のところでホツと息を吐くのが聞えた。

袈裟次の凝つと見詰める目は、ホロホロホロホロと涙になつた。苦しい涙ではなかつた、口惜しい涙だつた。斯んな恥辱をうけながら、まだ自分の身を決めかねてゐる自分が、齒痒くも醜くも思はれたのだ。そんな意気地のない自分なのか、それが口惜しかつた。

「ぢや貴女、本当に処女（きむすめ）さんだつたの。」

「えゝ。」

袈裟次がハツと見上げると、長襦袢一つの隣室の女が、劃りの襖を開けてそこに立つてゐた。目に一杯涙を溜めて、労（いたわ）るやうに袈裟次を見てゐた。

「然うだつたの。」と、女は暗い方を眺めて言葉を切つた。「私はね、何うでこんな所でお目にかゝる人だからと思つたのに……羨しいわねえ。」と、身に染みて云つた。

暖かい薄桃色の絞鹿子（しぼりかのこ）が裾に立波と狂つて、胸に肩に千鳥と飛んだ艶かしい女の襦袢姿は、袈裟次の目に眩しいやうだつた。恥しさうに俯向いて、膝に折れた木櫛を窃つと搔寄せた。

「ねえ、大事になさいよ。衛るものは死んでもお守んなさいよ。誰だつて初めは皆……生娘だけれど、一步踏み違つたら、こればかりは取返しがつきやしませんよ。」

袈裟次は何か考へてゐた。女の顔を見て偶と思ひ附いたのである。

「お酒に酔つて、狂つて見てもはじまりやしません。」

「えゝ……醒める度に弱くなる自分が見えるんですもの。」と、女は片頬に寂しく笑つた。

「そして東京には頼寄る人はないんですか。」

「えゝ。」

「一人も？」

袈裟次は女を見上げた。「ねえ貴女。」と、膝を進めた。

「えゝ、」と言掛けて、女は顚顚（こめかみ）を揉みながら、「あゝ私にも、貴女の年はあつたのに……羨ましいね。」

「貴女。」

女は不審さうに、急に輝かしい袈裟次の目を見返した。

「あの、華族様なんて、誰にでも会つてくれるものでせうか。私是非お目にかゝりたい人があるんですが。」

「華族様？」と、女はボンヤリ見てゐた。

（二）

「ねえ、こんな田舎娘が不意に訪ねて、会つてくれるでせうか。私その方に会ひたいばかりに、田舎の家を遁出して来たやうなものなんです。ねえ、華族様なんて威張つてゐるでせうね。駄目でせうか。」

「さあ、知つてゐる方なんですか。」

「いゝえ、小児の時二三度遊んだばかり、もう忘れてゐるでせう。」

「その方に身の上の相談でもするの。」

「いゝえ。その方には別な用があるのよ。大事な、大事な別な用があるの。本当は私の身がシヤンと立派になつて、それから訪ねてお話す積りだつたんだけど……こんな風にグズグズして、あんな者に馬鹿にされてゐるよりか、早く自分の目的を急いだ方が良いと思つたの。其れも今なのよ。貴女にお目にかゝると直ぐ、ふツと然う思つたのよ。」

「私に会つて、何うして。」と、女は肌寒さうに襦袢の袖を搔合せた。

「あら知つてますよ。」と、袈裟次は羞含んで、櫛の折を亀甲形に並べて見た。「貴女に聞けば華族様のこと判ると思つたの。」

「誰が又……為様がないね。」と、女も曇りなく笑つて、「でも貴女は華族様を訪ねる方だし、私は追懸けられて遁げる方、大變な違ひなのよ。」

「お見様があるんですつてね。」

「あら！」と、女の目は閃いた。「もう、そんな事まで。」

「でも本当なんですか。」

「嘘？ ほゝほゝ。実はこれでも一度は、子爵夫人になるべかりし女なの。驚いた？」

「あら子爵なの。私も子爵だ。私の村の旧御領主なの。」

「……為ようがないね。不自由なく育つた人は暢気なものさ。五年の洋行の間に、他（ひと）の身にどんな変化が起つてるか気が附かないんだもの。貧乏人はたゞ一日をつなぐ糧のためには、一生恢復のつかない事もしなけりやならな
〔い〕 世の中なのに……。」

「五年？ 矢張り洋行なすつたの。」と、袈裟次は娘らしく指なぞ折つて見て、「そして英吉利で工学の勉強して被来（おいで）つたんですつて。工学にも種々あるわね、築港だつて工学の中でせう。きつと然うよ。」

「書散らした五年の反古紙を、もとのやうに為ようたつて……もとの白地になれる位なら……そんな事が出来るもんか。」と、女は唇を吸はれるやうに、凝つと畳の目を見詰めた。

「ほらねえ、ちよいと。」と、袈裟次は声を躍らせて進み出た。「華族様だからお金がある。旧の御領主だから村の人も頭が上らないでせう、それに御自分は工学の勉強なすつたのだから……何う考へたつて出来ない筈ないわ。出来る、出来る、屹度出来る。」と、膝小僧なぞバタバタさしてゐる。

女の目はチラと袈裟次を掠めたが、全て聞いてはゐなかつた。心は遠く彷徨うてゐたのだ。ふんと嘲笑ひながら立上つた。「……恨むなら恨むがいい。何を云つて……みんな夢さ、昔の夢だ。」とスンナリ立つて、裾に振零れるほんのり白い足先を、畳に揃へて珍しさうに眺めてゐる。

「ねえ、立派になつても今の身だつて、云ふ事は同じでせう。後で聞かれるくらゐなら、今だつて聞いて下さるでせう。私馬鹿だ。ねえ、何故そんな事気が附かなかつたらう。だけど……私馬鹿なんですね。」と、小頸を傾げて何か困つてゐる。

女は袈裟次の小児らしい姿に初めて気が附いたやうにニツコリした。「もう寝ませうか。大分深けて来たやうね。」と、自分の室へ戻つて行く。

「だけど……ねえ、ちよいと。」

「えゝ。」

「本当に会つて下さるでせうか。華族様なんて私、まるで知らないから心配だわ。ねえ、駄目でせうか。」心配さうに見上げた。

「華族にもよるでせうが……何んと云ふお方。」

「成瀬淳作、子爵よ。」

女が襖の引手にかけて手はガタガタと顫へて来た。「して、成瀬……」気が抜けたやうに暫く袈裟次を見てゐたが、気が附いて襖をハタと閉めた。

「もうお寝みなさい。寝てゐて話ませうね。」

(三)

何故この名を忘れてゐたらう、と考へながら袈裟次は冷たい蒲団に潜り込んだ。成瀬子爵。東京へ来て今日まで、その大事な名を何うして今日まで思ひ出さ

ずにゐたらう。村や家を棄て、東京へ出たのも、第一はこの人に会ふためではないか。自分が一生の目的たる築港には、この一人を動かすより外に途は啓けないと考へたからではないか。

子爵は華族だ、旧領主だ、地位がある、金力がある、地方の名望がある。その上に子爵は洋行までして、最新の工学を修めた人である。商港地として野蒜村の適当不適當は一目に顯明な筈である。若し子爵を動かす者があつて、子爵が真面目に築港を主唱したら、その向うに立つて反対し得る者は村方は勿論、郡にも県にも一人だつて無い筈である。剛情な父勝衛とても、旧領主の子爵の前には縮みになるだらう。

袈裟次はこの夏新聞で、子爵が帰朝の記事を読むと同時に、必ず年来の熱望を実現して野蒜を港にする人はこの人でなければならぬと、固く信仰した。袈裟次はこの二月の間、夜昼それを考へた。唯その子爵を動かす方法である。見すみす出来る築港を打棄つて置く気が知れないので、それとなく妹や村の誰彼、誠也にも考へを聞いて見たが、今頃そんな夢を見てる者は誰もなかつた。誰も笑つて相手にしなかつた。結局子爵を動かす人は自分の外になかつた。方法とても唯一つ、自分に流れ溢れる至誠を持むより外はなかつた。父勝衛がそれを抑へようとすればする程、袈裟次の空想は焰と燃え上つた。

「ねえ、そして。」と、隣室の女は暫くして声掛けた。妙に濡れた声だつた。

「貴女その子爵と云ふ方を知つてゐるんですか。」

「ですからね私。小児の時二三度遊んだ事があるばかりなんですよ。」と、袈裟次は煩ささうに答へた。大事な考へを破られさうになるからである。

「然う……。」と、女も言葉を断つた。

「狂ひ咲でも自分を大きく咲かせたい。」と、袈裟次が妹に書残したのも、詰りは子爵に会ふ機会をつくるためだつた。二年なり三年なり都会で苦しんだ上に、爛漫と咲乱れた自分を子爵の前に立たせる積りでゐたのだ。然し、その希望は東京の五日に、脆くも頹れさうになつて来た。五日の間に見た東京は余りに鈍く余りに懶く、余りに単調で薄暗くて、こんな中に大事な日を無駄にするのは馬鹿々々しく思はれた。

「ねえ、華族様だつて訪ねて行く者に、会はないツて筈ないでせう。会つてくれますわね。」

袈裟次は又同じ問を心配さうに持つて行つた。

「えゝ。」と、女は生返辞だつた。「でも先にもそれぞれ用があるでせうからね……ですけど今頃は先様も……御婚礼で夢中でせうよ。」

女は気が無さうに云つて、パタリと寝返つた。

「御婚礼？ 成瀬様に御婚礼があるんですか。」

「もう寝ませうよ。」

「ねえ、ちよいと。御婚礼があるんですか。」

「寝ませうね。」女は又寝返つた。

「でもあの……ちよいと本当に御婚礼が……。」

「あら、一番電車が出ましたよ。」

袈裟次はもう眠るにも眠られなかつた。時々洩れる隣の女の溜息を聞きながら、子爵に会つてからの言葉を種々に考へて胸を躍らせた。本当に自分は何故真直に上野へ着くとその儘、子爵家を訪ねやうとしなかつたのだらう。立派な身になつた自分も今の自分も、自分に变りはない筈である。その時に聞かれる事なら、今とて聞かれない筈はない。今の姿だから聞かぬやうな頼もしからぬ子爵ならば、その時に頼んでも望みはない……然うだ、当つて碎けるのだ。

(四)

袈裟次はたゞ子爵に心急いでゐた。板木屋がいくら詫びても頼んでも、せめて借りた金をつくつて親分に返すまで、この宿に辛抱をしてくれと仔細を割つて見ても、袈裟次は返辞する気にもなれなかつた。片手を懷に納つたまゝ、黙つてズイと出やうとする。

「好し、もう頼まねえ。」と、板木屋の目は血が上つてゐた。潜り抜けて出やうとする袈裟次の襟髪を掴んで引戻した。「後悔するな。」

「出るんだよ。」

男の力だ。袈裟次はコロコロと蹣跚（たじろ）いて、懐手の肱が窓の硝子に突当つた。ビンと罅（ひび）割れる音が下まで響いて、細かいものが顔にあたつた。身体の何処かゝヒリゝとするやうだつたが、忪へて起上つた。出ようとした。

「拗強い汚女（きたなめ）だ。」板木屋の目は獣のやうに燃えた。「畜生！」

袈裟次の身体は鞠のやうに投げられた。壁際までふらふらして行つて、ベタリとそこへ腰を突いた。

「それでも出るか。」

「出る。」袈裟次は起上つた。まだ片手は懐のまゝだつた。

「ウゝ」板木屋は齒をガヂガヂして、袈裟次の腰の辺を蹴らうとした。

「出る……出る。」

袈裟次は囁語（うわごと）のやうに云つて、目は一所に据つてゐた。真蒼に顫へながらも、スルスルと出ようとした。

その時、耳の底がキインと鳴つて、気が遠くなるやうな気がした。鴨居がゆらゆらと揺れ落ちると見えたのは、袈裟次が男の暴力に捩倒されてゐたのだ。

板木屋は馬乗になつて、袈裟次を畳に擦り附けてゐた。

「俺も棄鉢だ。さあ声を立てろ、人を呼べ。」

「誰が……」と判然（はつきり）頸を振つて、少し打振うて口唇を微かに痙攣（けいれん）せた。血の気のない袈裟（かさ）次の顔は、相手を嗤（わら）つてやつたつもりなのだつた。

「声を立てろ、声を立てないか。」

袈裟（かさ）次は頸を振つて、板木屋を見詰めるうちに、次第に板木屋の顔がぼう々と遠く小さくなるやうだつた。こゝで気を喪（な）してはと気を張ると、野獣（やじゆう）のやうな男の顔が又近く判然（はつきり）して来た。

「何うする、これでも出るか。」

「出……。」と、袈裟（かさ）次が云掛けた時、不意に男の手が緩（ゆる）められた。誰か入（い）つて来て、傍（かたわ）に立つたやうであつた。

「お前さん、金で済（な）むことなんだらう。違（ちが）ひますか。」と、云ふのは隣室（りんしつ）の女（おんな）の声だつた。

「俺（おれ）ア親分（おやぢ）に顔（か）が合（あ）せられないんだ。」

「だから、私が合（あ）はせられるやうにして上げてよ。こんなに出（い）たいと被仰（おこしやう）（おつしや）るんだから、出（い）して上げたら好（よ）いぢやないの。」

「ですけれども……」

「だからさ、面倒臭（めんどくさ）いね。お金（おかね）で済（な）む事（こと）ならと云（い）つてゐるぢやないか。」

「へえ、そりや何（なん）んです……。」と、板木屋（いたぎや）は汗（あせ）を拭（ぬ）いてペコペコ頭（かぶ）を下げた。「今（いま）ぢやその、金（かね）よりも私（わたし）はその意地（いぢ）でさ、仲間（なかが）にその顔（か）が……」

「あら、まだ悪人振つてゐたいの。お止しよ、それよりはお金とお転びよ。

ほゝほゝ。お前さんの柄だもの。」

「私、お金を出して貰ひませんよ。」と、袈裟次はこのときつぱり云つて起上つた。

「何うして？」

「他（ひと）にお金貰ふのは厭です。私、駿河台まで行つて来るだけなんです。それまで保証になつて出してだけ下さい。」と、袈裟次はふらふらして立上つた。

「お前さんも又……。 」と、女は凝つと袈裟次を見詰めてゐたが、つと寄つて来て袈裟次の手を執つた。「お前さん……駿河台へ行くんだね。」

「えゝ。」

「成瀬さん……とか云ふお方にお目にかゝるんだね。」

「えゝ。」

袈裟次を見詰める女の目に涙がメクメクと湧上つて来た。「何んな、何んな御様子か好く見て来て……私に聞かせて下さらない。」

と、耐らなさうに下唇を嚙んで、女はクルリと窓の方へ立離れた。袈裟次はバサバサと裾を邪魔さうに、その室を出た。

(五)

何んでもこの電車路の通り行けと指へられた、その**万世橋**と云ふらしい可也大きな橋詰に出るまでは、袈裟次はそれが午前なのか午後なのか、恍乎（こつこ）として判らなかつた。橋際に辿り着いた時には、日射を仰いで見ても方角が知れなかつた。銀のやうに光る電車線路ばかり一心に見詰めて来たので、日影を見ると却つてクラクラと眩暈しさうになつた。

袈裟次は又しても帯をゆすり上げて、ふらふら歩き出した。ものゝ十歩も行かぬうちに又下つて来るやうな気がして、そればかり気になつた。袈裟次は膝に両手をあてゝ、光る地面に唾液を吐かうとしたが、口の中が苦くなるばかりで、もう何んにもなくなつた。日向にキラキラ動くものを見てゐると、目が段々奥の方へ瘦せて行くのが自分にも知れる様だつた。**袈裟次は昨日の朝から肚に何も容れてゐなかつた。**

「姉や、おい姉や。」

何処か遠くの方で自分と呼んでるやうにも思つたが、それは何日かの夢魘（ゆめおそ）ひでもあつたやうに遠かつた。袈裟次は牛のやうに喘ぎながら目を一所に据ゑて、堀割らしい堤に沿うてその傾斜を上つた。膏（あぶら）のやうな汗が額際からポトリと土に落ちた。

背後から呼掛けたのは、**何時か上野で銀貨を棄てた小僧**だつた。二三次呼んでも振返らぬのにムツとしたのか、腕組しながらノソノソと何処までも後を跟けて来た。

袈裟次はよくものに蹴躓いて、穿物が脱げた。その時だけはハツとして自分に復へるけれど、又心が空虚のやうになつて自分が何処にあるかさへ判らなかつた。折々風を截つてガアツと耳許を疾走する電車だけれど、見てるうちにクルクルと玩具のやうに遠く小さくなつて、自分とは何んの関係もない別の世界へ〔去つて〕行つた。

「おい、姉や何処まで行くんだ。」小僧は耐りかねて後から声掛けた。

夢のやうに袈裟次が**お茶の水橋**を渡りかけた時、「**成瀬……華族よ。**」袈裟次は投げ棄てざるやうに云つて、「あの門だ。慥かあの門だ。」と指示した。

「成瀬ツて華族？」と、小僧は小頸を傾げたが、「ぢや、然う。」

「待てよ姉や、俺ア用があつて三橋から追掛けて来たんだぜ。」

袈裟次は返事もせずにはふらふらと行く。小僧も面膨らしながら矢張りその後からノソノソと跟いて行つた。

冷りと顔に何か触つて、袈裟次が目が覚めたやうに思つたのは、坂道を折廻して聳り立つ**宏壮な煉瓦塀の日蔭**に歩み上げると、鉄柵装飾厳めしい**表門が城郭のやうに前に聳えてゐたのを**、ハツキリした目で見入つたのであつた。身体中の温熱が一度に吸取られるやうな気がして——正面の馬車隠しには大蘇鉄

（おおそてつ）の簇生（そうせい）が小山なぞのやうに黒く繁つて、**クリーム色の西洋館**がその正面に輝いた。

袈裟次は暫くボンヤリして、小砂利のキラキラ光る門内を眺めてゐた。

「何んだい邪魔ツけな。退け、退け退け。」と、気負つた声に気が附くと、自分は門脇の袖壁の方へ突飛ばされてゐた。仕方下しの黒鴨扮装の人足が三四十人、萌黄木綿の真新しい油筆をかけた釣台を勢揃へして、八文字に踏開いた表門を練込むところであつた。その中の革羽織を着た頭らしいのが、袈裟次を突除けたのであつた。

「御婚礼だぜ。きつと。」と、小僧は袈裟次の袖を引いた。「畜生、贅沢な真似をしやがるぜ。貧乏人が泣く筈だ。」

「さア威勢好く。ほらしよ。」

革羽織の頭が掛声すると、竹杖を鳴らして足踏みを合せてゐた甘何台の人足は、どツと勇ましく掛声を合せた。一人が朗かに唄ひ出した。

『目出度目出度の若松様よ。や、ホレヤレ、枝も栄えて葉も茂る※……』

と、釣台は小砂利路を玄関の方へ練り出した。

「それでも町内を遠慮して、門内だけにしたのがまだ幾らか可愛（いと）らしいや。馬鹿にしてやがるぜ。」と、小僧は鼻の先で笑ひながら話しかけたが、袈裟次はぼんやりとその後を見送るのだつた。村の者でももう知つてる者は少い遠島木造※（とほじまきづくり）※をこゝで聞かうとは思ひ掛けなかつたのだ。

「これ、何処へ行く。」と、革羽織は袈裟次の肩を掴んだ。袈裟次は釣台の後に続いて、ふらふらと門内へ入らうとしてゐた。

革羽織の止めるのも聞かずに、袈裟次は真直に大玄関へ進み寄つた。フラフラ倒れさうになる身体を、大扉の把手（とつて）につかまつて泳へた。冷たい硝子板に何心なく額を押附けて見ると、頭の底までシインと空虚になつて、立つたまゝでも快く睡れさうであつた。塀の中に見える釣台の行列はそこの中門から折れて、破風造りの厳めしい昔建の内玄関の方へ賑かに流れ込んだ。

袈裟次は二三度、大きな声で案内を乞うたが返事がなかつた。その癖館内は取込でもあるらしく、廊下を走違ふ急しさうな足音やどツと騒めく笑声が聞えた。内玄関の長持歌は又音頭が代つて、掛声勇ましく唄ひ出した。

「申し、今日は、申し今日は……」

袈裟次は硝子戸の中を透して見ながら、方々から呼んで見た。然し豪壮な西洋館は厳然と扉を閉ぢて、疲れ果てた娘の声を空しく撥（は）ね返した。

気が附くと呼鈴があつた。それを押した。暫らく置いて、又押した。

「騒々しいな。何んだ。」

不意に扉が内へ引かれて、木綿紋附の筋骨逞い書生がそこに突立つてゐた。堅魚縞（かつをじま）の真新しい木綿袴が目についた。

「殿様にお目に懸りたいんです。取次で下さい。」

「何、殿様に？」と、書生はジロジロ袈裟次を見て、「お前、何処から来たんだ。」

「野蒜です。野蒜から来たんです。」

「何処から入って来たと聞いているんだよ。その姿で表御門から入って来たのか。全体、何んの用だね。」

「殿様に会はして下さい。」

「だから何の用だよ。」

「築港の事で、殿様にお願いに来たんです。」

「築港？ 築港とは港の事だね……お前が！」

「お目にかゝってお願いすれば、殿様はきつと聴いて下さるんです。」

「お前……。」と、書生は毛蟲眉を顰めて、不審さうに顔を見てゐる。「何うかしたんぢやないか。そこの硝子に映してその顔を御覧。何うしたんだい。」

「顔なんか……」と、無造作に平手で引擦つて、「殿様に逢して下さい。」

「何うしたんだ、撲たれたのか、そ、血が出てるよ。」

「血？」と、袈裟次は先刻からヒリヒリする額際を撫でて、掌を見た。血はポツチリ小豆粒位だつたのが、夢中に幾度も擦つたと見えて、手首まで膏が乾いたやうにベツトリ掌に光つてゐた。板木屋に硝子窓へ引倒された時痛めたのだ。

「さ、早く出て行つてくれ。御前はお不在（ふざい）だ。それに今日、お邸はこのお取込だ。」

「でも態々来たんですから……殿様に何うか……。」

「御前はお不在だ。さアさ、早く帰つた帰つた。」と、書生は手を肩に当てゝ、押出すのであつた。

「ぢや、何時来れば逢つて下さるの。」

「それは御都合次第だ。兎に角今日は、御来客もあるんだから、御玄関に邪魔されては困る。さア出た出た。」

袈裟次は凝つと唇を噛んでゐた。内玄関の方には御祝儀の長持唄がまた聞えてゐる。館には男女打雑つてどつと笑ふ笑声が溢れた。

「では、今日は帰ります。」

額の創が急にズキズキ疼くやうなのを押へて、袈裟次は萎々と玄関を出た。日に光る長い小砂利路を門の方へ歩み出した。上總屋へ帰るにしても、もう懐には今晚払ふものはなかつた。

（六）

門前には兵隊服の小僧が目を光らして待つてゐた。何か話掛けたさうに寄つて来るのを、袈裟次は除けるやうにして日陰の方へ歩いた。何処でも可い、身体を憩めたかつたのである。

小僧はプンと面膨らした。「何んだ。俺ア用があるから待つてたんだぜ。馬鹿にしてる。」とブリブリしながら袈裟次を見上げ見下してゐたが、急しく衣囊（かくし）を探つて五十錢銀貨を目の前へ突出した。

「さア、返す。お前の錢だ。」

「……」

「お前が上野で棄てゝ行つた銀貨だよ。俺ア拾ふめえと思つたんだけど……ツイ戻つて拾つちやつたんだ。」……※

小僧は俯向いて爪先に地面を弄つてゐた。「あゝ、お前さんだつた。」

袈裟次はやつとの事で、東京へ来て初めて口を利いた人、この小僧を思ひ出したのである。

（七）

「俺アあん時夢中で牛飩（うどん）かなんか食つちやつたけれど、後で考へると気色が悪くつて為方がねえんだ。先生へ話したら乞食の真似したツて、俺ア、うんとガミつかれたんだ。先生は平常良い人だけれど、そんな時ア怒るぜ、あゝ真赤になつて怒るんだよ。だから俺ア錢イ溜めて銀貨にして、今お前に返さうと思つて、今日まで探してゐたんだ。」

袈裟次は物珍しさうに小僧の顔を見詰めた。

「それからほら何時か、雨の降る夕方よ、公園の横の電車路ン処でお前に逢つたらう。気が附かなかつた？ ……あん時はタツチと一緒に逢つたんだよ。タツチつて犬だよ、一緒に寝るとそりや暖かだよ。」と、クリクリと袈裟次を見上げた。

「お前さん、家がないの。」

「串戯（じようだん）云つてらア。俺等ア家作附のお母（ふくろ）なんか借りやしねえぜ。現金懸値なしの貧乏人なんだ。」

「それでも先生と云ふ人は。」

「先生だつて家なんかねえよ。東京中酔払つて歩いてるんだ。今日こゝにゐたと思ふと、五日も半月も逢はねえ事があるんだ。でもそりや偉いんだぜ。小児が好きでな、大勢ゾロゾロ連れてるから直ぐ知れるよ。そして姉やは何処にゐるんだい、矢張りあの上總屋にゐるんか。」

「あゝ。」

「あすこは評判の家だぜ。あんな家にゐちや何うせロクな事はねえぜ。俺アあのお松ツて餓鬼の面ア見ると、肚ン中まで鹹（しよ）ぱくなるんだ。」

「お前さん、で、何うして生きてるの。」

「生きてるの？ まるで蟲螻（むしけら）だね、まあ可いや。俺ア石炭拾へに秋葉駅と浅草駅に出てるんだ。石炭拾へでも正業だから可いと先生は誉めたぜ。俺ア先生に誉められりやそれで可いんだ。姉やは何んしてるだい……」

「私……」

「女優にならねえかい。女優なら飛附き直ぐお金になるぜ。」

「私が女優に……。」と、袈裟次も可笑しくなつた。

「本当だよ。俺ア見当があるから云ふんだ。それとも何処か口があるのかい。」

「あゝ、今日話が纏まる事になつてゐるんだよ。」

「危ねえもんだ。上總屋の世話だらう、駄目だよ。それより本当に女優になつた方が好いぜ。俺ア好い口を知つてるんだ。お前なら柄はあるしよ、きつと好いぜ。」

「難有う。今日の話が駄目だつたら願ひするわ。」

「ぢやお前、又上總屋へ歸るのか。」と、小僧は目を丸くした。

「だつて、歸るツて出て來たのだから一度は歸るわ。それに私の身を請合つてくれてる女があるんだもの、歸らないぢやその人の迷惑になるわ。」

「だけどお前、今度歸ると出られなくなるぜ。この間もお松の餓鬼が見張りに跟いてるんで、俺ア大抵察してゐたんだ。周旋屋とぐるになつて、その今日の

口だつて、一日々々に引張つて宿錢のなくなるのを待つてゐるんだ。きつと駄目に相違ねえぜ。」

「でも、知らない人に救はれたりするのは厭だわ。一度歸つた上で自分の身は自分で始末するわ。」

「可也強情だな。お前も好い処があらア。ぢや行つて見ねえ。」と、小僧は又銀貨を突附けた。

「これ？」

「元々お前の錢だ。何か暖かいもんでも食つての話だよ。知つてゐるよ、こんな事は年中の事だから、一目見ると直ぐ顎の伸加減で判るんだよ。お前一昨日あたりから肚を乾してゐるだらう。屋根代ももう無えんだらう。きつとお前、これでも何かの補足になるだらう。」

袈裟次の見詰める銀貨はボウと涙に曇つて、段々小さくなつた。真赤になつて手を伸べてそれを受取〔つた〕。

歸かうとする時、地響きして一台の自動車^{自動車}が直ぐ傍に停つた。偶と見上げると、汽車の中で深切にしてくれた若い紳士^{紳士}が、その自動車の窓から自分を見てゐる。

「あら！」

袈裟次は何よりも第一に、その銀貨はその紳士に恵まれたのに気が附いた。

小僧を突倒すやうにして、袈裟次はバラバラとそこを駈出した。

(八)

自動車の窓には、貴やかに着飾つた美しい顔があつた。狼狽して逃げまどふ袈裟次の後姿と、秀麗な子爵の面とを不審さうに見較べて、その矜（ほこり）ある眉根を顰めてゐた。

子爵には恩人の富松伯爵家の長女で、子爵とは婚約の間、……※（帰朝と共に）……※今度の觀察〔の対象〕者となつたのである。縁女周子（しゅうこ）は淳作より二つの年上、良人（をつと）たるべき人の放蕩のために、もと堂上家何某侯に縁附くべき筈なのが惜しくも破談になつてゐたのだ。

「御存知なのですか。あの娘。」

「知つてると云ふ程でもないですが……旅先きで逢つたのです。」

穏和しい子爵は対者の強い視を避けるやうにして云つた。

「お呼びになつたら好いでせう。まだ間に合ひますわ。」

「それ程の事でもないのです。」

子爵は右に躓きながら逸散に逃げ行く、袈裟次のふらめく後姿を見てゐた。

曲角近くなつて、袈裟次も一度振返つて見た。自動車の窓から凝つと見送る若い紳士の視線に遭遇すると、又夢中に駈出した。

「あッ危い！」と、子爵が思はず小さな叫声を出したのは、後に心を奪られて娘は角の電信柱へ衝突らうとしたのだ。

それを見た周子の大理石のやうに白く冷たい頬は、見る間に変つた。「櫻井。」と運転手を呼んだ。

「は。」ヒラリと飛んで下りて、帽子を脱つて恭しく〔立つた〕。

「お前あの娘の後を追掛けて、早く、早く、早くだよ。」と周子は懊悩さうに膝を叩いた。

「は。は。は。」運転手は叩いた膝の数に合わせて頭を下げた。

「早くなさい。」

「は。」

ネクタイを些いと直して駈出さうとする運転手の前に立塞がつたのは、それまでポカンと見てゐた小僧だ。

「おうい、止（や）せよ。」

「何だ。」

「逢ひたくねえから逃げたんだアな。追懸けるのは殺生だ。見ねえふりするのが人情だぜ。」

「御用があるんだ。」

「その御用が厭だから遁げたんだよ。止せよ、君。」と、小僧はニタニタと運転手を見上げた。

子爵は窓框を開いて顔を出した。おいと呼んで手招きしたのは小僧を呼んだのだが、運転手はまた自分と思つた。帽子を笏（しやく）に執つて腰を折つて、「は。」

「今の娘さん、宿を知つてゐますか君。」

「公園の傍で上總屋だよ。木賃宿だ。」

「難有う。櫻井。」と子爵は運転手に顎をしやくつて置いて、静かに腰を掛けた。

「木賃宿！」と、微かな嘲笑が周子の唇に上つた。車内にパツと時ならぬ**金雀枝**（えにしだ）の香の漂うたのは、目の前に穢い安宿の悪臭でも払ひ退けるやうに、周子は手にしたハンカチを鼻の前に打振つたのである。

「ふゝん、乙ウ行つてやがる。」と、小僧は見上げて、団子鼻をひこつかせた。

現代語版

玄関

—

「俺もお前ぐらい自由にできねえんじゃ、売り込んだ顔が廃る。さ、声を立てろ。声を立てねえか」

板木屋は周囲に気を配りながら、小声でじりじり寄ってきた。

袈裟次は黙って、相手の目を狙って見つめた。こんな者に脅されて驚く女と見られるのが心外だった。

「畜生！ 睨めやがる。その手に驚く俺じゃねえ。お前らにそんな愚弄した真似をされちゃ、明日から公園へ顔が曝せねえんだ」

袈裟次は下顎から蒼くなった。

「おい、なぜ黙ってる。今日は俺ら覚悟して来たんだ。声を立てねえか」

板木屋は握った手元をぐいと引き手繰った。前に倒れそうになっても、袈裟次は見つめた目の鞘を弛めなかった。

「畜生！ まだ睨みやがるな。睨めばどうしたんだ、どうしたんでえ」——板木屋は、どうかすると逃げそうになる視線をやっと踏みこらえて、「俺はお前のために恥をかいたんだ。親分にまで笑われたんだ。なぜ黙ってる、おい、声

を立てねえか。泣いても騒いでも今日は手綱をゆるめやしねえ」——うろうろ声になって、「俺は親分に笑われたんだ。笑われたんでえ、畜生！」

「いけ捻じ強い。まだ睨めてやがる。畜生！」——もう見境がなくなった板木屋は、平手で強く袈裟次の横顔を殴った。

「畜生！」

袈裟次はぐいぐい突かれながら身動きもしなかった。袈裟次の唇は、笑うように微かに痙攣った。震える膝の下に落ち散った木櫛がぽきりと二つに折れ、ぽきぽきと五つ六つに砕ける音がした。

「その顔は何でえ、声を立てねえか」

それでも袈裟次は声を立てなかった。板木屋は袈裟次を振り倒して夢中で打擲した。

袈裟次は捨て鉢だった。死んでも悲鳴は上げまいと思った。真っ青になってこらえた。こんな者と、声を立ててまで争うのは恥ずかしかった。

「覚えていやがれ、今日ばかりが月日じゃねえんだ。一度掴んだ首根っこは放しやしねえぞ」

板木屋は照れ隠しにわざと隣の部屋に耳を立てて、周囲を睨み回しながら降りて行った。階段のところでほんと息を吐くのが聞こえた。

袈裟次のじっと見つめる目は、ほろほろと涙になった。苦しい涙ではなかった、口惜しい涙だった。こんな恥辱を受けながら、まだ自分の身を決めかねている自分が、齒痒くも醜くも思われたのだ。そんな意気地のない自分なのか、それが口惜しかった。

「じゃあ貴女、本当に処女（きむすめ）さんだったの」

「ええ」

袈裟次がはっと見上げると、長襦袢一枚の隣室の女が、仕切りの襖を開けてそこに立っていた。目に一杯涙を溜めて、劣るように袈裟次を見ていた。

「そうだったの」と、女は暗いほうを眺めて言葉を切った。「私はね、どうせこんな所でお目にかかる人だからと思ったのに……羨ましいわねえ。」と、身に染みて言った。

暖かい薄桃色の絞り鹿の子が裾に立波と狂い、胸に肩に千鳥が飛んだ艶やかな女の襦袢姿は、袈裟次の目に眩しいようだった。恥ずかしそうにうつむいて、膝に折れた木櫛をそっと搔き寄せた。

「ねえ、大事になさいよ。守るものは死んでもお守りなさいよ。誰だって初めはみな……生娘だけれど、一步踏み違えたら、これだけは取り返しがつきやしませんよ。」

袈裟次は何か考えていた。女の顔を見て、ふと思いついたのである。

「お酒に酔って、狂ってみても始まりやしません」

「ええ……醒めるたびに弱くなる自分が見えるんですもの。」女は片頬に寂しく笑った。

「そして東京には頼り寄る人はないんですか」

「ええ」

「一人も？」

袈裟次は女を見上げた。「ねえ貴女」と、膝を進めた。

「ええ」と言いかけて、女はこめかみを揉みながら、「ああ私にも、貴女の年はあったのに……羨ましいね」

「貴女」

女は不審そうに、急に輝いた袈裟次の目を見返した。

「あの、華族様なんて、誰にでも会ってくれるものでしょうか。私、どうしてもお目にかかりたい人があるんですが。」

「華族様？」女はぼんやり見ていた。

二

「ねえ、こんな田舎娘が突然訪ねて、会ってくれるのでしょうか。私、その方に会いたいばかりに、田舎の家を逃げ出してきたようなものなんです。ねえ、華族様なんて威張ってるんでしょうね。駄目でしょうか」

「さあ、知ってる方なんですか」

「いいえ、子どもの頃に二三次遊んだばかり、もう忘れてるでしょう」

「その方に身の上の相談でもするの」

「いいえ。その方には別な用があるのよ。大事な、大事な別な用があるの。本当は私の身がちゃんと立派になって、それから訪ねてお話するつもりだったんだけど……こんな風にぐずぐずして、あんな者に馬鹿にされているよりか、早く自分の目的を急いだほうがいいと思ったの。それも今なのよ。貴女にお目にかかる、すぐふっとそう思ったのよ。」

「私に会って、どうして」女は肌寒そうに襦袢の袖を掻き合わせた。

「あら、知ってますよ」袈裟次は羞んで、櫛の折れを亀甲形に並べてみた。

「貴女に聞けば、華族様のことが判ると思ったの。」

「誰がまた……仕方がないね」女も曇りなく笑って、「でも貴女は華族様を訪ねる方だし、私は追いかけて逃げる方、大変な違いなのよ」

「お子様があるんですってね」

「あら！」と、女の目が閃いた。「もう、そんなことまで」

「でも本当なんでしょう」

「嘘？ ほほほほ。実はこれでも一度は、子爵夫人になるべかりし女なの。驚いた？」

「あら子爵なの。私も子爵だ。私の村の旧ご領主なの。」

「……仕方がないね。不自由なく育った人は暢気なものさ。五年の洋行のあいだに、人の身にどんな変化が起こっているか気がつかないんだもの。貧乏人はただ一日をつなぐ糧のために、一生取り返しのつかないこともしなければならぬ世の中なのに……」

「五年？ やっぱり洋行なさったの」袈裟次は娘らしく指を折ってみて、「そして英吉利で工学の勉強をしてお出でだったんですって。工学にもいろいろあるわね、築港だって工学のうちでしょう。きっとそうよ」

「書き散らした五年の反古紙を、もとのようにしようたって……もとの白地に戻れるくらいなら……そんなことができるもんか。」女は唇を吸われるように、じっと畳の目を見つめた。

「ほらねえ、ちょいと」袈裟次は声を躍らせて進み出た。「華族様だからお金がある。旧のご領主だから村の人も頭が上がらないでしょう、それにご自分は工学の勉強をなさったのだから……どう考えたってできないはずないわ。できる、できる、きっとできる。」——膝小僧をばたばたさせている。

女の目はちらと袈裟次を掠めたが、まったく聞いてはいなかった。心は遠くさまよっていたのだ。ふんと嘲笑いながら立ち上がった。「……恨むなら恨むがいい。何を言って……みんな夢さ、昔の夢だ。」——すんなり立って、裾に振れこぼれるほんのり白い足先を、畳に揃えて珍しそうに眺めている。

「ねえ、立派になっても今の身だって、言うことは同じでしょう。後で聞いて頂けるくらいなら、今だって聞いてくださるでしょう。私、馬鹿だ。ねえ、なぜそんなことに気がつかなかったろう。だけど……私、馬鹿なんですね」——小首を傾げて何か困っている。

女は袈裟次の子どものらしい姿に初めて気がついたように、にっこりした。「もう寝ましょうか。だいぶ更けてきたようね」と、自分の部屋へ戻っていく。

「だけど……ねえ、ちょいと」

「ええ」

「本当に会ってくださるでしょうか。華族様なんて私、まるで知らないから心配だわ。ねえ、駄目でしょうか」——心配そうに見上げた。

「華族にもよるでしょうが……何というお方」

「成瀬淳作、子爵よ。」

女が襖の引き手にかけた手は、がたがたと震えてきた。「して、成瀬……」——気が抜けたようにしばらく袈裟次を見ていたが、気がついて襖をぴたりと閉めた。

「もうお休みなさい。寝ていて話しましょうね」

なぜこの名前を忘れていたろう、と考えながら、袈裟次は冷たい蒲団に潜り込んだ。**成瀬子爵**。東京へ来て今日まで、その大事な名前をどうして思い出さずにいたろう。村や家を棄てて東京へ出たのも、第一はこの人に会うためではないか。自分の一生の目的である築港には、この一人を動かすよりほかに道は開けないと考えたからではないか。

子爵は華族だ、旧領主だ、地位がある、金力がある、地方の名望がある。その上、子爵は洋行までして最新の工学を修めた人である。商港地として野蒜村が適当か不適当かは、一目で明らかなはずだ。もし子爵を動かす者があって、子爵が真面目に築港を主唱したら、その向こうに立って反対しうる者は、村はもちろん、郡にも県にも一人だっているはずがない。剛情な父・勝衛でさえ、旧領主の子爵の前には縮んでしまうだろう。

袈裟次はこの夏、新聞で子爵帰朝の記事を読むと同時に、必ず年来の熱望を実現して野蒜を港にする人はこの人でなければならぬと、固く信じた。この二か月のあいだ、夜も昼もそれを考えた。ただその子爵を動かす方法である。見す見すできる築港を打ち棄てておく気が知れないので、それとなく妹や村の誰彼、誠也にも考えを聞いてみたが、今ごろそんな夢を見ている者は誰もいなかった。誰も笑って相手にしなかった。結局、子爵を動かす人は自分よりほかになかった。方法もただ一つ、自分に流れ溢れる至誠をもって頼むよりほかはなかった。父・勝衛がそれを抑えようとすればするほど、袈裟次の空想は焰と燃え上がった。

「ねえ、そして」と、隣室の女がしばらくして声をかけた。妙に濡れた声だった。「貴女、その子爵という方を知ってるんですか」

「ですからね私。子どもの頃に二三度遊んだことがあるばかりなんですよ」袈裟次は煩わしそうに答えた。大事な考えを破られそうになるからである。

「そう……」と、女も言葉を断った。

「狂い咲きでも自分を大きく咲かせたい」と袈裟次が妹に書き残したのも、つまりは子爵に会う機会をつくるためだった。二年なり三年なり都会で苦しんだうえで、爛漫と咲き乱れた自分を子爵の前に立たせるつもりでいたのだ。だが、その希望は東京の五日で脆くも崩れそうになってきた。五日のあいだに見た東京はあまりに鈍く、あまりに緩く、あまりに単調で薄暗く、こんななかで大事な日を無駄にするのは馬鹿馬鹿しく思われた。

「ねえ、華族様だって、訪ねて行く者に会わないってはずないでしょう。会ってくれますわね」

袈裟次はまた同じ問いを心配そうに持っていった。

「ええ」と、女は生返事だった。「でも先方にもそれぞれ用があるでしょうからね……ですけど今ごろは先様も……ご婚礼で夢中でしょうよ。」

女は気がなさそうに言って、ぱたりと寝返った。

「ご婚礼？ 成瀬様にご婚礼があるんですか。」

「もう寝ましようよ」

「ねえ、ちょいと。ご婚礼があるんですか」

「寝ましようね」女はまた寝返った。

「でもあの……ちょいと本当にご婚礼が……」

「あら、一番電車が出ましたよ。」

袈裟次はもう眠るにも眠られなかった。ときどき洩れる隣の女の溜息を聞きながら、子爵に会ってからの言葉をあれこれ考えて胸を躍らせた。本当に自分は、なぜ真っ直ぐ上野に着いたそのまま、子爵家を訪ねようとしなかったのだろう。立派な身になった自分も今の自分も、自分に変わりはないはずである。その時に聞いて頂けることなら、今だって聞いて頂けないはずはない。今の姿だから聞かないような頼もしくない子爵なら、その時に頼んでも望みはない……そうだ、当たって砕けるのだ。

四

袈裟次はただ子爵に心を急いでいた。板木屋がいくら詫びても頼んでも、せめて借りた金をつくって親分に返すまでもこの宿で辛抱してくれと事情を割って話しても、袈裟次は返事をする気にもなれなかった。片手を懐に入れたまま、黙ってずいとお出ようとする。

「よし、もう頼まねえ」と、板木屋の目は血が上っていた。潜り抜けて出ようとする袈裟次の襟髪を掴んで引き戻した。「後悔するな」

「出るんだよ」

男の力だ。袈裟次はころころとたじろいで、懐手の肘が窓の硝子に突き当たった。ぴんと罅（ひび）割れる音の下まで響いて、細かいものが顔にあたった。体のどこかがひりりとするようだったが、こらえて起き上がった。出ようとした。

「捻じ強い汚女だ」板木屋の目は獣のように燃えた。「畜生！」

袈裟次の体は鞠のように投げられた。壁際までふらふらして行って、べたりとそこへ腰を突いた。

「それでも出るか」

「出る」袈裟次は起き上がった。まだ片手は懐のままだった。

「うう」板木屋は歯を鳴らして、袈裟次の腰のあたりを蹴ろうとした。

「出る……出る」

袈裟次は謔言（うわごと）のように言って、目は一点に据わっていた。真っ青に震えながらも、するすると出ようとした。

そのとき、耳の底がきいんと鳴って、気が遠くなるような気がした。鴨居がゆらゆらと揺れ落ちると見えたのは、袈裟次が男の暴力に振り倒されていたのだ。板木屋は馬乗りになって、袈裟次を畳に擦りつけていた。

「俺も捨て鉢だ。さあ声を立てろ、人を呼べ」

「誰が……」——はっきり首を振って、少し身を震わせ、唇を微かに痙攣らせた。血の気のない袈裟次の顔は、相手を嗤ってやったつもりなのだった。

「声を立てろ、声を立てないか」

袈裟次は首を振って板木屋を見つめるうちに、しだいに板木屋の顔がぼうっと遠く小さくなるようだった。ここで気を失ってはと気を張ると、野獣のような男の顔がまた近くはっきりしてきた。

「どうする、これでも出るか」

「出……」と袈裟次が言いかけたとき、不意に男の手が緩められた。誰か入ってきて、傍に立ったようだった。

「お前さん、金で済むことなんだろう。違いますか」——隣室の女の声だった。

「俺は親分に顔が合わせられないんだ」

「だから、私が合わせられるようにしてあげてよ。こんなに出たいとおっしゃるんだから、出してあげたらいいじゃないの」

「ですけども……」

「だからさ、面倒臭いね。お金で済むことならと言ってるじゃないか」

「へえ、そりゃ何です……」板木屋は汗を拭いてぺこぺこ頭を下げた。「今じゃその、金よりも私はその意地でさ、仲間にその顔が……」

「あら、まだ悪人ぶっていたいの。お止しよ、それよりはお金とお転びよ。ほほほ。お前さんの柄だもの」

「私、お金を出して貰いませんよ。」袈裟次はこのとき、きっぱり言って起き上がった。

「どうして？」

「人にお金を貰うのは厭です。私、駿河台まで行ってくるだけなんです。それまで保証になって、出してだけください」——袈裟次はふらふらして立ち上がった。

「お前さんもまた……」女はじっと袈裟次を見つめていたが、つと寄ってきて袈裟次の手を執った。「お前さん……駿河台へ行くんだね。」

「ええ」

「成瀬さん……とかいうお方にお目にかかるんだね。」

「ええ」

袈裟次を見つめる女の目に、涙がめくめくと湧き上がってきた。「どんな、どんなご様子か、よく見てきて……私に聞かせてくださらない。」

——たまらなさそうに下唇を噛んで、女はくると窓のほうへ立ち離れた。

袈裟次はばさばさと裾を邪魔そうに、その部屋を出た。

五

何でもこの電車路に沿って行けと教えられた、その万世橋というらしい大きな橋詰に出るまで、袈裟次はそれが午前なのか午後なのか、ぼうっとして判らなかった。橋際に辿り着いたときには、日射しを仰いでも方角が知れなかった。銀のように光る電車線路ばかり一心に見つめて来たので、日陰を見るとかえってくらくらと眩暈がしそうになった。

袈裟次はまたしても帯を揺すり上げて、ふらふら歩き出した。十歩も行かないうちにまた下がってくるような気がして、そればかり気になった。膝に両手をあてて、光る地面に唾を吐こうとしたが、口のなかが苦くなるばかりで、もう何も出なかった。日向にきらきら動くものを見ていると、目がだんだん奥のほうへ痩せていくのが自分にも知れるようだった。袈裟次は昨日の朝から腹に何も入れていなかった。

「姉や、おい姉や」

どこか遠くで自分を呼んでいるようにも思ったが、それはいつかの夢に甦われたときのように遠かった。袈裟次は牛のように喘ぎながら目を一点に据え

て、堀割らしい堤に沿ってその傾斜を上った。膏（あぶら）のような汗が額からぼとりと土に落ちた。

背後から呼びかけたのは、**あの上野で銀貨を棄てた小僧**だった。二三度呼んでも振り返らないのにむっとしたのか、腕を組みながらのそのそとどこまでも後をついてくる。

袈裟次はよく物に躓いて、履物が脱げた。そのときだけはとして我に返るけれど、また心が空虚ようになって、自分がどこにいるのかさえ判らなかった。ときおり風を切ってがあっと耳もとを疾走する電車も、見ているうちにくると玩具のように遠く小さくなって、自分とは何の関係もない別の世界へ去って行った。

「おい、姉や、どこまで行くんだ」小僧はたまりかねて後から声をかけた。

夢のように袈裟次が**お茶の水橋**を渡りかけたとき、「**成瀬……華族よ。**」——袈裟次は投げ棄てるように言って、「あの門だ。たしかあの門だ」と指さした。

「成瀬って華族？」小僧は小首を傾げたが、「じゃあ、そう」

「待てよ姉や、俺は用があって三橋から追いかけて来たんだぜ」

袈裟次は返事もせずにふらふらと行く。小僧も頬を膨らせながら、やはりその後からのそのそとついて行った。

冷やりと顔に何か触れて、袈裟次が目が覚めたように思ったのは、坂道を折れ回って聳え立つ**壮大な煉瓦塙の日陰**に歩み上がると、鉄柵の装飾も厳めしい**表門が城郭のように前に聳えていたのを**、はっきりした目で見入ったのだった。体中の温かさが一度に吸い取られるような気がして——正面の馬車隠しには大蘇鉄の茂りが小山のように黒く繁り、**クリーム色の西洋館**がその正面に輝いていた。

袈裟次はしばらくぼんやりして、小砂利のきらきら光る門内を眺めていた。

「何だい邪魔っけな。退け、退け退け」——気負った声に気がつくと、自分は門脇の袖壁のほうへ突き飛ばされていた。**仕方下ろしの黒鴨装束の人足が三四十人、萌黄木綿の真新しい油筆をかけた釣台を勢揃いさせて、八文字に踏み開いた表門を練り込むところだった。**そのなかの革羽織を着た頭らしいのが、袈裟次を突き除けたのだった。

「**ご婚礼だぜ。きっと。**」と、小僧は袈裟次の袖を引いた。「畜生、贅沢な真似をしやがるぜ。貧乏人が泣くはずだ」

「さあ威勢よく。ほらしょ」

革羽織の頭が掛け声をする、竹杖を鳴らして足踏みを合わせていた二十何台の人足が、どっと勇ましく声を合わせた。一人が朗らかに唄い出す。

『めでためでたの若松様よ。や、ほれやれ、**枝も栄えて葉も茂る……**』

——釣台は小砂利の道を玄関のほうへ練り出した。

「それでも町内を遠慮して門内だけにしたのが、まだいくら可愛らしいや。馬鹿にしてやがるぜ」と小僧は鼻の先で笑いながら話しかけたが、袈裟次はぼんやりとその後を見送るのだった。村の者でももう知っている者は少ない、あの長持唄をここで聞こうとは思いがけなかったのだ。

「これ、どこへ行く」――革羽織が袈裟次の肩を掴んだ。袈裟次は釣台の後に続いて、ふらふらと門内へ入ろうとしていた。

革羽織が止めるのも聞かず、袈裟次は真っ直ぐ大玄関へ進み寄った。ふらふら倒れそうになる体を、大扉の把手につかまってこらえた。冷たい硝子板に何心なく額を押しつけてみると、頭の底までしんと空虚になって、立ったままでも快く眠れそうだった。塀のなかに見える釣台の行列は中門から折れて、破風造りの厳めしい昔建ての内玄関のほうへ賑やかに流れ込んだ。

袈裟次は二三度、大きな声で案内を乞うたが返事がなかった。そのくせ館内は取り込みでもあるらしく、廊下を走り違う忙しそうな足音や、どっとざわめく笑い声が聞こえた。内玄関の長持唄はまた音頭が代わって、掛け声も勇ましく唄い出す。

「申し、今日は、申し今日は……」

袈裟次は硝子戸のなかを透かして見ながら、あちこちから呼んでみた。だが豪壮な西洋館は厳然と扉を閉じて、疲れ果てた娘の声を空しく撥ね返した。

気がつくと呼鈴があった。それを押した。しばらく置いて、また押した。

「騒々しいな。何だ」

不意に扉が内へ引かれて、木綿紋付の筋骨たくましい書生がそこに突っ立っていた。堅魚縞の真新しい木綿袴が目についた。

「殿様にお目にかかりたいんです。取り次いでください」

「何、殿様に？」書生はじろじろ袈裟次を見て、「お前、どこから来たんだ」

「野蒜です。野蒜から来たんです。」

「どこから入って来たと聞いてるんだよ。その姿で表御門から入って来たのか。全体、何の用だね」

「殿様に会わせてください」

「だから何の用だよ」

「築港のことで、殿様にお願いに来たんです。」

「築港？ 築港とは港のことだね……お前が！」

「お目にかかってお願いすれば、殿様はきっと聴いてくださるんです」

「お前……」書生は毛虫のような眉をひそめて、不審そうに顔を見ている。

「どうかしたんじゃないか。そこの硝子に映してその顔を御覧。どうしたんだい」

「顔なんか……」——無造作に平手で擦って、「殿様に会わせてください」

「どうしたんだ、殴られたのか、そ、血が出てるよ」

「血？」——袈裟次はさっきからひりひりする額を撫でて、掌を見た。血は小豆粒ほどだったのが、夢中に何度も擦ったと見えて、手首まで膏が乾いたようにべっとり掌に光っていた。板木屋に硝子窓へ引き倒されたときに痛めたのだ。

「さ、早く出て行ってくれ。ご主人はお留守だ。それに今日、お邸はこのお取り込みだ」

「でもわざわざ来たんですから……殿様にどうか……」

「ご主人はお留守だ。さあさ、早く帰った帰った」——書生は手を肩にあてて押し出すのだった。

「じゃあ、いつ来れば会ってくださるの」

「それはご都合次第だ。とにかく今日は、ご来客もあるんだから、ご玄関で邪魔されては困る。さあ出た出た」

袈裟次はじっと唇を噛んでいた。内玄関のほうにはご祝儀の長持唄がまた聞こえている。館には男女が入り混じって、どっと笑う声が溢れた。

「では、今日は帰ります」

額の傷が急にずきずき疼くのを押さえて、袈裟次は萎え萎えと玄関を出た。
日に光る長い小砂利の道を、門のほうへ歩み出した。上総屋へ帰るにしても、
もう懷に今晚払うものはなかった。

六

門前には兵隊服の小僧が目を光らせて待っていた。何か話しかけたそうに
寄ってくるのを、袈裟次は避けるようにして日陰のほうへ歩いた。どこでもい
い、体を休めたかったのである。

小僧はぶんと頬を膨らせた。「何だ。俺は用があるから待ってたんだぜ。馬
鹿にしてる」——ぶりぶりしながら袈裟次を見上げ見下ろしていたが、慌ただ
しくポケットを探って五十銭銀貨を目の前へ突き出した。

「さあ、返す。お前の金だ。」

「……」

「お前が上野で棄てて行った銀貨だよ。俺は拾うまいと思ったんだけど……
つい戻って拾っちゃったんだ。」

小僧はうつむいて、爪先で地面をいじっていた。

「ああ、お前さんだった」

袈裟次はやっとのことで、東京へ来て初めて口をきいた人、この小僧を思い
出したのである。

七

「俺はあのとき夢中で鰻鮓か何か食っちゃったけれど、後で考えると気色が悪くて仕方がねえんだ。先生に話したら、乞食の真似をしたって、俺はうんと叱られたんだ。先生は普段はいい人だけれど、そんなときは怒るぜ、ああ真っ赤になって怒るんだよ。だから俺は錢を溜めて銀貨にして、今お前に返そうと思って、今日まで探してたんだ」

袈裟次は物珍しそうに小僧の顔を見つめた。

「それからほら、いつか雨の降る夕方よ、公園の横の電車路のところでお前に会ったろう。気がつかなかった？ ……あのときはタッチと一緒に会ったんだよ。タッチって犬だよ、一緒に寝るとそりゃ暖かだよ」——くりくりと袈裟次を見上げた。

「お前さん、家がないの」

「冗談言ってらあ。俺らは家作付きのおふくろなんか借りやしねえぜ。現金掛け値なしの貧乏人なんだ」

「それでも先生という人は」

「先生だって家なんかねえよ。東京中を酔っ払って歩いてるんだ。今日ここにいたと思うと、五日も半月も会わねえことがあるんだ。でもそりゃ偉いんだぜ。子どもが好きでな、大勢そろそろ連れてるからすぐ判るよ。そして姉はどこにいるんだい、やっぱりあの上總屋にいるんか」

「ああ」

「あすこは評判の家だぜ。あんな家にいちゃ、どうせろくなことはねえぜ。俺はあのお松って餓鬼の顔を見ると、腹のなかまで塩っぱくなるんだ」

「お前さん、で、どうして生きてるの」

「生きてるの？ まるで虫けらだね、まあいいや。俺は石炭拾いに秋葉駅と浅草駅に出てるんだ。石炭拾いでも正業だからいいと先生は誉めたぜ。俺は先生に誉められりゃ、それでいいんだ。姉やは何してるだい……」

「私……」

「女優にならねえかい。女優なら飛びつき、すぐ金になるぜ。」

「私が女優に……」袈裟次も可笑しくなった。

「本当だよ。俺は見当があるから言うんだ。それともどこか口があるのかい」

「ああ、今日、話が纏まることになってるんだよ」

「危ねえもんだ。上總屋の世話だろう、駄目だよ。それより本当に女優になったほうがいいぜ。俺はいい口を知ってるんだ。お前なら柄はあるしよ、きっといいぜ」

「有難う。今日の話が駄目だったらお願いするわ」

「じゃあお前、また上總屋へ帰るのか」小僧は目を丸くした。

「だって、帰るって出てきたのだから一度は帰るわ。それに私の身を請け合ってくれてる女があるんだもの、帰らないじゃその人の迷惑になるわ」

「けどお前、今度帰ると出られなくなるぜ。この間もお松の餓鬼が見張りについてるんで、俺はだいたい察してたんだ。周旋屋とぐるになって、その今日の口だって、一日一日引っ張って宿銭のなくなるのを待ってるんだ。きっと駄目に相違ねえぜ。」

「でも、知らない人に救われたりするのとは厭だわ。一度帰ったうえで、自分の身は自分で始末するわ」

「なかなか強情だな。お前もいいところがあるや。じゃあ行ってみねえ」——小僧はまた銀貨を突きつけた。

「これ？」

「もともとお前の金だ。何か暖かいものでも食ってからの話だよ。知ってるよ、こんなことは年中のことだから、一目見るとすぐ顎の伸び加減で判るんだよ。お前、一昨日あたりから腹を乾かしてるだろう。屋根代ももうねえんだろう。きとお前、これでも何かの足しになるだろう。」

袈裟次の見つめる銀貨はぼうっと涙に曇って、だんだん小さくなった。真っ赤になって手を伸べて、それを受け取った。

帰ろうとすると、地響きを立てて一台の自動車はすぐ傍に停まった。ふと見上げると、汽車のなかで親切にしてくれたあの若い紳士が、自動車の窓から自分を見ている。

「あら！」

袈裟次は何よりも第一に、その銀貨はその紳士に恵まれたものだ気がついた。小僧を突き倒すようにして、袈裟次はばらばらとそこを駆け出した。

八

自動車の窓には、貴やかに着飾った美しい顔があった。狼狽して逃げ惑う袈裟次の後ろ姿と、秀麗な子爵の顔とを不審そうに見比べて、その誇り高い眉根をひそめていた。

子爵の恩人である富松伯爵家の長女で、子爵とは婚約の間柄——縁女の周子（しゅうこ）は淳作より二つの年上で、夫となるべき人の放蕩のために、もと堂上家某侯に縁付くはずだったのが惜しくも破談になっていたのだ。

「ご存知なのですか。あの娘」

「知っているというほどでもないですが……旅先きで会ったのです」

穏やかな子爵は、相手の強い視線を避けるようにして言った。

「お呼びになったらいいでしょう。まだ間に合いますわ」

「それほどのことでもないのです」

子爵は、右に躓きながら一散に逃げて行く袈裟次のふらめく後ろ姿を見ていた。

曲がり角近くになって、袈裟次も一度振り返ってみた。自動車の窓からじっと見送る若い紳士の視線に出会うと、また夢中で駆け出した。

「あっ危ない！」と子爵が思わず小さな叫び声を出したのは、後ろに心を奪われた娘が、角の電信柱にぶつかろうとしたのだ。

それを見た周子の、大理石のように白く冷たい頬が、見る間に変わった。

「櫻井」と運転手を呼んだ。

「は」——ひらりと飛び降りて、帽子を脱いで恭しく立つ。

「お前、あの娘の後を追いかけて、早く、早く、早くだよ。」——周子は懊悩そうに膝を叩いた。

「は。は。は」運転手は叩いた膝の数に合わせて頭を下げた。

「早くなさい」

「は」

ネクタイを少し直して駆け出そうとする運転手の前に立ち塞がったのは、それまでぽかんと見ていた小僧だ。

「おうい、止せよ」

「何だ」

「会いたくねえから逃げたんだよ。追いかけるのは殺生だ。見ねえふりするのが人情だぜ。」

「ご用があるんだ」

「そのご用が厭だから逃げたんだよ。止せよ、君。」——小僧はにたにたと運転手を見上げた。

子爵は窓枠を開けて顔を出した。おいと呼んで手招きしたのは小僧を呼んだのだが、運転手はまた自分だと思った。帽子を笥に執って腰を折り、「は」

「今の娘さん、宿を知っていますか君」

「公園の傍で上總屋だよ。木賃宿だ。」

「有難う。櫻井」——子爵は運転手に顎をしゃくっておいて、静かに腰を掛けた。

「木賃宿！」と、微かな嘲笑が周子の唇に上った。車内にぱっと、時ならぬ金雀枝（えにしだ）の香が漂ったのは、目の前の汚い安宿の悪臭でも払い退けるように、周子が手にしたハンカチを鼻の前に打ち振ったのである。

「ふふん、乙に行ってやがる」と、小僧は見上げて、団子鼻をひこつかせた。

（第六章　了　／　第一分冊　完）

作業メモ

・底本コマ対応：（一）＝コマ 50 後半～52／（二）＝コマ 52～54 前半／（三）＝コマ 54～55 前半／（四）＝コマ 55～57 前半／（五）＝コマ 57～60 前半／（六）＝コマ 60 後半／（七）＝コマ 60～62 前半／（八）＝コマ 62～63

・新登場：周子（しゅうこ）＝富松伯爵家の長女・子爵の婚約者（子爵より二つ年上）／運転手の櫻井／書生／革羽織の頭／小僧の犬「タッチ」／小僧の「先生」

・★「先生」＝家がなく東京中を酔って歩き、子供が好きで大勢連れている人物。小僧が心から慕っている。後の章の重要人物になる可能性が高い

・※の主な箇所：長持唄の下句「枝も栄えて葉も茂る」（OCR 崩れ・要確認）／「遠島木造」（判読不能。長持唄の名か地名か）／小僧が銀貨を返す場面の一文／周子の紹介の二文（OCR 大きく崩れ）

・地名：万世橋／お茶の水橋／駿河台／三橋（上野）／秋葉駅／浅草駅

・★次は第二分冊「舞台裏」（第7～12章／コマ64～110）。第一分冊は現代語版とPDF/docxの作成へ

底本：真山青果『焰の舞』新潮社、大正八年十二月一日刊。国立国会図書館デジタルコレクション（PID 962869／請求記号 391-20）。著作権保護期間満了・インターネット公開。

宮城県図書館に一九七九年の複製版（請求記号 K930/マ 2-8）が所蔵されている。

翻刻はNDL提供の全文テキストデータ（OCR）を下敷きに、原本画像と突合して補正した。※印は判読に自信のない箇所。